

第26回

三遠南信 サミット

2018 in 東三河

テーマ

三遠南信流域都市圏の創生
～日本の県境連携先進モデル～

2018.10.29 月

- 穂の国とよはし芸術劇場PLAT
- ホテルアークリッシュ豊橋
- ホテルアソシア豊橋

事業報告書

東三河

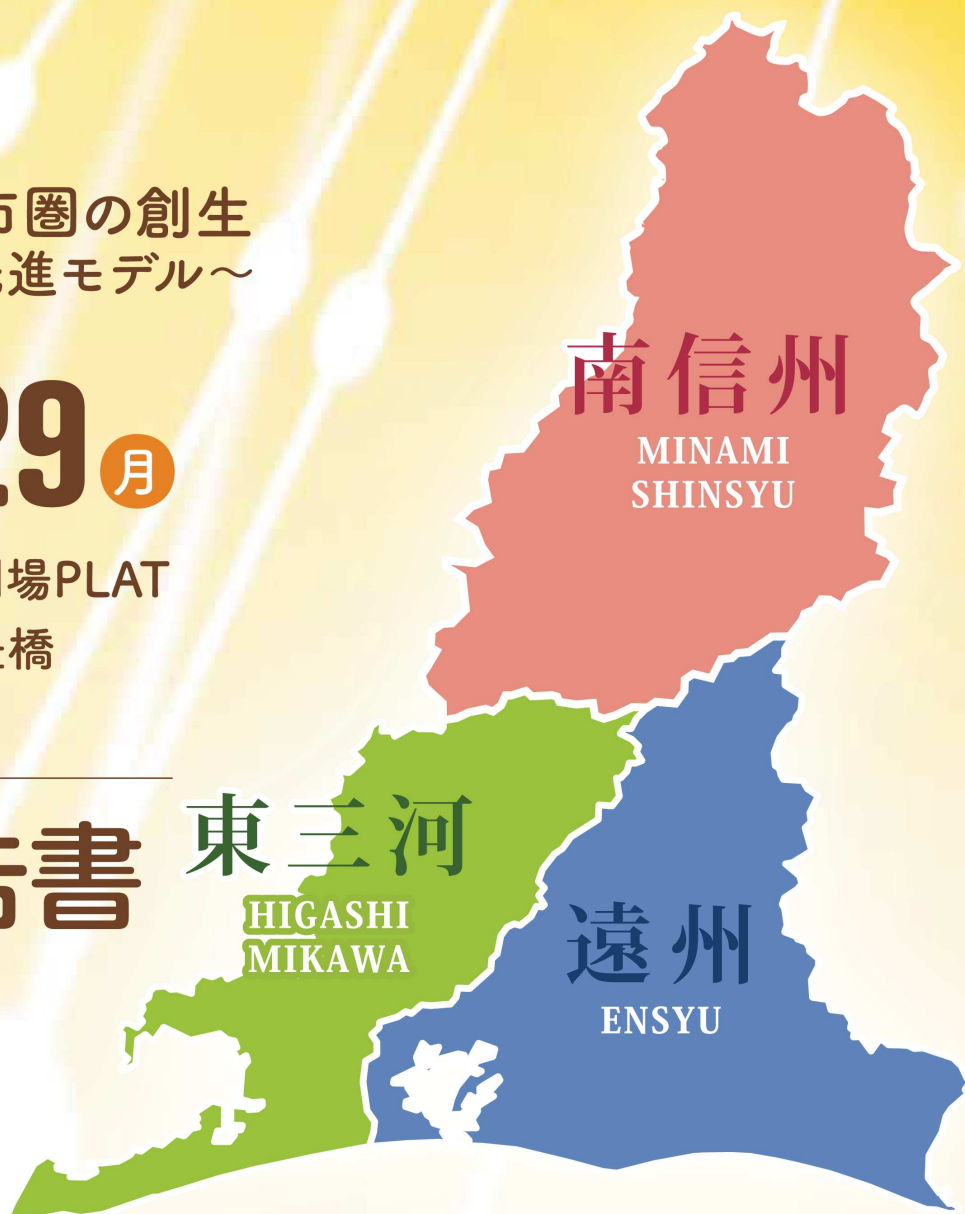
HIGASHI
MIKAWA

南信州

MINAMI
SHINSYU

遠州

ENSYU



目 次

1	第 26 回 三遠南信サミット 2018 in 東三河 プログラム	2
2	全体会 あいさつ	4
3	全体会 パネルディスカッション テーマ「新ビジョンへの期待」	9
4	「道」分科会	24
5	「技」分科会	40
6	「風土」分科会	56
7	「住・人」分科会	72
8	報告会	88
9	交流会	96
10	三遠南信地域住民セッション（同日開催）	97

- 日 時 平成 30 年 10 月 29 日 (月)
- 会 場 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT (豊橋市西小田原町 123 番地)
ホテルアークリッシュ豊橋 (豊橋市駅前大通 1-55)
ホテルアソシア豊橋 (豊橋市花田町西宿)
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議 (SENA)
- 共 催 三遠南信地域経済開発協議会
- 後 援 農林水産省、経済産業省、国土交通省
- 参加者 600 名
- 日 程
 - 1 全体会 (13:15~15:05) [場所: 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 主ホール]
 - あいさつ
 - ・主催者あいさつ
SENA 会長 (浜松市長) 鈴木 康友
 - ・開催地代表あいさつ
SENA 副会長 (豊橋市長) 佐原 光一
SENA 副会長 (豊橋商工会議所会頭) 神野 吾郎
 - ・来賓祝辞
国土交通省中部地方整備局 局長 勢田 昌功 氏
愛知県 副知事 加藤 慎也 氏
 - パネルディスカッション
 - ・テーマ 新ビジョンへの期待
 - ・コーディネーター 静岡文化芸術大学 副学長 池上 重弘 氏
(第 2 次三遠南信地域連携ビジョン策定委員会委員長)
 - ・パネリスト
国土交通省中部地方整備局 企画部長 岩田 美幸 氏
南信州・飯田産業センター 専務理事 萩本 範文 氏
浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 理事・事業本部長 前田 忍 氏
豊橋技術科学大学 副学長 井上 隆信 氏
SENA 会長 (浜松市長) 鈴木 康友

2 分科会（15：25～17：15）

○「道」分科会〔場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・グレイス A〕

コーディネーター	愛知大学 教授	戸田 敏行 氏
アドバイザー	国土交通省中部地方整備局 道路部長	池口 正晃 氏
報告者	中部地方整備局浜松河川国道事務所 所長	田中 里佳 氏
報告者	南信州新聞社 編集局記者	河原 俊文 氏

○「技」分科会〔場所：ホテルアソシア豊橋 ザ・ボールルーム A〕

コーディネーター	豊橋技術科学大学 副学長	大貝 彰 氏
アドバイザー	南信州・飯田産業センター 専務理事	萩本 範文 氏
報告者	豊橋市 産業部長	稲田 浩三 氏
報告者	新城のんほいリゾート実行委員会 WG サブリーダー	加藤 久明 氏

○「風土」分科会〔場所：ホテルアソシア豊橋 ザ・ボールルーム B〕

コーディネーター	法政大学 教授	高柳 俊男 氏
アドバイザー	浜松・浜名湖ソーリズムビューロー 理事・事業本部長	前田 忍 氏
報告者	JR 東海飯田支店 支店長	大坂 勝典 氏
報告者	南信州広域連合事務局 事務局次長	松江 良文 氏

○「住・人」分科会〔場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・グレイス B〕

コーディネーター	静岡文化芸術大学 副学長	池上 重弘 氏
アドバイザー	豊橋技術科学大学 副学長	井上 隆信 氏
報告者	LLP マリッジ・ローカル・コネクト 代表	木村 彩香 氏
報告者	NPO 未来化プロジェクト 理事	川端 務夢 氏

3 報告会（17：55～18：25）〔場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・テラスルーム〕

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 豊橋市長 佐原 光一
- ・次回開催地域代表挨拶 : 飯田市長 牧野 光朗

4 交流会（18：30～20：00）〔場所：ホテルアークリッシュ豊橋 ザ・グレイス〕

5 同日開催

- ・三遠南信地域住民セッション（10：00～12：00）
- ・三遠南信地域市町村長会議（10：30～11：30）
- ・SENA 拡大委員会（11：45～12：30）
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会（10：00～11：30）
- ・三遠南信地域市町村議会議長協議会総会（9：50～10：40）
- ・三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会総会（10：50～11：40）

主催者あいさつ

■ SENA 会長／浜松市長 鈴木康友



第26回三遠南信サミット2018in東三河に、関係省庁初め、地方公共団体、経済団体、大学、市民団体など、多くの皆様にお集まりをいただき、また日ごろは三遠南信自動車道の整備促進はじめ、三遠南信地域の連携事業において、皆様には大変ご尽力を賜っておりますことを厚く御礼を申し上げます。また、今回は豊橋市が会場ということで、佐原市長初め、豊橋市の皆様に大変お世話になりました。厚く御礼を申し上げます。

さて、今回のサミットは、昨年の8月から策定を進めております第2次三遠南信地域連携ビジョンの基本的合意をいただくという重要な回でございます。

第1次ビジョンの連携は、本年度の4月からは新たに辰野町、箕輪町、南箕輪村の3商工会が加わり、39市町村、3県、53商工会議所・商工会の95団体と多くの構成員や関係者の皆様のお力により推進をしてまいりまして、いよいよ第2次のビジョンに移ります。新ビジョンで目標とされている2030年までの10年余というのは、この地域にとって大変重要な時期を迎えます。

一つ目は、自治体を取り巻く環境が大変厳しくなっていることです。人口が減り、財政的にも税収が伸びていく時代では

ないにもかかわらず、社会保障費は毎年毎年伸びてまいりますし、また、老朽化したインフラをどう維持していくかという問題も抱えて、二重苦、三重苦の中で、これから自治体運営は、自治体間の連携というのが大変重要なキーワードになってまいります。そういう意味で、これまでも県境を越えた広域連携として全国をリードしてきたこの三遠南信地域の連携は、大変重要な時期を迎えます。

二つ目は、2030年までにリニア中央新幹線が開通する予定でございます。新たな東西の大動脈ができることになりまして、飯田市には長野県駅が設置され、南信州地域は大きく様変わりします。一方で、東海道新幹線もまた大きな変化をし、沿線地域もいろいろな意味でチャンスを迎えると思います。三遠南信自動車道も2030年までには大幅に整備が促進をされ、三遠南信地域の連携もまた大きく様変わりしてくるだろうと思っております。

こうした2030年までの大きな変化を見据えまして、新ビジョンを策定してまいりましたけれども、本日は、これを皆様にご議論いただき、次のステージに向けての第一歩となる、そういう重要な会議でございます。限られた時間ではございますけれども、活発なご議論をお願い申し上げます。

結びに当たりまして、本日のサミットが新たな時代を開く重要な会議となりますことを心から祈念いたしまして、開会に当たってのご挨拶にかえさせていただきます。

本日は、ご参加、まことにありがとうございました。

開催地代表あいさつ

■ SENA 副会長／豊橋市長 佐原光一



SENA副会長、豊橋市長の佐原でございます。

遠路はるばるこの豊橋市にお足をお運びいただき、本当にありがとうございます。心から皆様方を歓迎申し上げます。

さて、私からは、なぜこの連携をするかというお話をさせていただき、挨拶にかえさせていただきます。

実は、今日私は胸に、SDGsという国連の取り組みを象徴するバッジをつけています。このSDGsのバッジは17色で彩られていますが、これは17の開発目標を示しており、2015年9月に定められました。この目標を目指して世界でさまざまな取り組みをしているところがあります。

このSDGsは2001年に定められたMDGsの後継としてできました。MDGsは、主に途上国を様々な貧困から救うことを専らのメッセージとしていましたので、先進国ではあまり話題になることはなかったと思います。SDGsは、この地球を救うためには、先進国にも切迫した課題がたくさんあり、それに時間とお金を割けるのは今の時代が最後かもしれないという、世界全体で非常に重要な政策提案となっているものでございます。

17の目標のうち、前半はこれまでと同様、「みんながきれいな水が飲めるようにしましょう」、「食料が世界中の隅々まで行き渡るようにしましょう」、「教育をきちんと受けられるようにしましょう」ということが中心であります。後半に来ますと、先進国が持続可能な地球をつくるために求められている課題

がたくさん出てきています。そして17番目が、パートナーシップによって世界の問題を解決していきましょうという目標になっています。

私たちはいろいろな単位で連携をしています。例えば小さな単位では、家庭の中でお父さん、お母さんと子供さん、おじいちゃん、おばあちゃんがそれぞれ自分のことを行い、できないことを誰かに助けてもらう、という連携をしながら問題を解決していきます。地域のコミュニティにおいても、いろいろな家庭が集まって問題を解決していきます。市町村も同じです。そして、世界というレベルでは国同士で連携をしながら解決をしていきます。

そして、私たちは三遠南信という単位の中で、行政、大学、経済界や、市民一人一人がそれぞれ連携しており、それを世界に発信をしていく重要な取り組みだと考えております。これまでも、そしてこれからも、この地域が、みんなの力が、それぞれに連携し合って力を合わせて前に向かって進んでいく。そんな大きな取り組みの中心として、この三遠南信サミットがあります。そして、この場所に集まった人たちがそれぞれに、それぞれの分野の中でリーダーとして頑張っていかなければならない、このように思っています。

皆様方には、自分のことを、やらなければいけないことを発信、提案していただき、三遠南信の明るい未来のために、日本の中心としてこれからまだまだ力強く頑張っていけるように、力を合わせていただきたいと思います。

最後に、せっかく豊橋市にいらしたので、皆さんが存分にお楽しみいただけるように、私たちも精一杯のお手伝いをさせていただきます。

すばらしい会となるように心からお願いし、そして、ご祈念申し上げまして、私からの開催市としてのご挨拶とさせていただきます。本日は、ありがとうございました。

■ SENA 副会長／

豊橋商工会議所 会頭 神野吾郎



豊橋の商工会議所の会頭、神野と申します。開催市の商工会議所・商工会を代表して、一言ご挨拶をさせていただきたいと思っております。

本日は、三遠南信地域の行政並びに議会、商工会議所・商工会、住民団体の皆様方、この東三河の豊橋市へ足をお運びいただきまして、ありがとうございます。また、平素は、三遠南信地域の地域振興に格段のご配慮をいただいておりますご来賓の皆様方におかれましても、大変ご多忙のところ、お越しいただきまして、ありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

さて、世界の動向は目まぐるしく変化し、グローバルゼーションやテクノロジーの進化など、さまざまなことが起きていると思います。その中で、この日本がどのようなポジションを持ち、どのような未来を描くかという不安とともに、何とかそれを切り開いていかなければいけないなという思いを皆様方もお持ちなのではないかと思えます。

この三遠南信という、大きなポテンシャルを持ち、そしてもっとも可能性を広げることができるこの地域の取り組みを大きくしなければいけない局面に来ており、新ビジョンはまさしく、この地域が持つ歴史的な価値を大きく花開かせるものだと思います。私たちの力でオープン・イノベーション・プラットフォームをつくっていくことが大事だと思っておりますし、我々経済

人としても、大変これを期待するものです。産官学のいろいろなセクター、住民の皆さん方の取り組みを大きな力にとして結果を出していくことが必要だと思います。

1日のことですが、今日を一つの機会にして、議論がますます活発化し、行動に移り、実り多きものになるように、そして、いずれは世界中の人が三遠南信サミットに参加するというぐらいになるといいなと思っております。

限られた時間ですが、有意義な時間にしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

来賓祝辞

■ 国土交通省中部地方整備局

局長 勢田昌功氏



中部地方整備局長の勢田でございます。日ごろから国土交通行政、とりわけ中部地方整備局の取り組む三遠南信自動車道を中心とするさまざまな施策に特段のご支援・ご理解・ご協力をいただきまして、厚く御礼を申し上げたいと思っております。

本日、第26回三遠南信サミット2018in東三河に、これだけ多数の方が集まられて盛大に開催の運びになりましたこと、心よりお祝い申し上げます。

三遠南信サミットは、三つの地域が県域を越えて連携し、産官学民の方々が一体になりまして地域振興を図る先進的かつ画期的な取り組みであります。今回で26回目ということでございますが、長きにわたり継続的に活発な活動をされましたこと、さら

には、今回は第2次三遠南信地域連携ビジョンを取りまとめられる予定であるということ、深く敬意を表する次第でございます。

また、飯田市におきましては、2027年にリニア中央新幹線長野県駅が開通する予定で、その関連のプロジェクトも含めて、さまざまな取り組みも進められております。

中部地方整備局で整備を進めております三遠南信自動車道につきましては、今年度、佐久間・三遠道路におきまして、（仮称）佐久間インターチェンジから（仮称）東栄インターチェンジ間の延長6.9キロメートルの開通を目指し、着々と整備を進めております。また、これまで環境アセスメント手続を進めてきました水窪から佐久間間におきましても、10月25日に環境影響評価書の報告・縦覧を開始し、事業着手に向けて大きな一歩を歩み始めたところでございます。

皆様が進められている広域連携の取り組みが三遠南信自動車道等のネットワークを活用することによりさらに促進され、ひいては三遠南信地域連携ビジョンの実現のため、本日のサミットは重要かつ、大変意義深いものであると考えております。

本日の意見交換が活発に行われ、取り組みがより具体的に進展し、三遠南信地域がますます発展されることを祈念いたしまして、簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。

本日は、まことにおめでとうでございます。

■愛知県 副知事 加藤慎也 氏



愛知県副知事の加藤でございます。まずは、第26回三遠南信サミット2018in東三河、ご盛会まことにおめでとうでございます。本来であれば、大村秀章愛知県知事がこの場に参りまして皆様にお祝いの言葉を申し上げるところでございますが、要務により失礼をさせていただきます。私が大村知事から皆様様へのお祝いの言葉を預かってまいりましたので、代読をさせていただきますと思います。

本日、第26回目を迎える三遠南信サミットが、ここ愛知県豊橋市において、このように盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。また、ご臨席の皆様には、日ごろから本県行政の各般にわたりご支援・ご協力を賜っておりますことを、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。

さて、この三遠南信地域は、日本の中央に位置し、古くから東海道や遠州街道、塩の道と呼ばれる秋葉街道や三州街道など東西南北を結ぶ街道や、豊川、天竜川の水運などにより、人、物、情報、文化などが盛んに行き交う活力ある豊かな圏域を形成してまいりました。

今日でもこの地域には東名高速道路や中央自動車道、東海道新幹線に加え、平成28年2月に県内区間が開通した新東名高速道路などの国土の大動脈が走っております。将来的にも長野県飯田市に中間駅が設置されることとなっているリニア中央新幹線の

整備や、南北を結ぶ軸となる三遠南信自動車道の延伸が計画されているほか、浜松三ヶ日・豊橋道路にかかる調査が国において進められております。こうしたことなどから、当地域のポテンシャルが今後ますます高まり、産業や観光面などを中心に、地域のさらなる発展が期待されます。

そうした中、三遠南信地域では早くから県境を越えた広域での地域づくりの可能性に着目し、行政や経済団体が連携・協力して地域づくりを推進してまいりました。この慧眼と取り組みの先駆性に対し、関係者の一人として誇らしく感じているところでございます。

我が国が本格的な人口減少、超高齢社会を迎える中、こうした地域づくりの取り組みも、より効率的・効果的なものに進化していくことが求められております。そのためには、これまで以上に県や市町村の枠を越えて、知恵を出し合い、さまざまに連携・協力して取り組みの可能性を広げるなど、地域の総合力を最大限に発揮していくことが必要であります。この地域にはそれを実現できるだけの体制も実績もノウハウも十分そろっており、まさに本日のテーマに掲げられております「日本の県境連携先進モデル」へとさらなる進化、飛躍的な発展を遂げることを期待したいと思っております。

私ども愛知県におきましても、平成24年度に東三河県庁をスタートさせ、地元関係者の皆様とともに、地域が一体となってさまざまなプロジェクトを推進してまいりました。また、平成27年1月には東三河8市町村で構成する東三河広域連合が設立され、東三河地域における地域づくりの推進体制はさらに力強いものとなっております。

こうした中、三遠南信地域との連携については、東三河振興の柱として、引き続き力を入れて取り組んでまいりたいと考えております。本日は、「三遠南信流域都圏の創生～日本の県境連携先進モデル～」をテーマに意見交換が行われると伺っております。

皆様方がこれまで積み重ねてこられた取り組みの成果を踏まえ、活発で充実した議論が交わされることを期待いたしております。

最後になりますが、本日のサミットのご成功と三遠南信地域の連携の強化、さらなる発展を祈念いたしまして、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

以上、代読をさせていただきました。本日はまことにおめでとうございます。

3 全体会 パネルディスカッション テーマ「新ビジョンへの期待」

San-En-Nanshin Summit 2018 in Higashimikawa

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	静岡文化芸術大学／ 第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員会	副学長／ 委員長	池上 重弘
パネリスト	国土交通省中部地方整備局	企画部長	岩田 美幸
パネリスト	南信州・飯田産業センター	専務理事	萩本 範文
パネリスト	浜松・浜名湖ツーリズムビューロー	理事・ 事業本部長	前田 忍
パネリスト	豊橋技術科学大学	副学長	井上 隆信
パネリスト	SENA／浜松市	会長／市長	鈴木 康友



新ビジョン（案）概要説明

SENA 事務局長 久米秀幸

SENA 事務局長の久米でございます。

本日は、たくさんの皆様にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。また、これまで第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定に当たり、ご理解・ご協力をいただき、まことにありがとうございます。おかげさまで、本日、新ビジョンの案を皆様の前に披露できることを大変感謝しております。

まず、2030年までに起こる五つのことについてお話しします。

まず、一つ目、人口が減少します。2030年には、三遠南信地域の人口は、ピーク時の250万人から226万人に減少します。また、日本は既に2010年に超高齢社会に突入し、

2030年には65歳以上の人口が30%を超えます。人口も2050年には1億人を切ることになります。三遠南信地域も2050年には200万人を切ります。これらの変化が徐々に進行するため、実態として気づきにくいのではないかと考えております。

二つ目の三遠南信自動車道、三つ目のリニア中央新幹線は、2027年までの開業が期待されます。

そして、四つ目の6,000万人という数字でございますが、これは2030年の訪日外国人観光客の数を言っております。

五つ目は、Society5.0です。あらゆる文書、情報、通貨、これらの全てのものが電子化され、つながる社会です。また、人間中心の社会とも言われています。2030年には相当程度電子化が進み、便利になったスマートシティ、スマート自治体があらわれることでしょう。

SENA2.0、これは今回初めて皆様の前で披露させていただきます。先ほど言った5項目、これらのことが全て起こった未来、2030年の三遠南信地域の姿をSENA2.0、三遠南信地域バージョン2.0と呼びたいと思っております。リニアや三遠南信自動車道ができて、このインフラをどう使うかが課題とな

ってきます。また、お金2.0、モビリティ2.0、あるいはインダストリー4.0、こういったものと並んで SENA2.0が語られると大変うれしく思います。

新ビジョンは、平成29年2月に開催されました第24回三遠南信サミットのサミット宣言において策定することが合意されました。以後、静岡文化芸術大学の池上副学長に策定委員長に就任いただきまして、平成29年8月から平成30年9月まで、5回の策定委員会を開催してまいりました。本日、サミット全体を通して基本合意してまいります。

新ビジョンのテーマは、「三遠南信流域都市圏の創生」です。天竜川や豊川の流域を基軸とする都市圏において、圏域の住民が持続的発展と自立を目指すという意味です。また、約30年の蓄積を持つこの地域の連携活動が、日本の県境連携を牽引し我が国の地方創生に貢献することを目指します。

次に新ビジョンが目指す3つの地域像です。国土形成計画では、東京・大阪間がリニア中央新幹線で結ばれスーパー・メガリジョンが形成されるとしており、三遠南信地域もこの一部として大都市圏や世界と結ばれる地域を目指してまいります。

2点目として、中部圏においては、名古屋都市圏に隣接する中核都市圏として名古屋都市圏との連携を図ります。

3点目は、環境面から経済活動に至るまで、上下流域の域内循環を目指します。

SENA は、三遠南信地域の価値や課題を共有する主体間のプラットフォームづくりを促進し、連携活動をより一層高めてまいります。

次の地域連携の方針につきましては、昨年のサミットでご提示したものと同様でございます。

次に重点プロジェクトでございます。

1点目が、「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」です。

ビジョンの根幹となるプロジェクトです。この地域の大きな課題は、本来、地理的か

つ文化的に連担する地域でありながら、地域全体を俯瞰しマネジメントする地方公共団体が存在しないことです。地域の全体のそれぞれの道路や公共交通を持つ役割を改めて考えてまいります。

2点目が、「三遠南信圏民の一体感醸成プロジェクト」です。

現在の府県制度の枠組みが確立すると、この地域は3県に分断されることとなりました。分断後130年が経過した現在、各主体で温度差があることも感じております。しかし、将来に目を向ければ、三遠南信自動車道を中心とする南北軸と東西軸の整備が進むことで交流の活発化が期待できます。三遠南信自動車道の整備の進展にあわせ、流域都市圏の住民、すなわち三遠南信圏民の一体感を醸成してまいります。

3点目は、「地域の稼ぐ力強化プロジェクト」です。

地域内の産業創造力を強化するため、IoTやAIなどの新技術を取り込むとともに、農産物などの販路拡大、新産業の創出、産業連携活動を促進します。

4点目は、「三遠南信探訪プロジェクト」です。

飯田線を活用した日本遺産への登録は残念ながらかないませんでした。チャレンジしたことで地域の観光資源をより理解することができました。リニア中央新幹線の開業により、リニア駅と東海道新幹線駅を玄関口として、東京や名古屋方面からの周遊観光が可能となります。また、南北軸の道路の整備の進展により、南アルプスや中央アルプス、浜名湖や太平洋沿岸部は、互いの地域住民にとって今よりずっと身近な物になるでしょう。訪日外国人観光客の増加も大いに期待でき、一つ一つの観光の素材を磨き、ストーリーを持たせることが重要です。

5点目は、「中山間地域が輝くプロジェクト」です。

中山間地域において過疎化は脅威となり

ますが、周辺都市部の存在や自治体間の連携により、住民交流事業を推進します。地域おこし協力隊の定着化も進んでいる地域もあり、成功事例を共有してまいります。また、中山間地域の貴重な伝統芸能である花祭りや霜月祭りなどの神楽や田楽が来月から3月にかけて活発に行われます。どうぞ足をお運びください。

6点目は、「住むなら三遠南信プロジェクト」です。

都市部への人口流出傾向は続きますが、この地域は、豊かな自然が都市部にも近接することから、移住先として全国トップクラスの人気を誇ります。ふるさと回帰支援センターの移住先ランキングでは、長野県が1位、静岡県が3位となっております。こうした強みを生かし、移住・促進の取り組みをさらに進めるとともに、地域の安全・安心の確保に努めてまいります。

最後に、7点目は、「人生100年時代プロジェクト」です。

今後、日本人の寿命はさらに伸びることが想定されており、このことを成長機会と捉え、人生100年時代を見据えた人材の育成や定着のための交流活動を推進します。また、三遠南信地域に係る地域教育を通じて地域への理解を深め、地域社会への貢献や参画を促してまいります。

次に推進スケジュールでございます。毎年の事業の進捗状況の把握を通じて、4年ごとに重点プロジェクトの評価・見直しを行ってまいります。

今後のスケジュールとしまして、11月からパブリックコメントを実施し、年度内には SENA 総会においてビジョンを決議してまいります。

説明は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

■コーディネーター

静岡文化芸術大学 副学長 池上重弘 氏



こんにちは、静岡文化芸術大学の池上です。新ビジョン策定委員会の委員長を務めたという経緯がございまして、きょうの司会も務めてまいります。

このパネルディスカッションは、「新ビジョンへの期待」という題目のもとに、三遠南信地域の各分野においてご活躍されている5名の方々にお集まりいただきました。先ほど事務局から説明のあった新ビジョン案は、来年度、2019年度からスタートし、目標年が2030年に設定されています。東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年が近くなってきて、その次の区切りである2030年を、皆様意識し始めているのではないのでしょうか。その2030年に向けて、三遠南信地域がどのようにあるべきなのか、パネリストそれぞれのお立場からご意見をいただきたいと思います。

全体を大きく二つのパートに分け、前半のパートを「2030年の展望」、後半のパートを「新ビジョンへの期待」として、それぞれお一人ずつお話をいただくつもりでございます。

それでは、まず、2030年の展望について、SENAの会長でもある浜松市の鈴木康友市長にご意見をお願いしたいと思います。

■ 浜松市長／SENA 会長 鈴木康友



私からは、少し大きな時代認識、問題意識と、新ビジョンの重要性という視点でお話をしたいと思います。

冒頭からいろいろご指摘ありますように、日本は本格的な人口減少時代に突入しています。これはもう避けては通れず、現実として受けとめていかなければなりません。このことが一つこの転機になったのは、私は増田レポートであったというふうに思います。2014年に、日本創成会議の人口問題減少検討分科会の増田寛也さんが座長を務めていますので、通称「増田レポート」と言うのですが、2040年までの人口減少のインパクトが、各自治体にどのくらいのあるかというのを全部シミュレーションして発表しました。それまでも人口減少の漠然としたイメージはあったのですが、このレポートは衝撃的でした。現在1,800くらいある自治体のうち、約半分の896の自治体で、20歳から39歳までの、いわゆる出産適齢期といわれる若い女性が半分以下になるとのことで、その多くが、消滅可能性都市と呼ばれました。別にそのエリアが消えるわけではなくて、自治体としてももう運営していきませんよ、という警鐘を鳴らしたわけです。これを受けて、もうご存じのとおり、総務省が全自治体に人口ビジョンと総合戦略の策定を命じたわけであります。

浜松市も人口ビジョンをつくりまして、最もいいシナリオで言っても、現在80万人の浜松市の人口から20万人減って60万人になります。一番いいシナリオにとどめるた

めには、出生率を2025年までに1.84、2035年までに2.07、に回復をしなければいけません。

いずれにしても、20万人は減ることを前提に、将来に向けての備えをしていかなければいけないということでございます。多くの自治体の皆さんも、そうした危機感をお持ちだろうと思いますし、持っていない方はぜひ持っていただきたいというふうに思います。

さらに、総務省が「自治体戦略2040」というものを立ち上げ、その最終レポートが出たわけですが、それにも大変厳しいことがうたわれています。そこには、今後自治体は、単独で運営していけなくなるので、自治体は制度や組織、地域の垣根を越えて、資源を賢く戦略的に活用する必要があります、とあります。要は、公共施設も公務員などの人材も、みんなで連携して補完しながらやっていかないとやっていけませんよ、ということなのです。これが我々に突きつけられた現実であります。

そこで、我々は二つのことをしなければなりません。一つは、それぞれの自治体が全部自分たちでやるというフルセット主義を廃止して、広域で連携し、それぞれの得意の分野等を活用しながら不足する部分を補っていく補完関係をつくることと、もう一つは、劇的に進んでいるAIなどの技術を活用して省力化に努めていくということです。我々自治体も、窓口業務は全部、人間ではなくて機械が行い、極力必要なところに必要な人材を充てていかないと、公務員の確保もできない時代が来るとことでございます。

こういった危機感を持つ一方で、こうした大きな時代の変化を、この三遠南信地域はチャンスとして捉えていくべきではないかというふうに思います。なぜかという、一つは、これまでの連携の実績があるということです。光・電子技術イノベーション創出に向けた取り組みや、自治体を越えた

広域の産学官連携や人財育成円卓会議、あるいは、広域の災害時相互応援協定の締結、私たちが保有している消防ヘリコプターの県境を越えた広域運用など、さまざまな取り組みを、より進化させ、これからの時代に合わせていくことが大切です。

それともう一つは、リニア中央新幹線が開通し、それに伴い東海道新幹線の利便性も向上しますし、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路の整備も促進され、この地域の連携が活発化します。これを生かして新たな連携の時代を切り開いていくために、そのベースとなるのがこの新ビジョンではないかと思っています。

これまでも、県境を越えた広域連携の先進的な取り組みとして三遠南信地域は全国的に注目をされてきたわけですが、新たな時代を迎えるに当たって、我々は一層その自覚を持ってこの連携を進めていく必要があると確信をしております。

■コーディネーター

ありがとうございました。非常に明確に大きな視点での位置づけのお話をいただきました。

人口減少という時代に、これからはもうフルセット主義というのは廃止しなければいけない、より広い範囲での連携が必要であるとのことでした。それから、人材がしかるべきところで活躍するためには、AI等の活用による省力化も欠かせないというお話もありました。

しかしながら、この状況をチャンスとして捉えて考えていくと、この三遠南信地域は既に連携の実績があって、2030年までにこの地域はインフラが整い、新ビジョンはまさにこれからの連携の時代の先駆であり、私たちの動きを日本全国が注視する時代になるのでは、というご発言をいただきました。

それでは、続きまして、中部地方整備局の岩田美幸企画部長にお話をお願いします。

■中部地方整備局 企画部長 岩田美幸 氏



中部地方整備局の岩田でございます。まず、この地域の位置づけからお話しさせていただこうと思います。

最初に国土形成計画のお話でございます。国づくりの目標を実現するために二つのことを挙げております。一つは対流促進型国土、もう一つは、コンパクト＋ネットワークです。対流は、交流とは違い、熱源が人や物を回すという意味で、その対流を促進するということを考えていきたいと思っています。

次に、スーパー・メガリージョンについてですが、三大都市圏については一体化し、中間駅周辺はクリエイティビティと地域の魅力の融合による新たな拠点の形成、としています。

次に、中部地方ではどのように位置づけているかということですが、「暮らしやすさと歴史に彩られた世界のものづくり対流拠点」と将来像を据えて、「世界最強、最先端のものづくり」「リニア効果を最大化する」、「南海トラフなどの災害にも強く」という三つの方向性を示しています。そして具体的にどうするかという五つの方針のうち、三遠南信地域は方針2、方針3に、スーパー・メガリージョンのセンターであり、地域の個性と対流による地域の創生として位置づけられています。全ての方針に関連はするのですが、例示的に広域連携の先進に行く三遠南信地域連携として、食品産業や航空機産業などのネットワークをしていることと位置づけております。

この地域の歴史をひもといていくと、塩の道や秋葉街道を中心とした歴史・信仰の道、あるいは天竜川、豊川を中心とする川の道、加えて、武田信玄がここを通過して三河にやってきたことなど、交流の歴史があるということでございます。

未来に目を向けると、リニアの中央新幹線の構想です。スピードは東海道新幹線の1.8倍で、距離は2割ほど短くなり、東京と名古屋を40分、東京と大阪を1時間強で結び、名古屋までは2027年に、大阪までは2045年から最大8年間前倒して開業するという計画でございます。これによって、三大都市圏が1時間圏となる大きな一つの圏域、人口7,000万人のスーパー・メガリージョンが形成されます。

そういう中で、我々と浜松市、長野県と一緒に三遠南信自動車道の整備を進めております。今年は佐久間から東栄の間、6.9キロを開通させていただく予定で進めておりますし、水窪から佐久間のアセスに新たな手続を進めるなど、順調に進めさせていただいているところでございます。

三遠南信自動車道の開通効果ですが、高速のインターチェンジに60分間で到達できる地域が広がり、アクセス性がよくなります。また、災害時には、関東や北陸整備局から TEC-FORCE という応援をいただくことになっていますが、彼らがスムーズに来られるのではないかと考えています。

さらにこれを豊橋方面にもつなげるために、浜松三ヶ日・豊橋道路連絡調整会議という地域の方々のご協力を得て、本年4月に、三ヶ日ジャンクションと三河港を起終点とする道路を考えていくことを発表させていただき、これを進めていきたいと考えているところです。

これらが完成すると、東名高速道路、新東名高速道路、東海道新幹線、さらにはリニア中央新幹線の東西軸に加えて、南北軸を広げ、重層的な交通ネットワークを整備してまいりたいと考えています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

非常に遠大な未来のビジョンがビジュアルライズされて出てまいりました。対流という言葉は、熱源が人を回すという非常に意味のある、含蓄のある言葉だなと思って聞いておりました。この地域は、世界のものづくりの対流拠点になるというビジョンを示していただきました。

また、この地域は、スーパー・メガリージョンのセンターとなり、地域の個性と対流による地域創生がこの地域の向こう10年の姿であるということでした。そして東西軸が整備されることで南北軸も充実し、重層的で立体的な人の動きが実現するというお話を伺いました。ありがとうございました。

それでは、続きまして、南信州・飯田産業センターの萩本範文専務理事にお話をお願いいたします。

■南信州・飯田産業センター 専務理事 萩本範文 氏



産業革新が世の中に何をもたらすのかというあたりからお話をさせていただきたいと思います。

現在、AI、IoT、インダストリー4.0などが盛んに叫ばれまして、産業技術の変化は目を覆うばかりのスピードでございます。例えば、この地域の大きな関心事でございます自動車技術の変化もまた極めて深刻な課題となっています。もし、エンジンがモーターになりトランスミッションが電子制

御回路に変わったら産業はどうなるのでしょうか。工場の形態はまるで変わり、産業構造は全く別の姿になるかもしれません。また、それと同時に、自動車のEV化でありますとか自動運転、カーシェアリングがますます現実味を帯びてくる中、単なる産業技術論にはおさまらないSociety5.0の論議へと発展するだろうと思っています。

だから、こうした変化を今までの論議の延長線上で語るのは危険だと思っています。今回提案されます新ビジョンでは、いろいろな既存産業の活力増進、産業創造力の強化と書かれ、「革新を取り込む産業創造圏の形成を目指す」とされていますが、何をなすべきか、わかりにくくなっています。ビジョンは抽象的・概念的でよいと言えませんが、それまでとは思いますが、革新を必要とする今だからこそ、個別具体性のあるビジョンをつくる必要があるのではないでしょうか。

そのために、まず、個別課題を明らかにし、問題解決のための地域としての仕組みを考え、それをつくることが重要な第一歩になると思います。大雨になる前に屋根を繕っておこうということですが、そのためには、まず、根拠に基づく危機感の共有から始める必要があります。それがなければ連帯は生まれませんし、本質にも迫れません。トヨタとソフトバンクの連携のように、大手企業は既にいろいろな手だてを考えていると思いますが、地域を支える下請型の中小企業が蚊帳の外ではいけません。

三遠南信地域のこうした連携運動に大手企業の参加が少ないのも少し気になるところでございます。大手企業を初め、技術変化に追従できる一部の集団には大した問題にはならないかもしれませんが、サプライチェーンから放り出される中小企業には革新を取り込む新しい産業創造圏の形成が必要になると思います。それは、新しい時代のニーズを洗い出し、今までにはないような異業種同志が連携し、地域を越えて結びつく、全く新しい技術への挑戦が必要であ

ります。

では、具体的にどうしたらよいのかということでございます。

まずは、その変化を熟知している産学官の知恵のある方によって集団をつくり、その課題をレビューし、具体的な取り組みテーマを産業ビジョンとしてまとめ上げることから始めなければならないと思います。

次に、推進クラスターを目指して、組織をつくり、大学や公設試、あるいは中核企業などを核としたクラスターをつくることではないでしょうか。飯田市でつくりました「知の拠点」構想と航空機システム産業のクラスターは一つの具体例でございます。それが航空機システム産業を地域につくろうという運動であり、挑戦でございました。長野県は全国で初めて県として長野県航空機産業振興ビジョンをつくり、ビジョンの中で具体的な取り組みテーマを明らかにし、成果へとつながる道筋を明らかにいたしました。三遠南信というような行政区画を越えた圏域でどういう取り組みができるのか、私にはまだそれはわかっておりませんが、新たな手法を開発しないと具体的な成果にはつながらないのではないかと思います。

少し視点を変えさせていただきますが、飯田市にはリニア中央新幹線が9年後に開通し、今はまだ想像もできないような世界が生まれようとしていると思います。三遠南信地域の中で、飯田市の産業規模、人口規模、交通の利便性から、今までこうした会議の、同じテーブルで論議をすることに難しさを感じてまいりました。それがリニア中央新幹線の開通によって、東海道新幹線を抱える浜松市、豊橋市と飯田市が同格に、そして、全く違った役割を持って論議に加わることでできる時代が来るのだらうと想像しているところでございます。

このリニア中央新幹線から得られる地域としての可能性をいよいよ真剣に論議すべきときが来ました。例えば、リニア中央新幹線と東海道新幹線を単なる複線化、バイ

パスと捉えるのではなく、別の乗り物として考えれば、新しい見方、新しい価値がそこには見えてくるかもしれません。リニア中央新幹線が開通すると飯田は名古屋にぐっと近づいてまいります。そして、東京は、飯田を通るパスのほうのはるかに近く、大きなパスになってまいります。この時間で見ると豊橋、飯田、浜松、三つの街の位置関係を、この絵から感じ取っていただきたいと思います。

そして、そこから見える三遠南信地域には、従来の地域間にはこだわらない地域づくりが求められるのではないのでしょうか。現在でも、県境を越えた先進的な取り組みとして評価されているこの三遠南信地域がありますが、今後は、行政区画を越えた政令特区のような形にして取り組むのはいかがでしょうか。そして、今までできなかったような思い切った政策、例えば、海外から先進的な企業を誘致するとか、新しい人材や技術を誘致し、先進モビリティと新しい社会をつくるとか、農業とバイオの融合研究、食料と健康・医療、あるいは自然と健康などの統合的な課題に取り組むことや、新しい国土を企画・創造するランドスケープデザインの大学院大学を創学するなど、全く新しい企画・文化づくりが必要になってくるように思っています。

先ほどもお話がありましたように、国土交通省では昨年、リニア中央新幹線時代に向けてスーパー・メガリージョンが構想され、7,000万人都市をつくるという検討を始めています。そこで、この三遠南信地域を、7,000万人都市市民のメガリージョン・オアシスと位置づけ、7,000万人都市市民の憩いの場所にすると同時に、先端科学と伝統文化が織りなす不思議な国、おとぎの国づくりを目指し、思い切ったインバウンド政策で外国人を誘致し、3県の県境域に国際都市をつくるなども一つのアイデアかもしれません。

■コーディネーター

ありがとうございました。

現状のビジョンに対して、もっと具体的な産業ビジョンの構築が必要だという辛口ながら非常に現実的なお話をいただきました。

また、先ほど岩田企画部長から見せていただいた図、その先にどういう関係が新たに生まれてくるかというビジョンもお示しいただきました。政令特区として思い切った政策を進めていくような、そういった未来についてもご教示いただいたところでございます。

それでは、続きまして、浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 前田 忍 事業本部長にお願いいたします。

■浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 理事・事業本部長 前田 忍 氏



観光分野に関しまして意見を述べさせていただきます。

まず、愛知、長野、静岡、この三遠南信地域にかかわる3県の人口の推移をお示いたします。人口に対する高齢化比率をそれぞれ見ていきますと、愛知県は2014年、2040年においても全国の平均と比べて高齢化比率はまだ低い状況で、静岡県は全国平均値とほぼイコールの状況になります。一方で長野県の高齢化比率は大きく高まり、この三遠南信地域でも県の立ち位置がそれぞれ違うということをご理解いただきたいと思います。また、各県の中におきましても、行政区単位で大きくその高齢化比率が

違うというところもご理解いただきたいと思います。

例えば、大井川鐵道の終着駅である千頭駅のある川根本町を例に挙げますと、人口は年10%前後で減少しているということで、それを変えるために IT への投資などいろいろな事業を展開しております。県単位ではなく、市町村単位でその動向を見なければいけないと思っています。

次に国が進めておりますインバウンドの状況を改めてお示しいたします。2017年の訪日外国人は2,869万人という実績が公表されました。また、2020年は4,000万人、そして、2030年は6,000万人を目指すというふうにっております。では、2017年の訪日外国人の国別の統計を見ていきますと、中国と韓国で大半を占めている状況です。一方で、来年2019年、それが大きく変わる可能性がございます。それは、ラグビーワールドカップ2019です。9月から11月の44日間、12都市での開催がございますけれども、経済波及効果は4,372億円、訪日外国人は40万人、その訪日外国人の消費額は1,057億円という読みをしており、日本の経済をよい意味で動かす一大イベントになっております。今は中国、韓国で大半を占めているこの訪日外国人であります。2019年にはアメリカ、オーストラリア、イギリス、フランス、イタリアなどのラグビー人口の多い国の方々が、2020年にはオリンピック・パラリンピックで、2年続いて欧州、豪州の方々の増加が見えているという状況です。

ではなぜ国が、訪日外国人を伸ばし、かつ、より受け入れを強化しようと言っているのかということをお改めにご説明をさせていただきます。総務省からの発表では、日本人の定住人口の1人当たりの消費額の平均は、年間124万円とございます。それに対して、訪日外国人の1旅行当たりの消費額は平均で15万円強と観光庁から出ております。つまり、人口が1人減少するのを、8人の訪日外国人でカバーできるということ

になります。

また、さらにこの訪日外国人の消費金額にも大きく二つございます。

外国人の団体ツアーのお客様の消費額と、個人手配者、いわゆる FIT と呼ばれる訪日外国人の方の消費額を比べると、約1.7倍個人の方が方が消費すると言われております。今後の人口減少を訪日外国人でカバーしようというのが国の施策になっています。

では、その訪日外国人の方がこういったニーズで日本に来ているのかということですが、大きなニーズ三つです。まずは日本文化、次に地域のローカル文化、そして地域住民との会話やおもてなしなど住民との交流の3つです。日本流の、しかも地域のローカルに基づいたものを体感することによって、訪日外国人の方々はご自身の SNS で大きく情報を発信してくれます。それをまたフォロワーの外国人が見ることによって、コアな情報をもとに日本を訪れます。これは、外国人観光客の情報ソースが、旅行会社から提案を受けるということよりも、個人の情報を頼りにしているからです。

最後に、北海道で私が経営破綻したホテルを再生した際に、タイから定期的な受注をいただいていたときの状況を例として挙げさせていただきます。

月に2、3件は必ずタイからの団体の方がお見えになっていますが、団体といっても15名から50名というところです。その方々は、やはり日本の文化や、地域の人材交流を求めて来ていただいています。ホテルに着いたら浴衣に着がえていただき、そして、宴会では地域の方々の阿波踊りを見ていただいたり、一緒に踊ったりしていただきます。

そこでは、ホテルだけではなくて、行政や観光協会など、地域全体でおもてなしするということが、お客様にしっかり伝わることで定期的な受注をいただいております。これによって、地域全体の経済効果も非常に高まっております。

三遠南信地域におきましては、非常に広域で、県同士の状況、また市町村単位の状況も違い、地域ごとの文化も大きく違っています。それぞれの地域の文化の独自性によって差別化し、お客様にお越しいただけるような環境づくりをこの2019年、2020年、そして、2030年に向けて、SENA2.0の実現に向けてしっかり歩まなければいけないと私自身も感じております。

■コーディネーター

ありがとうございました。

三遠南信地域と一言言うけれども、地域によって高齢化率は随分違います。その中の浜松市一つとっても、都市部もあれば中山間地もあるという認識を私たちは持っております。

日本人の1人当たりの消費とインバウンド観光客の消費8人分がほぼ等しいということ、私も今回初めて知ることができました。

実は先日、夏休みに新潟県の十日町市、それから、津南町というところに行ってきました。大地の芸術祭というのが3年に1回あって、ものすごい山の中なのですが、そこが現代アートでいっぱいになります。バスに乗ってツアーで回ったのですが、何とお客さんの半分以上が中国の若い人たちでした。まさに友達から情報を聞いたと言ってやって来るような人たちがいて、その地域の文化を差別化して発信することがいかに大事か、改めて思い知った次第であります。観光カリスマというタイトルで広く知られた山田桂一郎さんという人が、「今だけ、ここだけ、あなただけ」という言葉でよく言うのですが、どこに行っても同じではなくて、ここに来たらこそ味わる、そういう独自の文化を発信するという意味で、この三遠南信地域というのは非常に豊かな資源を持っているなと改めて感じました。

それでは、豊橋技術科学大学の井上隆信

副学長、お願いいたします。

■豊橋技術科学大学 副学長 井上隆信 氏



それでは、人材育成の観点から、2030年、こうあったらいいなというところを少しお話しさせていただきたいと思います。

まず初めに、人口減少は、大学でもいかに学生を獲得するか、ということで非常に問題になっています。

一つ目は、就職を見据えた地域の大学への入学生の確保です。大志を抱いた学生にも来てもらいたいですが、将来地域に就職して、この地域ですっと生きたい、そういう方に地元の大学へ進学してもらえるように、高校生に向けてアピールしていくことが重要なと思っています。それからこの地域には、就職先があって、住環境も非常によく、都会より住むのにいいよね、と考える学生にこの地域の大学に入ってもらいたいと思います。さらに、学生が来たらその親も一緒にこの地域に来て、職を見つけて定住してもらえるかもしれません。

ただ、人口減少は進んでいきます。そうすると次に目を向けるのが海外からの留学生です。豊橋技術科学大学でも留学生の比率は現在10%を超えております。2,000人のうちの220名程度が留学生です。留学生は母国語ができて、英語もできて、日本語もできて、非常に優秀な人材で、中には日本で就職したいという学生もいます。そういった学生がこの地域に在学していますので、この地域で就学先、就職先ができれば、地域の優秀な人材確保にもつながるのかなと

思います。ひいては、その企業がアジア地域への進出の足がかりにもなれば、この地域の発展に貢献できるかもしれない、と考えています。

次に、農業の人材育成にも力を入れている中で、従来の農業よりももうかる農業をしていかないと、若い人材は集まらないのではないかと感じています。人材育成事業の修了生の中で、1億円以上の売上をあげている方が10名程度いて、植物工場などを利用すれば、高収益の作物栽培が可能になります。三遠南信地域には、まだまだ農業地域がたくさんあり、ひょっとするとこの地域が一大農業地域として活性化するのではないのかとも思っています。ただ、個人経営となるとなかなか大変なところもありますので、農業の企業なども加わって、クラスターの広域拠点が形成できればいいなと思っております。

リニア中央新幹線が開業し、東京、大阪がさらに近くなると、例えばこの地域の植物工場で夜間に収穫し早朝に出発すれば、その日のディナーにはその農産物を、新鮮な野菜、果物として提供できます。このようなビジネスがもし成り立てば、一次産業が活性化していくのではないか、という願いになります。

3点目は、リカレント教育も考えていかなければいけないと思います。しかし大学まで足を運んでもらうのはなかなか難しいので、我々としてはeラーニングのようなものを充実させなければいけないですし、起業家の教育、アントレプレナー教育にも取り組んでいかなければいけないと考えています。先ほどお話しました、新規就農者の教育でも、個人経営では、農業だけでなく、経営のことも理解しないと、個人で1億円以上の規模の農業はできません。そういったことができるような教育をしていきたいと思っております。

最後になりますが、大学というのが今まで閉じた世界で、地域の方々等との交わり

にあまり積極的ではなかったところも反省しないといけないところで、もう少し大学を利用してもらいたいと思っています。例えば、IT技術のようなものは進歩が非常に早く、かつて大学で習ったことが、今通用するかというと、そうではありません。そういったものをもう一度学び直すということで、大学を活用してもらえればなと思います。それから、災害への備えとなりますBCP計画などは、大企業ではされているのですけれども、中小企業ではなかなかされておらず、そういったことのお手伝いを一緒になってすることも可能です。研究開発部門を自社で抱えることができない小さな企業に大学の教員をうまく使ってもらって、よりよい製品の開発をするなど、2030年には地域と大学が一体となってこの地域を盛り上げていくことができればいいなと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございました。

私も大学に身を置く者ですから、大学においても人口減少、学生の減少をどうしていくかというのは非常に切実な課題であります。まずは地元の高校生やその保護者に対するアピールや、全体の1割を超えている留学生をぜひ地元にとどめて、さらにその留学生が媒体となって地元企業がアジア等に進出していく、という学生に関するお話しをいただきました。

それから、農業の活性化、クラスターの広域拠点化、さらに、知識・技能等をブラッシュアップするリカレント教育、eラーニングや起業家教育等についてのビジョンもお話しいただきました。

そして最後に、地元企業への貢献など、地域の皆さんとかかわりながら大学の知を地域に還元していく、というお話しもいただきました。

それでは、ここからは、来年度からスタートする「新ビジョンへの期待」というこ

とで、お話をいただきたいと思います。

では、最初に、中部地方整備局の岩田企画部長からお願いします。

■中部地方整備局 企画部長 岩田美幸 氏

先ほど、これからのリニア中央新幹線を中心とした高速交通体系についてお話しさせていただきましたので、それから派生二つの期待を申したいと思います。

一つは観光でございまして、三大都市圏よりも、それ以外の地域のほうが最近宿泊数がふえてきています。この地域でも、傾向としては増えてきていますので、この勢いがさらに続いていくといいなと思う次第です。国内で考えると、東京からリニア中央新幹線、三遠南信自動車道、東海道新幹線を活用し、地域の観光資源を磨いて、1泊2日の周遊ルートができるといいと思います。昇龍道という中部を含む中日本のモデルルートがございまして、抜けている部分があり、ここを早くつないでいきたいと考えています。

続いて2点目ですが、近年、新たなライフスタイルについて、シニアの方だけでなく若者の関心が増しています。これからリニア中央新幹線ができるわけですから、高速交通体系とテレワークを組み合わせ、ワーク・ライフ・バランスが非常にとれた快適な仕事の仕方というものを提案できるように進めていただけるというのもいいのではないかと思います。総務省の実験により、ライフが充実すると生産性も向上するという実験結果もあるようでございますので、ぜひこの地域がそういう形で発展することをお祈りする次第でございます。

■コーディネーター

インフラの整備をもとにした新しい生きざまの提案をいただきました。

それでは、南信州・飯田産業センターの萩本専務理事、お願いします。

■南信州・飯田産業センター

専務理事 萩本範文 氏

産業的な観点から申し上げますが、とかく産業を技術一辺倒のところから論ずる傾向が強まっています。でも、これはとても危険なことだと思っています。先ほども言いましたけれども、Society5.0という社会と対比しながら、これからは産業を考えていくべきだろうと思っています。

では、それはどういうことか、あえて私が専門とする航空機産業について例をとって申し上げたいと思います。

ボーイング社とエアバス社の抗争は、現在、大変な激烈を極めておりますが、将来構想の部分でかなりの違いが見えるように思います。それは、ボーイング社の技術面から改良・改善をするのだという視点と、エアバス社の快適な乗り物の実現をするのだという目標の持ち方の違いです。飛行機に乗る目的は、行きたいところへ行きたいときに、早く行く、ということだろうと思います。しかし、その過程ではどうしても回避できない時間が、できる限り旅行客の負担にならないよう、さまざまな時間の過ごし方を開発することが必要で、客室の環境、椅子の構造、食べ物、飲み物、エンターテインメント、まさにおもてなしの世界であります。航空機産業を論ずるといついどんな加工があるのかとか、どんな部品が必要なのかとか、技術論が先行しますが、実は、それ以外の要素がパッセンジャーの満足につながり、そこに重要なビジネスチャンスがあります。

航空機産業は最先端のように言われますが、実は周回おくれの発想が必要になることもあると思います。今や、時代は「回れ右」の時代であり、最後尾のランナーが先頭ランナーになるということもあるように思います。航空機ビジネスはアメリカやヨーロッパに完全に水をあけられ支配されている状況ですから追いつくのは大変であります、「回れ右」のチャンスにこそ新しい

事業があるのではないかと思います。

そんな折、この地域における自動車産業の進化、その過程は、新しい産業を創造するときの参考になるのではないかと思います。そういったアイデアをこの三遠南信地域の皆さんで共有することで、新しい産業の芽が見えてくるのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、続きまして、浜松・浜名湖ツーリズムビューローの前田事業本部長にお願いします。

■浜松・浜名湖ツーリズムビューロー

理事・事業本部長 前田 忍 氏

私のほうからは、まず、今できることと将来やるべきことということでお伝えをさせていただきます。

まず、現状の既存施設を用いて受入環境整備を進めていこうというのが1点です。資料には JR 飯田線、宿泊施設、地域との連携とありますが、基本的には公共交通網や宿泊施設というハードに、地域との連携というソフトを組み入れて、今できること、私だったらこういったことを進めていく、というのを書かせていただいています。

そして、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線の開業後など、中長期的に見た場合です。観光というのは、ハブ・アンド・スポークの理念で成り立っております。大きな集客力を持つハブに対して、周りの宿泊施設や飲食店のスポークによって、自転車の車輪、ハブ・アンド・スポークが形成されます。そういった構築に向けて、公共インフラ、そして二次交通網の結節点をどうつなぐかというようなところも含めて進めていく必要があると思っております。

今現状、国、観光庁は全国で86の DMO 法人を立ち上げているところです。DMO とは、観光地域づくりの戦略策定と実行を通じ、

地域の稼ぐ力を引き出す方針です。これは、観光地づくりではありません。観光地域づくりです。面でしっかり稼ぐ地域にしていくなというのが国の狙いでもあります。

三遠南信地域におきましては、登録済みが6法人あります。広域連携におきましては、中央日本総合観光機構という9県をまたぐ DMO 法人、複数の自治体をまたぐ DMO が四つ、地域 DMO が一つございます。こういった DMO の法人は今後ますます増えていく予定です。観光マネジメントということをミッションとしているものですから、ぜひ今後は各 DMO との連携もこの三遠南信地域は進めていくべきだと思っておりますし、また、DMO 同士の働きかけ、連携というのも今後は必須だと思っています。目指すべき姿は、この地域の地域 GDP を、観光を通じて上昇させるというのがミッションだと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、次に、豊橋技術科学大学の井上副学長、お願いします。

■豊橋技術科学大学 副学長 井上隆信 氏

私がこの豊橋市に来たのが14年前になりますが、そのときまで三遠南信という言葉を知りませんでした。それから他地域から来る学生の中にも、知っている学生はまずいないです。この地域では知られているのですけれども、外に対する発信が少し弱いのかなと思います。ぜひ2030年には、このサミットへの参加者が、この地域以外の方の方が多くなるくらいに発信をしてもらえなるといいかなというのが期待です。

もう一つは期待を裏切ってもらいたくないというのが、人口推計です。2030年、人口が減少するという推計ですが、あくまで推計ですので、2030年にはこの地域の人口が今より増えていると、難しいかもしれませんが、そのようになってもらいたいと思

ます。

■コーディネーター

ありがとうございました。

期待を込めてお話をいただいたので、それらを受けて、最後、浜松市の鈴木市長に抱負を述べていただきたいと思います。

■浜松市長／SENA 会長 鈴木康友

ありがとうございます。

いろいろな分野の皆様から大変示唆に富んだご意見やビジョンを伺いまして、本当にありがたいなと思います。

これからの2030年に向けての新ビジョンの推進に当たっては、この三遠南信地域の緩やかな連携の中で、個別具体的なテーマに従ってプラットフォームをつくっていくということが必要ではないかなと思っています。冒頭でも申し上げましたけれども、SENAには現在、95団体が参加をされていて、全ての分野で全ての皆さんが役割を持って参加をしていただくというのは、これはなかなか難しいと思っています。ですから、分野ごとのプラットフォームをつくって、共通の課題認識と意欲を持っているところに参加していただきたいと思います。

例えば、今、田原市、豊橋市、浜松市、飯田市と4市で農産物の海外展開というのを共通でやっています。海外の買い手からすると、年間通じて切れ目なくいろいろな商品が安定的に入ってくるというのは非常に都合がよく、産地特性の違う地域が連携して農産物の売り込みをするというのは、非常に効果的なのです。この地域は非常に農業が盛んな地域なので、この農産物の海外展開というプラットフォームにどんどん参加をしていただき拡大強化できればと思います。本日テーマに出ていた観光や産業のプラットフォームは非常に作りやすいと思いますので、具体的なテーマセットのもとにプラットフォームをつくり、意欲を

持ったところに参加をしていただいて、具体的にこの三遠南信地域の連携が意味あるものになっていくということが大事だと思っています。

佐原市長がSDGsのお話をされましたけれども、今後はこの概念が非常に重要になってまいります。国も戦略的に推進をしています。このSDGsは17の持続可能な開発目標というのをこれから進めていくわけですが、一人も取り残さないということがその考え方です。ここが非常に重要でありまして、三遠南信地域でも、緩やかな連帯がありますが、参加する1団体も取り残さないようにしたいと思いますし、それぞれが意欲とやる気と問題意識を持って参加をしていただければ、連携の実りにつながると思っています。

そういう意味で、連携というのは次の時代に向けて日本全体の大きなキーワードになってまいりますので、日本の県境連携を先導してきた先進モデルとして、ぜひ目標となる流域都市圏の創生に向けて、みんなで取り組んでいきたいと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。私から簡単なまとめをしたいと思います。

この会議は、リニア中央新幹線、三遠南信自動車道などの整備のように、どちらかというとハード面に関心を持った人たちが集まっている会という認識を私は実は持っています。しかしながら、本日のお話を聞いてみると、ハード面の整備の先に何を見るかということが問われているなという感じがします。

思い返せば、1964年、東京オリンピックをきっかけにして日本の社会のハード面が大きく変わり、そして、ソフト面が変わっていきました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを踏まえて、また、この地域はリニア中央新幹線、三遠南信自動車道といったハードができる中で、どうい

う社会の在り方を思い描いていくかということで、本日は新しい産業の創造であるとか、留学生を地域につなぎ、海外展開していくだとか、農業の活性化であるとか、あるいは観光の開発といったようなキーワードがいくつか出てまいりました。

冒頭の鈴木市長の話にありましたが、人口がどんどん増えていって、税金もどんどん入ってきて、一つの自治体は何でもやっていくという時代ではなく、逆の発想の中で、人が人として、その地域で暮らしてよかったなと思えるような、そういう社会をつくっていく上で、この連携の枠組みは、2030年の SENA2.0を強く念頭に置きながら進んでいくのだろうなと思っております。SENAが新しい熱源になって人を動かしていくような、そういう期待を抱いて、この全体のパネルディスカッションを閉じたいと思います。

どうもありがとうございました。

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	愛知大学	教授	戸田 敏行
アドバイザー	中部地方整備局	道路部長	池口 正晃
報告者	浜松河川国道事務所	所長	田中 里佳
報告者	南信州新聞社	編集局記者	河原 俊文
発言者	浜松市議会	議長	飯田 末夫
発言者	豊橋市議会	議長	藤原 孝夫
発言者	飯田市議会	議長	清水 勇
発言者	豊橋市	市長	佐原 光一
発言者	新城市	市長	穂積 亮次
発言者	湖西市	市長	影山 剛士
発言者	阿南町	町長	勝野 一成
発言者	喬木村	村長	市瀬 直史
発言者	渥美商工会	会長	森下 直樹
発言者	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
発言者	駒ヶ根商工会議所	会頭	山浦 速夫
発言者	地域づくりサポートネット	代表	山内 秀彦
発言者	大原屋コミュニケーションズ	代表	尾澤 章

■コーディネーター

愛知大学 教授 戸田敏行 氏

本日、「道」分科会のコーディネーターを務めさせていただきます愛知大学の戸田でございます。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。また、中部地方整備局の池

口道路部長にアドバイザーとしてご出席をいただいております。

この「道」の分科会のテーマは、新ビジョン（案）の基本方針1「道」の「中部圏の中核的な都市圏となる地域基盤の形成」となっております。



進め方ですが、最初に事務局より新ビジョンの中から、特に「道」の分科会に関するところについて概要を説明していただきます。

次に、重点プロジェクト1の「三遠南信の交流ネットワークの形成プロジェクト」に関連しまして、国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所の所長の田中様から「未来につなぐ三遠南信自動車道」と題して、ご報告をいただきます。また、重点プロジェクト2の「三遠南信県民の一体的醸成プロジェクト」に関連しまして、株式会社南信州新聞社の編集局記者の河原様に、三遠南信情報紙「三遠南信 Biz」創刊に向けて、ご報告をいただきます。

その後、本日、ご出席いただいた参加者の皆様にご意見をいただくという流れになっています。

それでは、まず新ビジョン（案）について事務局から、説明をお願いします。

■事務局

新ビジョンでは、地域連携の基本方針を5つにまとめ、そのうち特に重点的に取り組むものとして、7つの重点プロジェクトを設けています。この「道」分科会は、基本方針の「道」と重点プロジェクトの1・2について意見交換を行います。

基本方針1「中部圏の中核的都市圏となる地域基本基盤の形成」につきましては、三遠南信地域における人と物の交流を促進するため、道路や鉄道の交通網の整備や活用、

また、県境による偏りのない地域全体での情報交流のため、情報ネットワークの基盤整備や県境を越えた情報共有の推進に取り組むこととしています。

重点プロジェクト1「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」は、三遠南信自動車道を初めとする主要道路の整備促進、リニア中央新幹線駅と既存公共交通網との効果的な接続、東名・新東名高速道路や国道23号、151号線など既存のストックの活用、東三河地域と遠州地域を環状でつなぐ豊橋・浜松環状道路の整備促進、三河港などの整備と利用促進など、このエリアを面で捉えて三遠南信地域の交流や物流を支える道路や、公共交通の整備促進を図るプロジェクトです。

重点プロジェクト2「三遠南信県民の一体感醸成プロジェクト」は、メディアや広報紙、SNS を活用した地域内の情報の共有、三遠南信スポーツ交流事業の実施、三遠南信地域の歴史や文化の共有や発信などを通じて、地域住民の一体感の醸成と交流促進を図るプロジェクトです。

事務局からの説明は、以上になります。よろしくお願いいたします。

■コーディネーター

ありがとうございました。概略的な説明ですが、プロジェクトの全体像ということでご理解いただけたかと思います。

それでは、続きまして国土交通省中部地方整備局の浜松河川国道事務所の田中所長から「未来につなぐ三遠南信自動車道」と題して、ご報告をいただきます。よろしくお願いいたします。

■浜松河川国道事務所 所長 田中里佳 氏

浜松河川国道事務所長の田中様でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

今日は短い時間ですがけれども「未来につなぐ三遠南信自動車道」と題しまして、三

遠南信自動車道の現在の整備の状況、整備の効果、地域にどういった効果をもたらすかということ、事例を持って幾つかご紹介したいと思います。

まず、三遠南信自動車道についてですが、長野県の飯田市から静岡県の浜松市をつなぐ全長約100kmの高規格幹線道路でございます。この事業は、高速サービスの提供、災害に強い道路網の構築、地域医療サービスの向上、地域間の交流促進、地域の活性化の支援などを目的としています。

続きまして、整備の状況をご説明いたします。三遠南信自動車道は、道路のネットワーク効果の観点から、中央自動車道、新東名高速道路などの地域の主要な他路線との接続部分や、通行不能区間の青崩峠を優先的に、順次整備を進めているところでございます。平成29年度末で約100kmのうち、約5割の整備を完了しています。残りの区間につきましても、引き続き事業を推進しているところでございますけれども、このうち水窪～佐久間間の約14kmについては、唯一の未事業化区間となっております。現在、環境アセスメントの最終的な手続を進めておりまして、評価書を先日浜松市に提出し、30日間の縦覧後、新規事業化に向けて検討を進めていくという段階でございます。

続きまして、飯橋道路、青崩峠道路、佐久間道路・三遠道路の事業について簡単にご説明いたします。

飯橋道路につきましては、天竜峡インターチェンジから龍江インターチェンジ間の平成31年度の開通を目標にしております。現在、(仮称)天竜峡大橋の整備を進めているところでございます。青崩峠道路につきましては、非常に脆弱な地盤を通る道路でございまして、今年度いよいよトンネルの本坑工事に入るといふ段階でございます。続いて佐久間道路・三遠道路でございますが、(仮称)佐久間インターチェンジから(仮

称)東栄インターチェンジにつきましては平成30年度の開通を目標に工事を進めているところでございます。(仮称)東栄インターチェンジから鳳来峡インターチェンジにつきましては最も長い約3.5kmの三遠第3トンネルの掘削を進めているところでございます。

続きまして、過去10年間、そして将来に向けての整備の状況と変遷についてご説明いたします。10年前は三遠南信自動車道の約2割のみが開通しておりました。現在は全体で約5割が開通しているという状況でございます。将来的には、リニア中央新幹線が2027年に開業予定であり、三遠南信自動車道の整備も進み、東西軸、そして南北軸の連結で、非常に広域的なネットワーク効果が地域全体に波及することが期待されます。

続きまして、三遠南信自動車道のストック効果について簡単にご説明いたします。

まず、「命の道」ということをご紹介します。現在静岡県側では、国道152号が生活道として利用されていますが、先日の台風24号による土砂崩れや、今年3月の浜松市の瀬尻地区におけるのり面の崩壊で、約半年間、全面通行止めとなり、住民の方の生活や観光面で非常に大きな影響がございました。今後、気候変動による気象の激甚化が加速していくと、他の地方で起きている大きな災害が、この地域で起こる可能性があるという状況でございます。非常に災害のリスクは高まっている中で、三遠自動車道の整備は災害時の信頼性、安全性に大きく寄与できるのではないかと考えております。

次に、観光交流の活性化についてご説明いたします。三遠南信自動車道の鳳来峡インターチェンジ～浜松いなさジャンクション間の開通、新東名高速道路の開通を契機に『三遠南信食の祭典』というイベントが開催されております。先日、10月21日に豊根村の茶臼山高原で第4回目が開催されま

した。私も、参加しましたが、非常にたくさんの方たちがお集まりいただいていた。今年度は1万3,000人ぐらいの来場者があったということです。このイベントに限らず、豊根村の観光入込客数の推移をみると、開通以降、1.3倍に伸びているという状況でございます。三遠南信自動車道がさらにつながりますと、こういった観光面、観光交流の活性化に寄与されるのではないかと考えております。

また、南信州の遠山の霜月祭り、奥三河の花まつり、そして遠州の遠江のひよんどりとおくないなど、歴史文化の面でも地域をつなげる役割を果たすのではないかと考えております。特に東栄町の花まつりにつきましては、参加者のうち約8割が東栄町外から来られているということでございます。このように地域外の方たちにお祭りに参加していただくとか、週末だけこの地域に来ていただくとか、何か仕事を見つけていただくとか、そういった関係を増やし、それがゆくゆくは定住促進につながる、というところにも三遠南信自動車道は寄与するのではないかと考えております。

次にリニア中央新幹線開業による波及効果でございます。リニア中央新幹線、そして東海道新幹線、三遠南信自動車道、このトライアングルが完成し、さらに中央自動車道により日本海側にもつながるということで、知的なネットワーク形成が期待できると思っております。

最後になりますが、「〇〇をつなぐ」ということで、この〇〇の中は、三遠南信自動車道を活用して、何をつなぐかということ、皆さんそれぞれが、未来志向のわくわくした気持ちで考えていただきたいと思います。それぞれのお立場で、この〇〇の中身が違って来るかと思えます。ただ、地域にあるお宝を探して、それをつないでいく、育てていくということ、そしてこの地域を未来につないでいくということは、皆さん

共通しているかと思えます。私どもも三遠南信自動車道を通じまして、三遠南信地域を一緒に盛り上げていきたいと思っておりますので、どうぞ今後とも議論のほうをよろしくお願いいたします。

■コーディネーター

ありがとうございました。三遠南信自動車道は新ビジョンの中核事業であります、なかなか見る機会の無い全体像や進捗を総括的に見せていただきました。東栄・佐久間間が本年度開通し、約5割が整備されるということで、リニア中央新幹線が開業と併せた全通にも期待が持てました。ストック効果についても、「命の道」、観光、あるいは歴史文化という具体例をご紹介いただきました。

続いて、株式会社南信州新聞社編集局記者の河原様から、三遠南信地域情報紙「三遠南信Biz」発刊に向けてということでご報告をいただきます。よろしくお願いします。

■南信州新聞社 編集局記者 河原俊文 氏

南信州新聞社の河原と申します。よろしくお願いします。

まず、私どもの新聞社の紹介から始めたいと思います。私どもは、飯田市の地域紙に当たります。昭和29年に、それまでありました3紙が合併し、創刊いたしました。来年で創刊65周年になります。取材エリアは飯田市と下伊那郡で、事業概要としまして日刊新聞の南信州新聞発行、それから出版、印刷を手がけております。

私どもは、三遠南信地域の連携を非常に重要視しておりまして、これまでも活動を行ってまいりました。平成5年に、浜松に当時あった月間の地域紙を発行する会社から、これからは連携の時代だというご提案がありまして、豊橋の東日新聞社と3者で連携し三遠南信産業ガイドブックを作成いたしました。平成21年には、遠州地域と東三河地

域の情報を南信州新聞社のエリアに伝えて交流を図ろうではないかということで、4月から毎月1回、三遠南信見聞録というイベント情報を、本市に掲載しております。これをプラットホームのような形にしまして、翌平成22年から南信州エリアの観光ガイドをフリーペーパーとして発行し、三遠南信地域に配付しております、非常に好評で毎回品薄になっております。

ただ、現行ビジョンでも、県境を越えたマスコミの連携といったことが掲げられておりますが、なかなか実現しないという状況でございます。もう少し踏み込んで何かできるのではないかと考えていた中、各方面からご意見を伺いまして、私どもから提案をさせていただきたいのが、本日配付させていただいた「三遠南信 Biz」という定期刊行物によって、情報交流を図ろうということです。

「三遠南信 Biz」の表紙のトップインタビューにもございましたように、交流とは経済活動のことであるという考えから、紙面の内容は、このエリアの時代を先取りする動きであるとか、中小企業や個人が行っているローカルビジネスを、なりわい・ビジネス・事業と3段階に分けまして、これを、人を中心に紹介することを考えております。当面はタブロイドの全ページカラーで月1回発行し、続いてウェブ展開を考えております。取材対象は有識者の方、さまざまな立場の方にライター、あるいは情報提供者として関わっていただきたいと考えております。加えて、将来的には他の報道機関の皆さんと連携して発行できるようにすることで、地域の期待に応えていきたいと思っております。豊橋市にも地域紙がございますので、お声をかけさせていただいております、まだこれからですが、何とかいい話にできたらというふうに切望しております。

テーマは、「小さく発信してみんなで育ていこう」ということで、新しい時代を生

き抜くためのヒントや活力を三遠南信の人と地域に与えたいと考えており、企業というより人に着目し、この人に会ってみたいとか、あるいはこの地域に行ってみたいという思いを感受することで交流を促進し、それが地域の活力につながればと思っております。また、遠州地域や東三河地域などのエリア区分を表示することによって分断が起きているようなきらいもありますので、そのような記載せず一体感を見せていくこと、それから、それぞれの地域のおおまかな様子が伝わるようなダイジェストニュースの掲載を考えており、媒体の連携が不可欠であると感じております。

期待できる効果としては、人と人との新しいつながりや人の行き来が生まれ、三遠南信圏としての意識が少しずつ高まり、最終的には時代の変化に対応した地域づくりが進むと考えております。非常に大きな言い方ですが、「三遠南信 Biz」のターゲットは共感してくださる方、皆さんだと考えております。連携のご支援、協力のほどよろしくお願いいたします。

■コーディネーター

三遠南信地域のマスメディアが切れているということは、見ている情報が違うという大変大きな課題です。その中で新しくメディアを発展させていくということで、ご提言をいただきました。本日は実物が配られておりますので、またごらんをいただきながら次の意見交換ができればと思います。ありがとうございました。

それでは意見交換に移らせていただきます。本日の意見交換は2部構成になっており、前半が三遠南信の交通ネットワーク形成プロジェクトということで、道路やハードに関する内容として、後半は三遠南信県民の一体感醸成プロジェクトということで、情報の共有に関する内容です。この2つに分けてご議論をいただきたいと思います。

道路はつながらなければ道として機能せず、また道と道がつながらなければ面のつながりになりませんので、県を越えるこの地域の道をどうするか、そういった観点から、ご意見いただければ幸いです。

最初に、サミット開催地の豊橋市議会の藤原議長からご発言をお願いします。

■豊橋市議会 議長 藤原孝夫 氏

道をどう活かしていくかということがポイントだと思います。先ほどの国土交通省様からの説明で、三遠南信自動車道の整備の進捗状況は大変進んでいるということで存分に期待していますが、浜松三ヶ日・豊橋道路の説明が一切ありませんでした。こういう場で説明していただけるように、まずは地域がしっかりと要望していかなければいけないなと思った次第でございます。私からは、3点言わせていただきます。

まず1点目は、豊橋にとっても、また三遠南信地域全体にとっても、三河港が大変重要だと考えています。皆様も御存じのように、三河港は多くの自動車の輸出入があり、また、総合物流拠点としても発展しています。各種製造業のトップランナーが集積をしている港であり、また、港を軸として豊橋、あるいは東三河、あるいは三遠南信地域全体に製造業が立地しています。この製造業の集積と自動車物流拠点、あるいは総合物流拠点を三遠南信全体で活用するには、浜松三ヶ日・豊橋道路の実現、名豊道路の豊橋東バイパスの4車線化、東三河縦貫道路等の整備推進など、縦軸の強化や充実をしていくことが重要です。また、遅れている新東名高速道路、東名高速道路、国道1号、国道23号等との結接点の強化により、関東、関西、東海地方各地などとの広域ネットワークが形成され、物流面で大いに活用されると期待しています。

2点目は、道路整備により広域ネットワークが形成される中で、航空宇宙産業、スマ

ート農業など、地域内の産業基盤整備や新産業の創出につなげていきたいと考えています。

3点目は、防災・医療活動における広域的な協力、連携体制を構築していくということで、横軸の新東名・東名高速道路、国道1号、国道23号の東西線と、南北の道路が整備されれば、緊急時に活用できると考えています。

最後に、三遠南信自動車道をつくる前はB/Cが1.2と言われていましたが、現在ではそれを大きく上回るような効果が出ています。さらに、豊橋東バイパスでも予想されたB/Cより高い効果が出ていることを踏まえると、併せれば大変大きな効果でありますし、そういったことを通じて三遠南信地域全体の住民の一体感が育くまれていくことが大事だと考えています。

地域内には、まだまだ自然の壁、制度の壁、県域の壁がございます。20年後にはこういったものがなくなって、道路によって地域のどこへでも移動ができ、それが地域の一体感につながるのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございます。産業波及の面を特に強調していただきました。

それでは飯田市の清水議長さん、お願いいたします。

■飯田市議会 議長 清水勇 氏

先ほど、浜松河川国道事務所長の田中様の「〇〇をつなぐ」というお話しにもありました、人をつなぐ、物をつなぐ、文化・産業をつなぐということに関連して、お話をさせていただきたいと思います。

三遠南信地域は、古くから街道を行き交う人々の交流があり、経済的、文化的なつながりが強く、相互の連携、協力の意識も高いと理解しています。この分科会のテー

マである「道」を活用しました地域の連携につきましては、人・物・文化の3つの視点があると考えています。来年度飯田市におきましては、三遠南信自動車道の天龍峡大橋が開通をする予定でございます。けた下には歩行者が通行できる歩道が設置され、水面80mの高さから、天竜奥三河国定公園の一部である名勝、天龍峡を見おろすことができます。四季折々の景色が見られるところでありまして、春は新緑、秋は紅葉、冬は飯田市のシンボルである風越山の雪景色等も見られるので、観光客の増加につなげたいと考えています。三遠南信自動車道が開通した区間の周辺では、製造品出荷額の増加が見られると聞いておりますし、将来的には浜松三ヶ日・豊橋道路の整備により、三河港との接続利便性が増し、地域産業の活性化や国際競争力の強化につながることを期待しております。

今年、飯田市は人形劇フェスタが始まって40周年のメモリアルイヤーでありました。人形劇を通じて友好都市となったフランスのシャルルヴィル・メジエール市の市長夫妻をお招きして、友好都市締結30周年記念式典や、人形劇の友・友好都市国際協会（AVIAMA）のアジア地域初の総会など、この夏はさまざまな記念行事が10日間にわたり行われました。

さて人形劇だけをとってみても、浜松市には「いなさ人形劇まつり」があるとお聞きしますし、豊橋市には「東三河人形劇まつり」などがあると伺っております。また、国道152号の沿線にも様々なお祭り文化がありまして、祭り街道とも言われている三遠南信自動車道沿線にも様々な伝統芸能があります。文化は、市民レベルで交流と連携を進める上で、本当に重要な視点と考えております。これからも、それらの地域と交流をつなげながら進めていこうと考えています。

■コーディネーター

ありがとうございました。三遠南信自動車道全般のことと、特に南信州の開発が進んでいる状況、産業波及、それから文化の中で人形の文化のつながりがあるということのご紹介をいただきました。

続いて、経済界からご発言いただきたいと思いますと思いますが、渥美商工会の森下会長お願いします。

■渥美商工会 会長 森下直樹 氏

私たちが住む渥美半島、特に観光地域である半島先端の伊良湖岬は高速道路へのアクセスがとても悪く、一日も早く高速道路を要望する地域です。渥美半島を横断する国道259号線はありますが、信号が多い1車線で、地域住民や観光客からすると決して走りやすい道ではありません。また、先の台風21号や24号の被害で、電柱が数メートルにわたって倒壊し、一時的にはありますが数時間にわたって陸の孤島となりました。渥美半島の住民にとって、交通の迅速化だけでなく命を守る生命線でもありますので、早急に渥美半島にも高速道路を要望するものであります。

10数年前、夢のかけ橋と言われました伊勢湾大橋は、いつの間にか頓挫いたしました。伊良湖岬まで延びる高速道路の整備が、少しずつ実現に向かっていることを感じます。この機会を逃すことなく、三遠南信地域の連携のもとに早期実現に少しでもお役立ちできればと考えています。広範囲な地域連携は情報の共有がなかなかしづらいことがあります。道ができれば地域の連携が密になり、外部へのさまざまな周知が徹底され、わかりやすい地域づくりができるのではないかと考えております。また、渥美半島のおいしくて新鮮な魚介類や農産物がいち早くお届けできますし、観光客の皆様を風光明媚な渥美半島にストレス無くお連れすることができます。

先ほど、全体会でどこの地域も取り残さないとお話しがありました。ぜひ、この旨をご理解いただき、渥美半島にもご尽力をお願いいたしたいと思う次第であります。陳情のような話になりましたが、よろしくお願いいたします。

■コーディネーター

ありがとうございました。渥美半島は私もよく行きますが、この渥美半島を活かしていくための高速道路の整備についてのご発言、ご提言がございました。

次は、北のほうに上がりまして、駒ヶ根商工会議所の山浦会頭さんにご発言いただきたいと思います。

■駒ヶ根商工会議所 会頭 山浦速夫 氏

9年後にはリニア中央新幹線が開業し、また三遠南信自動車道の開通によって、南信地域の経済構造は飛躍的に改善する条件が整います。地方にとって道路はまさに生命線であり、生活、産業、観光に大変重要な意味を持ちます。特に、長野県の場合は東三河や遠州との産業のつながりは非常に強いですし、標高差1,000mの、浜松のみかんの里と駒ヶ根のリンゴの里まで、三遠南信地域は非常にイメージのいいところでございます。

リニア中央新幹線、東海道新幹線、東名高速道路や三遠南信自動車道で三遠地域と南信地域が結節され、物流や人口の交流が増加し、人口は流入することが期待されていますが、逆に流出することも考えられます。地域一体となって、産業や観光に磨きをかけ、地域の魅力を外へ伝えることが大事だと考えております。

南信地域は、昔から人と文化の交流の拠点でございます。自然条件とリニア中央新幹線との利点を生かして、地域外からの人口流入の誘導で観光産業を活性化させ、中央自動車道沿線のポテンシャルの高いもの

づくり産業をさらに延ばすことが必要であります。また、三遠南信自動車道の開通で三遠地域と日本海が近くなり、南信地域は日本海へ続く物流の北の玄関口となります。この条件を十分に生かせるようなインフラ整備をさらに進めることが必要であると考えております。

■コーディネーター

ありがとうございました。三遠南信自動車道によって日本海と東海道は非常に近くなり、これらが三遠南信の広がりの中に入っていくであろうということ、その中で、南信のさまざまなものを磨いていくというご発言をいただきました。

続きまして、同じ南信州ですが、飯田商工会議所の柴田会頭さんからご発言をお願いします。

■飯田商工会議所 会頭 柴田忠昭

南信州地域は、三遠南信自動車道の整備はもとより、2027年のリニア中央新幹線の開業に向けて、リニア関連道路等の整備が着々と進められております。三遠南信自動車道につきましては、飯喬道路2工区の龍江ICから飯田上久堅・喬木富田IC間が本年3月に完成いたしました。また、来年31年度には天龍峡ICから龍江IC間も開通が予定をされております。先線の飯喬道路3工区、青崩峠道路におきましても工事等が順調に進められ、青崩峠トンネルの本坑も今年度中には着手する予定と伺っております。早期全線開通に期待が高まるとともに、交流人口の増加や物流機能の向上によって地域に大きなストック効果がもたらされ、地域産業の振興や地域経済の好循環の実現に向けて大きな期待を寄せています。

また、産業振興と人材育成の拠点整備も始まりまして、広域連携と社会資本整備の連動によるアジアNo.1航空宇宙産業クラスター形成特区をはじめ健康、医療、食品及

び環境などの新たな産業分野の創出も期待しています。

このように地域の特徴や強みを生かした産業づくりなど、活力溢れる地域経済の実現のためには、地域内の連携強化、地域外からの企業、人材、技術等の誘導によるイノベーションが必要であり、これらを支える三遠南信自動車道などの「道」は、地方創生において大きな役割を担うこととなると思います。

しかしながら、地域経済は深刻な人手不足に加えて、経営者の高齢化や後継者の不足により、地域経済を支える中小企業が事業継続、事業継承などの課題に直面しております。当地域におきましては、高校を卒業した生徒の7割が進学、就職等で地域外に転出をしております。また、大学生等のUターン就職者、高校生の管内就職者を合わせた回帰率は4割程度ということになっております。また、当所が実施いたしました「事業引継動向アンケート調査」では、「廃業を考えている」という企業が23%、「事業を継続したいが後継者候補がない」という企業が12%、合わせて35%ということで、事業承継に係る問題が浮き彫りになっております。

このような中、活力溢れる地域経済の実現のためには地域基盤となる「道路」や「鉄道」、当地域におきましては中央自動車道・三遠南信自動車道・リニア中央新幹線及びJR飯田線など切れ目ない広域交通ネットワークの完成が時間、距離の短縮を実現し、三遠南信地域の多様な歴史、文化、自然など地域の魅力を生かした広域観光や着地型観光を実現するものと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。地域の人が多く出て行くが、帰ってくる人は少ないという非常に深刻な問題がある。そこで広域的な道の整備を結びつけて働ける場をつくつ

ていこうというご発言をいただきました。

続きまして、地域づくりの専門家として、地域づくりサポートネットの山内代表からお願いします。

■地域づくりサポートネット 代表 山内秀彦 氏

三遠南信自動車道は無料の高速道路で、全線開通後は通過するだけの方が増える、あるいは如実にストロー効果が現れ流出が増えるという課題についてお話しします。福島県の沿岸部の相馬から山形の米沢、そして北へ上る「東北中央自動車道」という無料の高速道路が2年後に全線開通します。無料の高速道路なのでPA・SAがなく、全てのインターチェンジの近くにPAの代わりに道の駅が設置されています。米沢や伊達の道の駅は、今年4月にオープンし、すでに来場者が100万人突破ということで非常に人気です。ただし、道の駅を訪れた人が、お土産を買ったり、食べたりするだけでなく、そこからどうやって人を地域に流すかということが課題になります。そこで、今までつながりが少なかった地域が高速道路で連携し、高速周遊バスの運行、道の駅をゲートウェイと捉えて広域情報拠点化に取組むとともに、地域内をバスやレンタサイクルで周遊する社会実験を行っております。高速道路から降りて地域を巡ってもらうため、道の駅などを中心に地域を巡ろうと広域スタンプラリーもやっています。同じような連携の取組みが鳥取自動車道沿線でも行ってきました。

三遠南信自動車道も道路整備が進みつつあり、人をどのように回遊させるか、将来に備えて考え、東北中道自動車道沿線地域のような実験してみてもどうでしょうか。また、情報の共有ということであれば、三遠南信の情報コーナーを設置し、地域の一体感を醸成するということが必要です。

最後に、この地域は山間部もありますし、拠点をスポーツ e-バイク（電動アシスト自

転車)で巡ってもらおうということもおもしろいかなということで、ご提案させていただきたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。山内さんから東北を例に、道路に拠点をきちんとつけて、さまざまな周遊するための仕掛けをしていくというご提案をいただきました。

続きまして、阿南町の勝野町長さんお願いします。

■阿南町長 勝野一成 氏

阿南町は国道151号で愛知県の豊根村から県境を越えて長野県に入ったところがございます。この国道151号が整備されてきたおかげで、通学が可能になりました。それまで高校に通うには下宿をしなければならず、大学並みの費用が必要でしたが、通えるようになったことによって、負担がとても減りました。また、通勤者も3割増加し、町外へ通勤できることで所得の確保が図られました。通勤の途中にたまたま道路に倒れていた住民が助けられた例もございます。医療では、愛知県、静岡県のともし連携し大きく変わり、産業におきましては夏場の野菜が、浜松の市場への出荷ができるようになりました。それから、一番大きかったのは三遠南信自動車道の鳳来峡インターチェンジまでの開通により、道の駅の来訪者が3万人ふえたことで、これは山間の地域にとっては大きな影響であります。

この三遠南信地域はいろいろな地域があり、まだまだこの道路整備が、経済や文化の発展に資するものであり、必要不可欠なものだと常々感じているところでございます。

■コーディネーター

ありがとうございました。阿南町長さんからは、三遠南信自動車道とダブルリンク

になる国道151によって、通学、通勤、医療、防災、産業など、道路で生活が随分変わるという、非常に具体的なお話をいただきました。

それでは、前半の最後ということになりますが、新城市長の穂積様からご発言をいただきたいと思います。

■新城市長 穂積亮次 氏

全体会の南信州・飯田産業センター萩本専務理事の、新しい産業の育成でおとぎの国をつくろう、という魅力的な提案を聞いて、新しい世界都市を県境あたりにつくのなら新城だろうなと思って聞いておりました。新城市は新東名高速道路、三遠南信自動車道、浜松三ヶ日・豊橋道路の結節点になっており、それをどう活かすか、また行政基盤をどう強化していくかということが大きな問題意識として出てきております。

全体会で自治体戦略2040という話が出ました。AI等を活用したいいわゆるスマート自治体では、自治体職員が半分になっても公共サービスができるということです。中山間地域、新城市でも自治体の役場の職員を募集しても、域外から就職される方が多くなってきて、移住いただくのはいいのですが、公共機関の供給力そのものが細っていくという非常に深刻な事態になっています。そうするとどうしても広域的な行政連携も目の前の課題であり、総務省の報告では、県が町村、小さな自治体と補完をし合うという関係性まで描かれてきており、三遠南信地域も新しい連携のあり方を構築していかなければならないと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。自治体戦略2040でスマート自治体ということが言われてきて、この流れは不可避だろうと思います。道路ネットワークと自治体のこれからのあり方、地域のあり方は不可分ではない

かということ、特に県境を越えてということになってきますと、取り組む意味合いも大きいというふうに思います。

それでは、重点プロジェクト1「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」についてのご意見を、ここで一度切らせていただきまして、アドバイザーの中部地方整備局の池口道路部長にコメントをお願いいたします。

■アドバイザー

中部地方整備局 道路部長 池口正晃 氏



アドバイザーという名前をつけていただいておりますが、皆様のお話を伺っていると、地域の事情、それぞれのお立場の道についてのお話こそが、非常に貴重だと思っております。道路をつくることによってどんな効果があるのかということについては、特に人口の多いところから比較的厳しい目で見られる感じがあらうかと思います。一方で、皆様からの話を伺うと、物流とか防災とかに非常に期待をされているという印象を持ちました。浜松三ヶ日・豊橋道路については説明が欠けておりましたが、多くの方がおっしゃっていただきました。新東名高速道路などとのネットワークをつなげることに意義があるんだということで、浜松三ヶ日・豊橋道路がないと、この地域が完結しないということは重々理解いたしました。具体化に向けて一生懸命我々も頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

物流につきましては、新東名高速道路が今まで高速道路でつながっていなかったところをつなぐというのは非常に大きな意味があらうかと思います。また、今年の夏に新東名高速道路は6車線化になることが決まりましたし、これまで以上に新東名高速道路は重要な道路になってくると思います。さらに防災という観点も、私、実は東日本大震災のときに東北にいたものですから重々感じております。一般道と比べると高速道路の方が、災害に遭った場合の復旧も早いし、スピードも出ますし、非常に大きな効果があらうかと思います。災害の際には NPO の方とか、全国の方々からの支援がありますが、内陸からのルートを1つつくるだけで、皆様のお役に立つのではなかろうかと思います。

あと具体的な、先ほど山内さんからありました、道の駅を使った連携の話を伺いながら、情報発信のツールとして、道が地域の役に立つことになるのかなと思いました。

また、新城市長から広域的な行政連携というお話がありましたが、3県の比較的県庁所在地から遠い地域で、どういった連携をするのか、我々もまだ不勉強なところもあると思いますので、地域が発展されるためにどのような連携をするとよいのか、ぜひ情報もいただきたいと思いますので、どうぞお力添えのほうをよろしくお願いしたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。物流面、防災面、さらに具体的な効果ということでアドバイスをいただきました。B/C に代わる地域持続係数が出るといいかなという感じもいたしました。

それでは、重点プロジェクト2「三遠南信県民の一体感醸成プロジェクト」に移っていききたいと思います。

県の境のあるこの地域での住民の交流促

進のために、どのように情報の共有発信をしていけばいいのかという、いわば「道」の使い方でもあるのですけれども、こちらから今度はご意見をいただきたいと思います。

それでは最初に浜松市の飯田議長さん、お願いいたします。

■浜松市議会 議長 飯田末夫 氏

なかなか難しいテーマだと思いますが、一体感の醸成と交流促進ということで考えてみたときに、まず大事なことは、地域内に住む人たちに、この地域がいいところなんだという地域のよさを、理解していただくということだと思います。新ビジョンにもそういったことは盛り込まれていますが、地域にいる方たちが理解した上で外に向けて発信をすることで、地域外の方にこの地域のよさが伝わっていくのではないかと思います。

その理由といたしましては、1つ目といたしまして、平成6年の第1回三遠南信サミット以来、この地域の連携は四半世紀を経過していますが、まだまだ三遠南信という言葉自体が知られていないことが課題だと思っています。その中で、現代の情報発信というところとブログ、Facebook、Twitter 等といったものがツールになります。Facebook等でこんなものを食べて、こんなところへ行ったよというのを見ると、自分も案外行きたくなります。

うまく写真や動画を使って情報発信を進めていく必要があると思っています。

また最近では、この地域共通の五平餅のお土産の売り上げが、テレビドラマの影響で3倍や5倍にもなったというところがあると聞きました。食や、先ほど飯田の清水議長のお話がありました秋の紅葉など、多くの人に体験していただき、写真や動画に撮っていただいて、SNS に発信をしていただくということを、地道に進めていくことが

必要だと思います。

しかし、先ほど河原記者からも、交流とは経済活動のことであるというお話がありましたけれども、インターネットばかりではなくて、人と人が触れ合い、人が行き交うことが非常に大事だと思っておりますので、道というインフラの整備を進めていただく中で、ネットワークを構築し、先ほどお話のありましたぐるっと回る周遊という考えも大事であるということを教わりました。

■コーディネーター

ありがとうございます。三遠南信が地域内外に余り浸透していないというお話でした。私も常々感じるころでもありますが、そのために具体的に何をつくり上げていくことが必要かということを考えなければならないと、伺っていて感じました。それがインターネットから、人と人のつながりに進展していくということであろうと思います。

続きまして、喬木村の市瀬村長さんをお願いいたします。

■喬木村長 市瀬直史 氏

喬木村は三方を飯田市に囲まれた人口6,000人の小さな村でございますが、三遠南信自動車道の飯橋道路の地区と、リニア中央新幹線の仕事、両方が始まっておりまして大変にぎやかになってまいりました。地域がどんどん変わっていくのを実感しておりますが、先ほど浜松市議会の飯田議長からもお話がありまして、私もこの三遠南信という言葉の認知度が余りにも低いということが大きな問題だと思っています。道ができることによって、経済交流ですとか、防災の安全面では飛躍的に向上してきますと思いますが、それだけでは寂しいなという気持ちがしております。村では今、ICT教育に力を入れておりまして、村内の学校

が熊本県の小学校やオーストラリアの小学校とテレビ会議システムを使った交流授業を行っております。喬木でつくっている精密部品がこの道を通って、この先の豊橋、この先、海外まで行くんだという夢を持たせる授業をやりたいと思っております。三遠南信の皆様の学校とも交流ができれば、子どもたちがこの地域に関心を持てるのではないかと思っております。

それから各地域には、ケーブルテレビの局がございますが、できればコンテンツを共有させていただきまして、景色のきれいなところがいっぱいあるということや、今日は飯田市のお祭りがあることなど、逐一情報を発信し、まずは興味を持っていただくということが大事だと思います。それぞれの地域の情報に触れる機会を増やすことが非常に大切であり、地域、人、文化をつなぐのは、道だけではなく情報の共有であると思っております。情報の共有ができれば、この道の効果がさらに出るのではないかと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。情報の具体的なお話として、ICT 教育で熊本県とつながっているということでした。このように地域内でもつながることは可能ではないかと思えます。また、ほとんどの地域で設置されているケーブルテレビも、そのコンテンツを活用するという具体的なご提言だったと思えます。

続きまして、湖西市の影山市長からご発言をいただきたいと思います。

■湖西市長 影山剛士 氏

私の方からは2点お話をいたします。

10月の台風24号は、平成最大と言われるほどこの地域の災害としては大きなものでした。特に湖西市、豊橋市、浜松市など地域によっては丸4日間ぐらい停電が長引き、

信号も丸2日以上消えているという状態でした。どのような影響があるかという、例えば製造業では、国道1号のバイパスで出勤する従業員の皆さんは、普段であれば30分から1時間かかるものが、半日以上かかっても会社や工場にたどり着けませんし、操業ができてても物流が滞ります。東西にのびる国道1号がそういった状況になった場合には、やはり南北を結ぶネットワークが重要になります。今回で言うとこの三遠南信自動車道、またそこから湖西市を通って三河港に抜けていく浜松三ヶ日・豊橋道路が南北軸にあたります。最近では地元の方から、道路の名前は「三ヶ日・湖西・豊橋道路」の方が良いという声があり、いろいろな方をお願いをしています。このように、南信州から自動車部品を納入している湖西市の企業からも大変な期待を寄せられており、仕事をつなぐ、産業をつなぐ、命をつなぐことに加えて、一体感の醸成的には欠かせないと思っております。

もう1点は観光です。浜名湖という観光資源を生かして、ハマイチというサイクリングの観光振興を行っており、順調に来訪者数が伸びています。湖西市内の調査では、平成27年には年間約22,000台だった自転車の通過台数が、平成29年度では35,000台と、約1.6倍に増えており、実際に自転車で走られている方を見かけることが多くなりました。また、浜名湖だけでなく、琵琶湖や霞ヶ浦などの湖同士の連携も深めております。三遠南信地域内では、南信州でもサイクルツーリズムが盛んですし、渥美半島の菜の花浪漫街道等々もありますので、サイクリングというツールを生かして各地を道で結ぶことで、域内外の連携が深まっていくのではないかと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。直近の台風で愛知や静岡はかなり大変で、そういうこと

に備え、産業地区としてのリダンダンシーを考えなければならなりません。また、サイクルツーリズムが、人の動きにつながるというご提言もいただきました。

続きまして、情報をつなぐということではご専門になると思いますが、大原屋コミュニケーションズの代表の尾澤様から、ご発言いただきたいと思います。よろしくお願いします。

■大原屋コミュニケーションズ

代表 尾澤 章 氏

ありがとうございます。飯田市で飲食店を経営しながら、中小企業支援と情報発信の支援をしております大原屋コミュニケーションズの尾澤と申します。きょうは、そうそうたるトップリーダーの中に現場のプレイヤーが投げ込まれたようで、大変恐縮してございます。三遠南信地域の一体感の醸成ということでありましたが、情報発信のことについて話をしたいと思います。

マスメディアに対してソーシャルメディアというような言葉も、最近、耳になじんできていると思いますが、観光もマスの観光とソーシャルの観光に分かれてきていると思います。いわゆる有名観光地であるマス観光に対して、先ほど、飯田議長からお話しもありました SNS 等の写真・動画投稿などで広まるニッチな観光のことをこう呼んでいます。このようなソーシャル観光は、決して莫大な経済効果はないのかもしれませんが、強い観光につながるがあります。私自身も豊橋や浜松の同じプレイヤー同士でつながっており、浜松には毎年必ず1回、飲食店の出店で参りますし、豊橋にも、お邪魔することがあります。このようにプレイヤーをつなぐ情報の道と実際の道路や鉄道が、ソーシャルとマスでうまくつながっていくことで、三遠南信という圏域を生むのではないかと考えております。

もう1つ、先ほど柴田会頭から後継者不在

や事業承継の話がありましたが、もしかするとこの三遠南信地域内で事業承継やM&Aが進めることができるのではないかと考えております。そんな中、本日「三遠南信Biz」の新聞を見まして、こういった紙媒体とインターネット媒体などをうまく組み合わせ、小さなビジネスがつながったり、続いたりするようになるのではないかと、非常にわくわく感のある1日を過ごさせていただきました。本日は、ありがとうございました。

■コーディネーター

ありがとうございました。2つお話をいただきました。観光についてはマスとソーシャルをどうつなぐか、というご発言をいただきました。事業継承については、「三遠南信 Biz」のように、つながっていきながら広がっていく可能性があるというご指摘をいただきました。

それでは最後になりますが、豊橋市の佐原市長にご発言をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

■豊橋市長 佐原光一

まず道というのは、どんな視点でみても、人をつなぐことができる大変すごいものだなと思います。先ほどから話のある浜松三ヶ日・豊橋道路においても、まだ線も何も書けてない状態で、それでも頑張るぞ、と言ったら、とても多くの人たちがつながってくれました。道はできる前からつながっていくのだと思って、大変驚きました。みんなの力があって何とか予算も計上され、今後ますます多くの人をつないでいけるように頑張りたいと思っています。

それから「三遠南信Biz」ではマレーシアでこの地域の果物や野菜を売っている写真まで載せていただき、ありがとうございます。先ほどのお話にもありましたが、やはり情報とかメディアというのはすごく大事で、時空を越えて簡単に物や人を結びつけ

ることができます。もちろん最後は直接つながらなければいけないと思っていますので、情報と道とで人がつながり、物がつながれば、たくさんの経済活動などが生まれると思っています。

実際、道の駅で売られている豊橋や田原の農産物の加工品は、南信州でつくられていることが多いですし、豊橋市の農家も、飯田や駒ヶ根の耕地を借り、豊橋市と同じ品質の農作物を夏に確保しています。これも道のつながりがあってこそできるもので、三遠南信自動車道ができれば、将来はもっと、いろいろなつながりができてくると感じています。

また、豊橋市にも来年の春、いよいよ道の駅がオープンしますので、核となる道の駅として情報を発信していきたいと思います。また、豊橋駅にある「てみりん」というデジタルサイネージを使った情報発信基地でも、地域関連情報をどんどん発信し、利用者の利便性をあげて、もっと広げたいと思っています。三遠南信自動車道ができれば、三河港から南信州に石油もお届けできるようになり、きっと1円か2円は安くなるのではないかと思いますので、ぜひご期待ください。

■コーディネーター

ありがとうございます。佐原市長からは、ハードとソフトの間ともいえるべき、道の駅のお話をいただきました。三遠南信地域は道の駅が27ありますが、28番目にできる豊橋と結んでいくというご提言をいただきました。

それでは、最後にこれまでの意見、特に後半の一体感醸成プロジェクトについて、アドバイザーの池口部長さんからコメントをいただきたいと思います。

■アドバイザー

道路は地域をつなぐことができますです

が、道路だけでは地域のことを伝えることはできません。ご提案にもございましたが、地域の特性を発信しながら交流や周遊をつくることは、経済活動という意味では非常に有効であると思います。こういった発信を通じて、道路が交流の中でこういうふうに関に立っている、ということが分かり、またそれが世間に知られるということは、道路整備をやっている側からみると非常にありがたいことだと思っています。交流をしようと思ったら道路も必要なんだな、と気づいていただいたら幸いです。

いずれにせよ、道路整備は進んでいきますけれども、これを盛り立てるためには、道路をこのように使うという皆様のお声が非常に重要になってくると思いますので、よろしくお願いします。

■コーディネーター

ありがとうございます。道を実際にどう使うんだ、どう使いたいんだ、ということをアピールしていくということが一番重要かもしれません。1つ1つは小さいことかもしれませんが、これまで県境を越えるとはほとんどつながらなかったものが、この場ではできるというこのメカニズムがとっても重要だと思います。今のサミットのように年1回では難しいとも思いますが、新ビジョンを現実近づけていくために、こうした場は大きな意味があるのだろうと強く感じました。

それでは、「道」分科会の意見の取りまとめをさせていただきたいと思います。

田中所長の「〇〇をつなぐ」ということを受けて私も考えてみましたが、命をつなぐ、安全をつなぐ、仕事をつなぐ、学びをつなぐ、文化・観光をつなぐ、自治体経営をつなぐ、とたくさんのことが出てきました。それが、ほとんど待ったなしの必要であり、皆様には、どうつないでいくかということをお話いただきました。

道ですから空間的にみると、1点目は南北軸のお話です。日本海側から三遠南信自動車道を経て、浜松・三ヶ日豊橋道路を通り、渥美半島までがつながり、この上に観光や産業、文化が乗っている、見事な南北のつながりで、これが重要だということでした。

2点目は、中山間地域です。三遠南信地域の核は、中山間地域をどうするかということでもあります。三遠南信自動車道にどうしても目がいきがちですが、151号という既存の路線をどう結んでいくのかということが、中山間にとって非常に重要ということでした。特に新城のあたりでは、リニア中央新幹線の開業後、東京へは北から行くのか南に行くのかという判断基準にも影響を与えます。三遠南信地域の中心部分の結び方をどうするかというご発言がありました。

3点目は都市部ですが、三河港や新東名高速道路、東名高速道路は、新ビジョンの中でも環状道路を形成するとして挙げられていますが、この都市部をどう結んでいくかというご発言が挙まりました。道としては、以上の3つのことをご報告したいと思います。

一体感の醸成という面では、メディアやICT教育のお話がありました。道路の整備促進運動自体が地域づくり情報だということでしたが、確かにそのとおりだと思います。そのような運動がソフトをつくり、そのソフトが地域づくりにつながるということでもあります。

道の駅のお話もありました。去年、新城インターチェンジから道の駅まで一時退出実験をやっておりました。ぜみでアンケート調査をしましたが、一時退出が1時間だとできることが少なくて短く、2時間を超えるともう少し活動ができるということでした。高速道路から見れば、給油と休憩という位置づけですが、地域側からいえば活動してもらいたいですから、この道の駅はいろいろな活用ができます。また、広域周遊とい

う点でも意義があります。周遊には、サイクルツーリズムも含まれるだろうと思います。

主な意見として整理させていただきましたが、この後の報告会での報告は、私に一任させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございました。それでは、皆様のご協力によって円滑に、かつ大変意義のある分科会ができました。私自身大変勉強になりました。お礼を申し上げたいと思います。

以上をもちまして、「道」分科会を閉会いたします。

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	豊橋技術科学大学	副学長	大貝 彰
アドバイザー	南信州・飯田産業センター	専務理事	萩本 範文
報告者	豊橋市	産業部長	稲田 浩三
報告者	新城軽トラ市のんほいルロット実行委員会 ワーキンググループ	サブリーダー	加藤 久明
発言者	田原市	市長	山下 政良
発言者	伊那市	市長	白鳥 孝
発言者	根羽村	村長	大久保 憲一
発言者	豊川商工会議所	会頭	小野 喜明
発言者	蒲郡商工会議所	会頭	小池 高弘
発言者	田原市商工会	会長	河合 利則
発言者	伊那商工会議所	会頭	川上 健夫
発言者	三遠南信アミ	副理事長	中野 眞
発言者	山の搾油所（元設楽町地域おこし協力隊）	代表	杉浦 篤

■コーディネーター/

豊橋技術科学大学 副学長 大貝 彰 氏



「技」分科会のコーディネーターを仰せ
つかりました、豊橋技術科学大学の

申します。

このサミットに長年出ておりますが、中山間地域の分科会にずっと出ておまして、「技」分科会へ出るのは初めてです。要領を得ないかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

この「技」分科会のテーマは、先ほど全体会の中でもありましたが、新ビジョンの案の基本方針の2「革新を取り込む産業創造の形成」に向けてとなっております。この新ビジョンの案について、事務局から説明をお願いしたいと思います。

■事務局

新ビジョン案では、「三遠南信流域都市圏の創生」をテーマに5つの基本方針を設定しており、本日はその方針ごとに分科会を持っております。その基本方針のうち特に重点的に推進するために、7つの重点プロジェクトを定め、それに関連する事業の工程表を策定しております。この「技」分科会では、重点プロジェクト3「地域の稼ぐ力強化プロジェクト」について、意見交換を行っていただきます。

説明につきましては、以上でございます。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、まず農産物販路拡大事業ということで、豊橋市産業部の部長であります、稲田浩三様からご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

■豊橋市 産業部長 稲田浩三氏

こんにちは。豊橋市の産業部の稲田と申します。

三遠南信連携による農産物輸出事業ですが、正確に申し上げますと、豊橋市、田原市、浜松市、飯田市の4市の連携によるアジア（マレーシア）に向けた農産物輸出への取り組みでございます。

人口減少など、将来的に国内市場の縮小が見込まれます一方、世界的な日本食のブームや健康指向の高まりを背景に、安全・高品質な日本産農林水産物の海外需要が高まっています。国も、現在8,000億円余の農林水産物の需要額を、2019年までに1兆円まで、1年で2,000億円伸ばすと言っておりますし、国内でも輸出に積極的な地域が出てきています。こうした状況の中、豊橋市はこれまで、生産者、関係団体との連携により、経済成長著しい東南アジアへの農産物輸出に向け、民間主体の自主体制の構築を目指し、さまざまな取組を行っているところ

でございます。

これまでの取り組みは、3つです。見本市への出展など、市場調査や流通関係者の発掘、バイヤーを招へいし、実際の工場を見ってもらうなど、商流を構築するための流通業者との連携、現地の店頭での販促活動、農産物のコンテナによる輸送試験など、海外販路拡大に向けた取り組み行っていました。目指すところは、生産、流通、販売が連携した輸出体制を構築し、それらを一気に通過できるサプライチェーンを確立することです。

取組の内容を少し詳しく見ていきます。平成19年度からタイ見本市出展をはじめ、平成25年度まで様々な取組をやってきました。平成26年度からはタイ、バンコクでの愛知県フェアへの参加、シンガポールの量販店での豊橋フェアなど、本格的に進めてまいりました。

アジア各国の状況を少し申し上げます。タイは柿が人気で、香港は特に中華料理などに使う色目のきれいなものが好まれておりまして、ミニトマトやオオバなどの消費が実際にあります。各国での販売状況を見ると、平成28年度、香港は約366万円、タイでは約146万円、シンガポールでは約31万円です。タイとシンガポールは店頭での販売で、香港は、追跡可能であった金額です。これが多いか少ないかという点がありますが、次につなげるPRという点でそれぞれ手ごたえはありました。

取組を通じた課題ですが、東南アジアの富裕層の購買力はやはりすごいものがある一方、販売スペースを1年確保しておかないと、よそに取られてしまい、次につながりません。また、すぐ隣で韓国産の品質のいいブドウが売られているなど、日本の他地域、他国との競争もありますから、ブランド価値をさらに向上させていく必要があります。これらによって、質の高い農産物を通年で供給するシステムの必要性を痛感し

ました。

そこで、活路を三遠南信での農産物輸出連携に見出したということです。平成27年の市町村別農業産出額の全国順位を見ると、1位は田原市で853億円、7位は浜松で533億円、10位は豊橋市で439億円となっており、合計で1,800余億円であります。平成27年度の日本全体の穀物、野菜、果物、畜産品の輸出の合計、1,800億円を優に超える金額であり、この地域で連携することで品揃えも量もふえるということで、天下取りに励みました。

連携のポイントですが、一つは、飯田市と豊橋市では気候が違い、時期により収穫量も変わります。また、浜松、豊橋、田原ではそれぞれ得意とする農産物も違います。したがって、通年での供給を可能とする幅広い品ぞろえが可能になります。もう一つは、輸出量を確保し、輸出にかかるコストを低減することで、連携したコンテナ輸送を行っております。三つめ、これは大事なことだと思うのですが、どこの地域も海外を意識した農業はやってきておりますので、それぞれのノウハウを分かち合って、ネットワークを形成し、一体となって取り組むということです。

平成29年度の三遠南信連携農産物輸出事業は、9月にマレーシアの日系の百貨店でのテストプロモーション、10月に現地のバイヤーを招へいし、実際に工場を見学、11月は田原市長、豊橋市長、みずから店頭に立っていただき、しっかりPRをしていただきました。このことは時事通信のマレーシア版にも広報されました。

平成30年度は引き続きバイヤーを招へいと、現地での小売店プロモーションの予定を組もうとしています。今後は継続的に取り組み、スポット販売から定番商品へとブランド化を図りたいと思っております。輸出事業に意欲的な生産者や流通業者をもっともっと巻き込んで、JAの皆様方ともご理

解とご協力を得ながら進めてまいりたいと考えています。

以上で報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

■コーディネーター

はい、ありがとうございます。

三遠南信地域での海外への販路拡大の一つの好事例をご紹介します。

それでは、次に軽トラ市についてということで、新城軽トラ市のんほいルロット実行委員会ワーキンググループのサブリーダー加藤様からご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

■新城軽トラ市のんほいルロット実行委員会 ワーキンググループ サブリーダー 加藤久明 氏

まず、新城軽トラ市のんほいルロットの概要からでございます。平成22年に始め、毎月第4日曜日に、新城市の中心市街地約500mの区間を通行止めにして、70台ほどの軽自動車を並べて販売をしております。毎回、約2,000名の来場者の方が来られ、最近では出店希望者も大変多くなり、キャンセル待ちというような事態も起きております。

この目的と歴史についてですが、まちづくり会社は新城にもありましたが、その延長線で何とか中心市街地活性化ができないかということで、平成21年に商工会を通じた経済産業省の補助事業があり、そこに「山湊馬浪復活プロジェクト」ということで応募したところ、受けることができました。山湊馬浪というのは、昔、江戸時代に新城が東三河地区と信州をつなぐ物流の拠点で、山の湊で馬が波のように連なっていたというにぎやかさがあつたそうで、その時代を復活させようと馬を現代の軽自動車にかえて、企画をいたしました。翌、平成22年から始まり、新城市と新城市商工会の共催に

よって進めてきました。

愛知大学の地域政策学部の皆さんの調査を引用させていただいた開催データですが、来場者数は、昨年 1 年間で約 3 万人、出店台数が 800 台、売り上げは 1 回の開催で 250 万円ほど、1 台の軽トラで平均すると約 3 万円ということになっております。

出店者のデータでございますが、約 35% が新城市内の出店者です。同じく豊橋、豊川地区も 35%、浜松と飯田を含めた県外の出店者が 25% ほどでございます。販売金額は 2 万円から 5 万円の売り上げの出店者が多いようではありますが、中には 10 万円を超える売り上げが出ているところもいらっしゃいます。これは、開催ごとに調査をしています。また、出店者の 85% が 1 年以上続けて出ている出店者の方々です。1 年以内に再度出店する方は 15% ほどで、そのうちの 1、2 店が初めて出られるところになっております。

あとは、出店品目ですが、一番多いのが農産物やその加工品、次いでその場で飲食をする食品、そして、雑貨、工芸品、海産物加工品、企業 PR という順になっておりますが、最近では、マッサージだとか化粧品 PR とか、出店内容もバラエティーに富んできたような気がいたします。

我々は、販売目的でない出店者も歓迎しております。例えば新城の市民病院の PR だとか、警察、郵便局なども歓迎をしております。最近特に多い業種は、地元のソウルフードでもある五平餅、お茶、豆腐、唐揚げ屋さんの複数のお店が出ております。そして、最近感じることは、出店者の皆さんが、プロ化してきており、これを生業としていろいろな軽トラ市を回っている方が増えているように思えます。そうすると、出店者同士のネットワークがつながり、情報交換の場もできて、今度はどこの軽トラ市、次はどこの軽トラ市に出る、というお話をよく聞きます。

来場者のデータでございますが、来場者は男女比率は 4 対 5 で女性のほうが若干多く、居住地は、市内が 55%、市外からが 45%、年齢層は 39 歳までの方が 30%、40 歳から 69 歳が 45%、70 歳以上が 25% でございます。

消費金額ですが、平均すると来場者 1 人当たり 1,342 円です。ただ家族単位で 4、5 人で来られる方が多いので、家族単位だと何倍かになると思います。来場者に、軽トラ市の魅力を尋ねると、出店店舗の多様さや、にぎやかで活気のある雰囲気、低価格、という意見がありました。また、月に 1 回、会話をしながら買い物ができるのが楽しいとか、販売するお店の人と仲良くなれたというような感想も多く見られます。軽トラ市の帰りに近隣のショッピングセンターに立ち寄って買い物をしていくという来場者も顕著に増えており、始めたころは何か特別なものがないとお客さんに魅力が感じられないのではないかと考えていたのですが、やってみれば、昔、近所の店で売っていたようなものが喜ばれているという感じがいたします。

それから、この軽トラ市で周りの商店街がどのようなになったかということですが、最初のうちは眺めているだけの商店の方が多く、一体何が始まるんだろうという感じでしたが、人が集まるにつれて、だんだんお店を開けて日曜日に商売をするようになったり、お店でないところも軒先で何か販売をしたり、今はそういうところのほう売り上げを伸ばしているということもあります。空き店舗対策までにはいたっていませんが、活性化にはなっていると思っております。

愛知大学の戸田教授には移動都市という言葉をいただきまして、本当に月に 1 回、都市機能がこの中心市街地に移動してきたように見受けられると思います。そして、来る人たちが大変期待をして、ここへ行け

ば何かあるのではないかというような感覚
できていただいております。軽トラ市の会
場でイベントやろうということが増えてき
て、集客力も上がり、今月はなんと 3,000
人を超える来場者で埋まりました。年々、
来場者が増えてきている状況です。

また、岩手県の雫石、宮崎県の川南には
二つの先輩軽トラ市があり、そこと新城で
日本 3 大軽トラ市だと勝手に決めて、軽ト
ラ市でまちづくり団体連絡協議会、略して
軽団連を立ち上げ、全国ネットワークを敷
いて、年 1 回全国大会を開催しております。
今年は栃木県の宇都宮で 5 回目の全国軽ト
ラ市が開催されることになりました。

最後に、全体会の会場前で、愛知大学地
域政策学部の研究成果の展示がされていま
すので、ぜひそちらもご覧いただきたいと
思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。

この軽トラ市、全国的にもかなり展開し
ていて、一つの文化になりつつありますね。

さて、これから意見交換に移ります。重
点プロジェクト 3「地域の稼ぐ力強化プロ
ジェクト」ということで、前半は既存産業
の活力を強化するためには、どのような取
り組みをしていけばいいか、こういう視点
でご意見をお伺いできればと思います。

それでは、まず伊那商工会議所会頭の川
上様からご発言をお願いしようと思います。

■伊那商工会議所 会頭 川上健夫 氏

私は、やはり地元の企業の活性化のため
に重要なのは、人材だと思っています。
今、非常に景気がいいという中で、人手不
足というのが叫ばれているのですが、
残念なことに離職率も非常に高く、3 年で 3
割以上が離職してしまう現状があると聞い
ております。それぞれの企業で新入社員に
対し、多大な費用と時間をかけてその会社

独自の教育をするのに、そういう人たちが
たった 1 年か 3 年でやめてしまうのは非常
にもったいないなと思っています。

先日ドイツにインダストリー 4.0 の視察
で DMGMORI という精機の合弁会社に行
きましたが、15 歳ぐらゐの男の子と女の子、
4、50 人がやすりがけをしているという、
非常におもしろい光景がありました。これ
はドイツのデュアルシステムと言って、15
歳のときに大学に行くか、職業につくか決
めます。職業につく子たちは、それぞれ企
業を選んで週に 4 日間働き、1 日は専門校
で学習するというのを 3 年から 3 年半や
るということでした。その後はそのまま就
職する場合もあるし、ほかの会社に行く場
合もあるそうですが、そのためにマイスタ
ーが 3、4 人いて彼らに教えるということ
でした。3 年から 5 年かけて、その会社が求
める技術を養成し、18 歳になったら一人前
の技術者として働くことができるというわ
けです。DMGMORI には 1 学年 30 人いて、
それが 3.5 年で、110 人の学生さんがいる
ということになりますが、実際に現場に行
くと、18 歳ぐらゐの女の子が大きな機械を
組み立てていて、現場と教育が非常に近い
なと感じました。日本の場合は、どうして
も学習と現場というのは離れていて、そこ
にミスマッチが出るのではと思っておりま
すので、インターンシップとか職業訓練、
というような機会をふやして経営思想を変
えるということがこれから求められている
と感じております。

■コーディネーター

ありがとうございました。ドイツの事例
で、技術者教育の実践的な取り組みについ
てご発言がありました。本学はそういう実
践教育を昔からかなり力を入れてやってお
ります。

それでは、今度は山の搾油所の代表、杉
浦様からご発言いただきたいと思います。

■山の搾油所（元設楽町地域おこし協力隊）

代表 杉浦 篤 氏

先ほど報告のありました、販路開拓という部分で連携を図っていただければ、中小企業や私のように事業を始めたばかりの者としては、非常に助かるなど考えております。

私の場合は、中山間地域で地域おこし協力隊として活動しており、そこから事業を立ち上げました。中山間地域はやはり圧倒的に人口がマイナス要因としてあるので、ものを売る場合には地域外の需要へというのがかなり重視されております。その際に、商談に持っていくのにも、バイヤーさんとながらにしても、地域連携でまとまっていくというのが非常に良好であり、今後もそういった形でつなげていただければと思います。

海外に関しましても、個人でのルート開拓は、行っている方もいますが、やはりバイヤーさんとの折衝であるとか、海外でのニーズの把握であるとか、ものを持って行って売ることになると、非常に大きな負担になりますので、そういったところでも地域での連携を図っていただければ、地域でつくっているいいものを小規模で売っている企業には大きな力となるのではないかと考えております。

■コーディネーター

はい、ありがとうございます。

それでは、今度は根羽村村長の久保様からご発言をお願いします。

■根羽村長 久保憲一 氏

私のほうからは、三遠南信地域という大きなエリアのうち、中山間地域の現状をお話させていただきます。日本全体で急激な少子高齢化や過疎化が進む中、森林の資源力はどんどん豊富になってきますが、木材

価格は安く、林業が産業として自立していくのはなかなか難しい状況にあるということは、変わりはないところであります。そのために森林が管理されなくなり、荒廃森林が増加し、災害に対して非常に弱い森林が増えてきてしまっているというのが現状です。

そんな中で、安全、安心な地域づくりの原点は、どの地域にも人がきちんと住み続けられる仕組みづくりをすることが大事だと思います。特に中山間地域、河川の上流部にあつては、適切な森林整備や農地管理など、生きる原点をしっかりと残していけないといけません。特に最大の資源である森林の有効活用というのはやはり大事にするべきだと思っております。三遠南信地域においては、それぞれ恵まれた森林資源を持っておりますので、そこから生産される木材の生産体制の構築を図りながら、三遠南信自動車道、国道 151 号、152 号、153 号といった縦軸を活用し、三河港というすばらしい港につなげ、世界に向けた木材の輸出拠点があれば、地域にとっては新しい産業になるのではないかと思います。、中山間地域において木材が動くということは、健全な森林が整備され、地域の雇用が確保され、人が住むことの基本ができますし、また三河港の新たな取扱い品目としても活性化の芽が出るのではないかと思いますので、ぜひ地域内の木材の輸出プロジェクトが三遠南信地域全体で、できるといいなということを提案させていただきたいと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。

木材の海外輸出プロジェクトというお話でした。

今度は田原市長の山下様からご発言をお願いしたいと思います。

■田原市長 山下政良 氏

まず三遠南信地域は、農業も工業も盛んな地域であります。農業や工業の盛んなところがもっともっと発展するためにどうしたらいいのか、当たり前のことなのですが、第一に郊外の農地整理が必須であると考えます。また、産物をいかに早く届けられるかは、事業者にとって最も重要です。そのために港湾の整備を行い、併せて今以上に産業の立地を推進することで、更なる産業の発展が期待されるのではないかと思います。

また、既存産業の強化におきましては、担い手の確保というのが大変重要です。三遠南信地域に生きがいを感じて、住んでもらうということが大変重要であると思っております。田原市の事例を挙げますと、サーフタウン構想というものを掲げておまして、サーファーの定住促進、そして地域の活性化を進めていこうとしております。若者がサーフィンをしたいという生きがいを感じて定住をしてもらって、さらに地域の産業の担い手となるということを期待している取り組みでございます。

さらに三遠南信地域の産業を支えているのは、豊川とか天竜川水系といった水の恩恵であります。これを忘れてはいけません。こういった水の恩恵を将来に持続させて、既存の産業が成り立つためにも水源地の振興、特に水源地に利益が生まれるような事業も必要であると考えております。

■コーディネーター

ありがとうございました。

これまでのご発言では、既存産業の活力強化のためには、人材の育成と、人を確保するということが多くありました。また、三遠南信地域の既存の資源ということでは、農産物とか森林があって、この販路拡大のためのシステムづくりをどのようにしていくかというあたりがポイントになっている

のかなと思って聞いておりました。農業の活力強化のためには、いわゆる六次産業化であるとか、商品に高付加価値をつけていくといった取り組みが重要になっていくと思います。

そこで、六次産業化あるいは高付加価値の商品づくりといったことについて、皆様のご意見を伺えたらというように思います。まずは蒲郡商工会議所の小池様からご発言いただきたいと思います。

■蒲郡商工会議所 会頭 小池高弘 氏

私は、観光という切り口で一次産業、二次産業、三次産業というものを活性化する方法はないかなと思っています。例えば先ほどの農産物の輸出の話で、もちろん地域外でマーケティングすることは大切ですが、ブランド化するには、物語が必要ですよね。私たちが旅行をして、おいしいものを食べて、帰ってきてからあれおいしかったね、ということ、そこの風景が浮かんで、またそれが口コミで広がります。だから、観光客においしいものを提供して、あのメロンおいしかったなと言ったら、田原市のメロンになっている向こうに太平洋が見える風景が見えるとか、風景はその場所だけのものなので、風景が思い浮かぶようなものをちゃんと売ることが大事だと思います。観光でも産業でも、時間ができたときにあそこへ行こう、お腹がすいたからあれが食べたい、というように指名されなければいけません。企業も、商売相手以外に自分たちをPRしなければいけません。それをつくっていく一つのツールとして、観光はすごく役に立つと思います。観光はそのまちの人を呼んでマーケットをつくることのできるもので、観光だけの振興だけでなく、観光を通じた他の産業の振興を真剣に考えてなければいけないと思っています。

既存の産業を活性化するには、イノベーションで生産性や付加価値を上げるしか

いので、それをオープンイノベーションで企業を活性化することをやっていけたらなと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございます。

それでは続いて、三遠南信アミの中野様からお願いいたします。

■三遠南信アミ 副理事長 中野 真 氏

三遠南信アミの中野です。

最初に海外への農産物の輸出という話がありました。海外への輸出は、これから日本の農業、農産物にとって大切なことだと思いますが、私が聞いた話では、日本の農産物は品質は高いのだけれども東南アジアでは価格競争が始まっているということです。そうすると、農家さんにとってそれがメリットになるのか、農家さんの意見をきちんと入れて進めていただきたいと思っています。

三遠南信地域の六次産業で言うと、どちらかというと大きな会社ではなくて、小さな事業をやっている方々の視点から考えると、新ビジョンに人生 100 年時代プロジェクトというのがありますが、100 年続く仕事づくりが大切だと思います。地域資源である自然や歴史や農林水産物、伝統の技を活かし、暮らしのもとをつくる仕事、暮らしそのものを支える仕事が大切だと思っています。三遠南信地域は標高 0m から 1,000m まで、2、3 時間で移動できる地域です。豊かな自然があって、多様な農林水産物があって、とても魅力的な地域です。それを最大限引き出す仕組みとか、それが人ということにもなるのかもしれないですが、そういった視点が大切なのかなというように思っています。

三遠南信地域は農林水産物がたくさんあり、それを加工する技術を持っている南信州の伝統的な食品加工の会社がいっぱいあ

って、私もとてもお世話になっています。農家さんをつないでジュースにしたり、漬物にしたりしています。そういった三遠南信地域の素晴らしい食品加工会社と農家さんと事業を興し、杉浦様のように頑張っている人たちがつながるような仕組みが必要なのではないかと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございます。

それでは、続いて田原市商工会の河合会長からご発言をお願いします。

■田原市商工会 会長 河合利則 氏

渥美半島、田原の既存の産業といいますと、700 億円から 750 億円ぐらいの出荷額がある日本一の農業と、トヨタ自動車を中心とした臨海工業地帯が既存の産業となります。トヨタ自動車とは協力や協調はありますが、実際に産業としての意見交換はなかなか難しい部分がございますので農業のお話をさせていただきます。田原市は豊川用水通水以来、飛躍的に農業が発展しました。しかし実はブランド化という意味では大変遅れておりまして、高品質で大量の農産物が直接商店に行くのではなくて、東京市場に流れています。市場では評価が高いし、そういう意味でのブランドはあるのですけれども、やはりキャベツはキャベツ、花は花ということで、それが田原市産だという一般消費者の認識はありません。これはいい悪いという問題ではなくて、これから先、田原市の農産物をブランド化していくことが農業の新たな発展ということで、商工会としても経済産業省の補助金を活用し、3 年間かけて新しい六次産業の産品を開発し、一般社団法人食品産業センターが主催されている、優良ふるさと食品中央コンクールの愛知県の代表に選ばれました。これがうまくいけば、全国で一番の農林水産表彰がもらえますので、なかなかいいも

のができたのではないかなと思います。

■コーディネーター

どうもありがとうございました。

それでは、続いて伊那市長の白鳥様からご発言いただきたいと思います。

■伊那市長 白鳥 孝 氏

伊那市の農産物の海外戦略という点では、JA さんにやってもらっておりますが、そのほかで一般の企業がシンガポール、ハワイ、ニューヨークなどに、1kg2,000 円から3,000 円のお米を輸出しています。非常に注文が多く、お米が足りないという状況です。お米だけではなくて、地元のリンゴやマツタケなど四季折々のものをコンテナに詰めて送ることも始めています。また、伊那市と東京都新宿区は友好提携都市ですので、そのチャンネルを使って新宿のフルーツパーラーとか、三越、伊勢丹の地下とか、そうしたところでもお酒、ワイン、農産物を売っています。

三遠南信に関することをお話します。数か月前にこちらでマーケットをやらせてもらいました。その際に、下伊那、上伊那から来る野菜、果物については、「三遠南信自動車道が開通すれば、もっと早く新鮮なものが来るので非常に期待したい」という話がありました。製造業だけではなく、農産物にも、こうした身近に大きな機会がある、ということだと思えます。

それから先ほど木材の輸出という話がございますけれども、上伊那でも実は、森林資源を使って燃料をつくっています。ペレットという木質バイオマス燃料で、学校のボイラーやストーブに使っているのですが、農業用ハウスにも展開しようとしています。価格の乱高下がなく安定しており、原価計算がしやすく、化石燃料から切り替えましょうということです。上流域の森林資源を加工して使っていただくことで、森

林資源の健全化も図ることができるので、期待したいです。

■コーディネーター

ありがとうございました。

蒲郡商工会議所の小池様からからは、観光という切り口を六次産業化と結びつけるという話、それから三遠南信アミの中野様からは、農家の立場でもう少し海外販路の仕組みを考えるべきではないかという話、田原市商工会からは、田原での農産物のブランド化の取り組みをご紹介いただき、伊那市長からは、お米の海外進出であるとか、木材、ペレットのご紹介をいただきました。

伊那市の米の海外輸出に関しては、どの港を使われているのですか。

■伊那市長 白鳥 孝 氏

まだ量が多くないものですから、エアーコンテナで送っています。行く行くは船になると思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。ここまで、既存の産業の活力活性化のためにこのどういう取り組みをしていけばいいのかということで、いろいろとご発言をいただきました。

ここで中間となりますので、アドバイザーとしてご出席いただいている、南信州飯田産業センター専務理事の萩本様に何かコメントをいただけたらと思います。

■アドバイザー 南信州・飯田産業センター 専務理事 萩本範文 氏

少し感じたことだけを申し上げたいと思います。産業を考えるときには、それを消費するマーケットから考えるという姿勢がとても大事だと思うのです。消費者の目線から産業を考える場合、そのマーケットは何を望んでいるのかということを考えないといけません。例えば農産物では、1 年中

欲しいと思われている商品なのか、それとも旬の季節に買いたいと思われているものか、秋には秋の、春には春の、夏には夏の、季節にこそ価値がある商品があるかもしれません。三遠南信地域で考えたときに、この地域は 0m から 1,000m の標高差があり、これは大変な特長だと私は思います。農業にしても、森林にしても、気候や場所にとっても依存性の高い産業ですので、地勢や天候等の条件を積極的に生かす産業づくりがとても重要だと思います。

ところが今までの産業では、極めて限られた地域で、自分のところだけでつくって世の中に出していこう、というふうに思いがちです。しかし、マーケットが一年中それを欲しがっている場合、1 か所から供給するのは不可能なわけです。ですから、気候条件を上手に使い、例えば標高 0m では冬場に生産を担当し、中間地点で秋、春を担当し、高原地では夏場を担当するなど、地域連携によって成り立つ産業構造をつくっていけば、まさにこの三遠南信地域連携が活きるのではないかと思います。もちろん季節こそ大事だという商品もあるわけですが、いずれにしても限られた場所でできたものがマーケットでたまたま売れたといって喜ぶのではなくて、提供する商品がいつでもそこにあるという安心感が消費者に安定したニーズを生み出してくれるのではないかと思います。すなわちそれがブランドなのだと思います。一地域だけでブランドをつくるという考え方ではなくて、広域でブランド化するという考え方であれば、三遠南信地域の連携が生きてくるのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。三遠南信地域のブランドづくりということへの何かヒントになるのかもしれませんが。

さて、ここまでで前半の既存産業を活か

した取組については一区切りとさせていただきまして、新しい新産業を地域に取り込んでいくためにはどうすればいいか、という視点からご意見をいただきたいと思います。

最初は、豊川商工会議所の会頭の小野様からよろしくお願いいたします。

■豊川商工会議所 会頭 小野喜明 氏

私は、三遠南信地域の一番北の辰野町の出身ですから、この連携は私のためにあると勝手に思っておりまして、連携がうまくいかないのも、私の責任かなというぐらいの責任感を持って臨ませていただいております。

三遠南信地域は、製造業を中心に各地それぞれ特徴ある産業構造を持っています。航空産業、自動車、楽器、さまざまな産業があります。そしてそれぞれの企業さんが多角化や研究開発を進めています。なかなか難しいということだと思うのですが、これらの中から一つテーマを決めて、その中で三遠南信地域の企業がそれぞれ担当を持ってやってみるのもいいのではないのでしょうか。そして、いかに他地域の企業が自社の経営資源をたむけるかどうかという機会をつくってはどうかと思っております。

それから、先ほどお話しのありました、農業の海外販路開拓に向けて豊橋市が非常に努力をされているということで、大変うらやましく思っております。ただ、マーケットをアジア各地に絞った場合、もっと別のやり方があるのではないかと思います。これは年度ごとの予算によって動く行政の限界だと思いますが、そうではなくて、民間ベースの貿易機構が必要だと思います。農産物だけでなく、製造物や、観光旅行業、情報発信、それらを民間ベースの企業として発信することが必要ではないかと思っています。自治体の努力はもちろん必要だと思いますが、食べ物の嗜好、お酒、

ブランディングなど、我々が知らないところで、世界は毎日動いております。その中で、三遠南信地域のものをアジアの富裕層に売り込むかということは非常に至難の業だというように思いますので、海外の人のいわゆる観光の誘致、居住者の促進、外国人の居住の促進、外国人に優しい地域であるというブランディング化、これらを企業のミッションの中に入れて、民間ベースの貿易機構をつくるのがいいのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。新産業をつくり出していくためには、地域で一つテーマを絞って、いろいろな企業が参加できる可能性を探ったらどうかということでした。それから、外国人居住者等を受け入れることも必要ではないかというご発言だったと思います。

それでは新しい産業という視点で、三遠南信アミの中野様、ご意見があればお願いします。

■三遠南信アミ 副理事長 中野 真 氏

実を言うと新産業ということはあまり考えてないのですが、この三遠南信地域に住み続けたい、あるいは住んでみようと思うような魅力的な地域にしていくことが当然必要です。この地域は高齢化が進んでおり、安心して暮らせる、幸せな暮らしができる地域とするには、近年出てきている、AI、IoT、車では自動運転などの新技術を活用してはどうでしょうか。例えば、そういった先端的な技術を実際にこの地域で実験や実証する取り組みを積極的に進め、地域全体で、高齢化社会に向けた先端技術を利用した生き方、暮らし方、働き方を実証していくのも良いのではないかと思います。高齢化社会は日本が世界のトップランナーですので、ここで培われた技術の応用は、

次に高齢化が進む国に対して、高齢化社会における暮らし方のノウハウを輸出できるようになってくるのではないかと考えています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、次に根羽村の大久保村長さん、何かご発言があれば。

■根羽村長 大久保憲一 氏

私は、また森林資源について発言をさせていただきたいと思います。現在、木材の半分以上が使わない材料として山に戻されていますが、付加価値の高い建築用材、木育事業、木のおもちゃなど、いろいろなものに使うことが必要だと思います。例えば、バイオマスエネルギーとして、1本の木を全部使い切るカスケード利用や、また、木材の海外輸出というのも、新しい産業のチャンスの一つかと思います。

ただ、課題もたくさんあります。平成25年の数字を見ると、日本の木材輸出は確かに250%から265%まで増えていますが、輸出先はどれも中国が多いらしく、低質材です。あまりよくない木材が輸出されているのが現状で、全体的な収入になっていないのではないかと思います。もちろん輸出量が増えているのは好材料ですので、小さなところだけではなく、三遠南信地域のように大きな資源を持って量的に対応していく仕組みをつくっていくことが一つ大事だと思います。あとは、生産者や山元が赤字になるようではいけないので、コスト削減という面では、三遠南信自動車道などの道路環境の整備は非常に大事ですし、海外輸出する場合も、商社や港など多様な主体が連携できるようなプラットフォームづくりが非常に大事だと思っています。それぞれが連携することに新しい何か発見や糸口

があるのかなと期待を感じたところであり
ます。

■コーディネーター

木材の輸出をうまく回していくために、
プラットフォームが大事だという話でした。

それでは、田原市商工会の河合様から新
産業の取組というあたりについてお願いし
ます。

■田原市商工会 会長 河合利則 氏

私たちの商工会レベルでは新産業とい
うのはやはり難しい部分もあるのですけれ
ども、三遠南信全体で取り組むというこ
とを考えることにつながるお話をさせて
いただきます。田原市の農業のうち約半
分近い三百数十億円は花の出荷額です。
その花を活かすためのブランド化を考
えていたところ、たまたま縁があり、
旅行会社の方とお話する機会がありま
した。花と観光は、うまく仕組みをつ
くれば、最高の旅行の物語がつくれる
だろうということで、どういう形で組
み立てるのかということを進めていま
す。その旅行会社で、レストランバス
というオープンの2階建てバスで料理
が食べられるものがあるということで、
豊橋商工会議所と連携して来年の2月
から田原市の農業、花を中心にしたレ
ストランバスnのツアーを1日2便実
施することが進んでおります。これが
うまくいけば、田原のレストランバス
が道路を使って信州のほうまで行く、
そんなビジネスモデルがつながって
いくと、地域の特徴をうまく取り込
んだ新たな産業観光につながっていく
のではないかと、取り組んでおります。

■コーディネーター

ありがとうございました。新産業をい
かに地域に取り込んでいくかというこ
とについて、ご発言をいただきました。

続いて、伊那市長様からご発言いただ

けたらと思います。

■伊那市長 白鳥 孝 氏

新産業といいますとなかなか難しい分
野でして、伊那市にはいろいろな企業
さんがある中で、行政もお手伝いでき
るところはしっかりするのですが、基
本的には民間企業の皆さんは自分た
ちの力で世界を相手に取り組んでい
ます。

その中で今、伊那市では自動運転の
マイクロバスがお客さんと荷物を乗
せて道の駅まで行き、そのあとドロー
ンで荷物を配送するという実験が始
まります。国土交通省とか総務省、ド
ローン関係の企業、KDDI、ゼンリ
ン、大学も加わって、これを実用化
しようということで、これから3年
間に亘る取り組みです。

地域の課題解決という点では、中山
間地域ではニホンジカやイノシシが
増えて困っており、10年間ぐらいか
けて、くくりわなによってニホンジ
カを捕まえる技術が確立しました。年
間5,000頭ぐらいニホンジカを捕
獲し、だいぶ減ってきております。た
だ、くくりわなは、猟師が10とか2
0か所ぐらい山の中に仕掛けて、毎
日巡回に行くのですが、行っても掛
かっていない場合もあるれば、何匹
も掛かっていて手に負えないという
場合もあります。そこで、わなに掛
かったら、その情報が猟師の携帯電
話に入ってくる仕組みを開発しまし
た。今、「LoRaWAN」という通信を
使っているのですが、将来的にはキ
ャリア通信を使うために、次の段階
に入っているところです。また、ド
ローンを使って、熱センサーや赤外
線、3Dカメラでニホンジカを探し
出すという技術も検証しました。こ
れはクマでも人間でも適用、応用
できますので、さらに発展させる
ために実験をしています。目を見張
るような技術革新ではないのですけ
れども、課題解決という点では農家
にしても、森林関係者にしても皆
さん大変期待をしていますと

思います。

■コーディネーター

ありがとうございます。

地域の課題を解決するために、IT やドローン、自動運転を活用しているということでした。こういうそれぞれの取り組みが三遠南信地域全体で情報交換によって、連携ができてくるかもしれません。

続いて、蒲郡商工会議所の小池様からまたご発言いただければと思います。

■蒲郡商工会議所 会頭 小池高弘 氏

蒲郡商工会議所では、健康と観光という取組をしております。国では 40 兆円に上る医療費の削減のため、厚生労働省や市町村が、住民の健康増進のためにいろいろなことをやっていると思います。経済産業省も 2 年前から健康経営という取組を始め、協会けんぽは健康宣言というのをやりますし、経団連の外郭団体も日本健康会議が健康経営優良法人認定制度というのを始めるなど、企業でも従業員の健康のことを一つの経営課題として取り上げています。

蒲郡商工会議所は、健康経営で優良法人の認定を受けました。蒲郡だけでなく、東三河広域経済連合会の中で、健康宣言をする企業と優良法人を取る企業を増ふやそうということで運動しています。全国の比率と比べてもちょっと多くなっていると思います。特に中小企業では、うちの会社は従業員の健康についてこんなに考えているという強いメッセージにもなり、企業にとってもインセンティブがあります。

これまで通りの従業員の検診と相談窓口をつくるだけでなく、健康プログラムをつくって、しかもそれを観光と結んでいます。例えば、蒲郡の旅館に泊まるという健康プログラムがあって、企業の健保や皆さんも 1,000 円ぐらい補助してもらおうというものです。これはマーケットをつくっているの

と同じですから、できればこれを三遠南信地域でできないかと思っています。特に蒲郡の海だけでなく、山のプログラムもいろいろあれば、参加する企業がどんどん増えてきますから、そういう連携ができればいいかなと思っています。観光で来た人も楽しいプログラムとして参加し、そして住民も健康づくりに参加して、そういうプログラムを三遠南信地域で広げていくことができたなら楽しいなと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。健康と観光ということで、そのプログラムを三遠南信地域全体で広げていければというご発言でした。

次に田原市長の山下様からご発言をいただけたらと思います。

■田原市長 山下政良 氏

連携ということでお話をしたいなと思います。例えば農業と工業の連携を考えると、農業の生産の過程で必要のなくなった熱やごみを熱利用して温室で使うというようなことができれば、重油は非常に高価ですので、非常にいい連携になると思います。また逆に、農家で必要のなくなった畜産の糞尿はバイオマスとして使えますので、行政、大学、企業が協力してこういった研究が進められればいいなと思っております。

これからは、生産の過程だけでなく、流通、販売に対する研究も大変重要になってまいります。船で運ぶ場合はどうしても長時間かかります。時間がかかれば新鮮なまま運ぶことができず、販路拡大には重要な問題となりますので、もっと考えていかなければいけないなと思っております。

非常に身近な連携の例を一つお話しします。田原市で紅あづまという芋をつくっております。この芋を使った亀若という芋焼酎を飯田の喜久水酒造さんにつくっても

らって、セントレアで販売をしています。こういった連携も考えられますので、いろいろな場面こ連携を考えていくのが必要かなと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。

後半の新産業を地域に取り込んで稼ぐ力を強化する、ということについて、もう一度アドバイザーの萩本様から何かアドバイスをよろしくお願いします。

■アドバイザー

新しい産業をつくるということをテーマにしてきたわけですがけれども、私は二つのことを申し上げたいと思います。

一つは、今、根羽村の大久保村長様が森林事業にご尽力され、子どもたちにそれを理解してもらい運動をされているとお聞きし尊敬申し上げます。産業をつくるというのは、あす、あさってのことよりも長期レンジで見つめる目を育てていくという視線がとても大事だと思います。私も、70歳を過ぎましたけれども、小学生のころに天竜杉というのを教科書で教えられたことを思い出します。金原明善という大変な地域思いの努力家がいって、スギを一所懸命地域に植え続けた結果、天竜川地域に天竜杉のブランドをつくり、地域を支える森林事業ができた、という教えでございました。この年になってもまだ鮮明に覚えており、材木に対する理解を植えつけられた気がいたします。新産業といいますと、直近で何かしなければいけないと思うかもしれませんが、子どもの時から産業の根っ子をきちんと教えるという努力が必要だと思います。

もう一つは、浜松には静岡大学の工学部、光産業創成大学院大学があり、豊橋には豊橋技術科学大学があって、地域の産業技術を支えられておられます。ところが飯田に

はそれが全くありませんでした。技術を長期レンジで育てる運動から始めないとだめだと長年思っており、去年、信州大学工学部に航空機システムの大学院を創り、誘致し、ようやく飯田市に信州大学の工学系の大学院をつくることができました。また、知恵を技術から事業へ、事業から産業へとトランスファーしていくためには、大学の近隣に公設試験場がなければいけません。ところが県の工業試験場も南部地域にはございませんでしたので、県庁に働きかけ、工業試験場の分室という形ではありますが、飯田市につくることができました。産業をつくるには、そういう地道な運動が大事で、雪だるまのように何かを核にして、その核を転がしながらだんだん玉にし、大きくするように、企業が集まり、少しずつ力をつけ、地域産業へと進化するのだろーと思います。新しい産業を論ずるのであれば、そうした長期レンジの取組みが大事ではないかと思いました。

■コーディネーター

ありがとうございました。全体会で本学の井上先生も大学としてこの地域の産業の活力を高めていくという視点からのご発言がありましたが、私も大学の人間として、積極的に地域の方々と一緒になって、新しい技術開発に取り組んでいく必要があると思っています。

まだ少し時間に余裕がありますので、伊那商工会議所の川上様、言い足りなかったことがあればご発言いただければと思います。

■伊那商工会議所 会頭 川上健夫 氏

経営者も最近は考え方がだいぶ変わっていると思っています。昔は人口1億2,000万人の中のマーケットで、大企業の縦のバランスに入れば仕事が回っていましたが、最近是我々のような中小零細でも自分たちの

力で何か成し遂げようということで、伊那市でも中国と対等にしてやろうという若者が集まって、伊那オープニングウェストということをやっています。今までは、価格など中国に全部負けていたのですけれども、我々の技術力をもってすれば、対等に戦えることがわかってきました。これまでのように日本の中だけのマーケットを見るだけでなく、海外に出られるように苦労しながら、力をつけながらやっています。日本は長い間、デフレが進んでいまして、幸か不幸か科学競争力がついてきており、これからの可能性としておもしろい芽が出てきつつあると思います。そういう意味で、この地域の強みを活かした連携によって、東南アジア各国、世界と戦えるような土壌ができつつあるのかなということを期待しているところでもあります。

■コーディネーター

ありがとうございます。

それでは、豊川商工会議所の小野様、ご発言をお願いします。

■豊川商工会議所 会頭 小野喜明 氏

リニア中央新幹線が 2027 年に開業し、現在でいうと東京から小田原ぐらいの時間で東京から名古屋まで移動ができてしまいます。つまり東京圏内に名古屋が入ってくるという中で、我々三遠南信地域は取り込まれる、という感覚で物事を見ていかないと、国内のマーケットを狙う際に、間違ってしまうのではないかと思います。また、東京と小田原の間に何があるかというと、川崎、横浜、三浦半島、大磯、鎌倉など、ブランド、研究機関、製造業、港湾がある地域がありますので、そういったところにヒントがあるのではないかと思います。

もう一つ、近隣にはセントレア、松本空港、三遠南信地域内には富士山静岡空港がありますが、そこを拠点に空輸の飛行機を

飛ばすことができないか、それによってアジア、東南アジアの輸出、輸入ができないかということも考えていかなければいけないなと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。2027 年のリニア中央新幹線の開業を見据えた広域のあり方について、大きな視点でご発言いただきました。

それでは最後になりますけど、山の搾油所の杉浦様、お願いします。

■山の搾油所（元設楽町地域おこし協力隊）

代表 杉浦 篤 氏

蒲郡商工会議所の小池様が言われたような、健康と観光というところですが、本当に中山間地域で観光を考えると、どこもかしこも森林資源や山の環境を観光に活かしたいと考えています。私自身もゴーグルをしているのは、化学物質過敏症という病気なのですが、同じような病気の人たちを山に呼んで、健康増進というようなプログラムを組んだことがあります。ただ、なかなか地元ではそういった需要が実際にあるという認識が薄く、どういったものが求められているのかということを、地元の方と、実際に観光プログラムを組み立てる方たちで連携ができれば非常におもしろいと思います。私自身も健康とかメンタルヘルスとか、山の環境にはすばらしい可能性が秘めていると思いますし、それぞれの地域、観光資源が連携できる可能性もあるのではないかなと思って、聞いておりました。

また、各地で同じような課題が非常に多くありますが、伊那市長のドローンのお話など、トップの方々がいろいろと考えられて施策をうたれているのが、なかなか地域住民にはわからない部分も多くありまして、地域課題を解決できる技術があるというこ

とを浸透させていただければ本当に小さな1歩ではありますが、課題解決につながると思いまして、非常に大きな期待をして聞かせていただきました。

■コーディネーター

ありがとうございました。ここまで、さまざまな意見、ご発言をいただきましたので、少しまとめをさせていただきます。

この三遠南信地域全体で、それぞれ持っている資源や機能を活かして連携することによって、この三遠南信地域全体の経済力を高め、稼ぐ力をつけていくことが大事で、そのためのプラットフォームのようなものも多分必要になるだろうということでした。

資源としては農産物や豊富な森林資源があり、これらをいかに売れるものにしていくか、輸出できるものにしていくか、そのためには道路も必要だし、港も必要ですが、まだそれには課題も多くあるということです。

新技術としては、IT、ドローン、自動運転、さらに健康と観光、農業と工業を連携させる技術、それらの開発のために大学の役割があるのではないかなというようなご意見もいただきました。

萩本様からは、最後に長期的な視点でもっとこの地域の産業を育てていくという視点が重要だろうということと、そのためには知の拠点となる大学や試験場が必要になるだろうということでありました。

このあとの報告会では、皆様からいただいたご意見について報告をさせていただくわけですが、いろいろな視点でいろいろなご意見をいただきましたので、なかなか全てをご紹介するというわけにはいかないと思います。主だった意見を整理して報告させていただくことになりますが、その内容につきましては、私のほうに一任させていただきたいと思いますので、なにとぞよろ

しくご了解ください。

本日は皆さまのおかげで、中身の濃い意見交換になったのではないかと思います。この議論をきっかけにして、三遠南信地域の経済界、行政、市民団体、それぞれの方々がうまく連携を取りながら、これから新たな地域おこしが進んでいけばと思います。どうもありがとうございました。

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	法政大学	教授	高柳 俊男
アドバイザー	浜松・浜名湖ツーリズムビューロー	事業本部長	前田 忍
報告者	JR 東海飯田支店	支店長	大坂 勝典
報告者	南信州広域連合	事務局次長	松江 良文
発言者	設楽町	町長	横山 光明
発言者	浜松市	市長	鈴木 康友
発言者	松川町	町長	深津 徹
発言者	阿智村	村長	熊谷 秀樹
発言者	天龍村	村長	永嶺 誠一
発言者	豊橋商工会議所	会頭	神野 吾郎
発言者	新城市商工会	会長	権田 知宏
発言者	袋井商工会議所	会頭	水谷 欣志
発言者	天竜商工会	会長	大村 邦男
発言者	愛知大学総合郷土研究所	研究員	平川 雄一
発言者	けもかわ project(元泰阜村地域おこし協力隊)	代表	井野 春香

■コーディネーター

法政大学 教授 高柳俊男 氏

法政大学国際文化学部の高柳と申します。よろしくお願いいたします。私の専門は朝鮮の近現代史で、三遠南信地域を研究していたわけではありません。法政大学では6年前から、留学生の研修を南信州で行っています。決して東京がイコール日本ではない、ということで、日本の姿を多面的に知ってもらうためです。提案者は別の先生



だったのですが、定年間近だったため私が企画をし、引率や事前学習をするうちに、この地域について多少詳しくなりました。それでこういう役を仰せつかっております。

この間、浜松に行った際、「はやたろう」というラーメン屋を見かけました。霊犬の伝説は南信州では「はやたろう」だけど遠州では「しっぺいたろう」だよなあ、と思って調べてみたら、南信州出身の方が遠州でラーメン屋をやっているということでした。つまりご本人が三遠南信地域を体現しているということです。実際にネットには「信州生まれ遠州育ち」と書いてあり、何かちょっと楽しくなりました。

さて、今回のこの分科会には、全体会のパネルディスカッションでもご登壇いただいています、浜松・浜名湖ツーリズムビューローの前田忍事業本部長がアドバイザーとしてご参加いただいています。

では、ご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

■アドバイザー

浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 事業本部長 前田 忍 氏

浜松・浜名湖ツーリズムビューローの前田でございます。本日は、僭越ながらアドバイザーということで呼んでいただきましたので、よろしくお願いいたします。

私は、岐阜県恵那市の出身で、飯田に近い風光明媚なところ、一言で言うと田舎なんです。先日放送されたNHKの朝の連続ドラマの「半分、青い。」の影響で、昔は閑古鳥が鳴いていた五平餅店が列をなしているというような状況です。

私は平成25年から2年間、北海道のホテルの事業再生をしていました。観光資源が全くない地域にどう人を呼び込むのかということで、インバウンドに特化した事業を強化してまいりました。また、その後は大井川鉄道の事業再生にも関わり、SLという昔

からのコンテンツがある中で、昔なかった仕組みづくりによって、コアな鉄道ファンをどう集めるのかということにも携わってきました。個人的には、そういった体験を具現化してきている民間の発想から、差し支えなければこういった場でご意見をさせていただきたいなと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

■コーディネーター

ありがとうございます。それでは、この分科会のテーマは、新ビジョン案の基本方針3「風土」の「流域文化創造圏の形成に向けて」、でございます。新ビジョン案について、まず、事務局からご説明をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

■事務局

新ビジョン案では、三遠南信流域都市圏の創生をテーマに5つの基本方針を設定しており、本日はこの基本方針ごとに分科会を設けております。また、基本方針を推進するために、特に重点的に取り組む7つの重点プロジェクトを定め、それに関連する事業の工程表を策定しております。

本日のこの風土分科会では、重点プロジェクト4と5について意見交換を行います。最初に、この2つのプロジェクトに関連する取組についてご報告をいただいた後、重点プロジェクト4と5に関して順番に意見交換を行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

■コーディネーター

ありがとうございます。それではまず、飯田線活性化の取組について、JR東海飯田支店長の大坂勝典様からご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

■JR 東海飯田支店 支店長 大坂勝典 氏

JR 東海飯田支店長の大坂勝典と申します。どうぞよろしくお願いいたします。飯田線の活性化の取組については簡単に説明させていただきます。

まず、JR 東海の代表的な取組は、観光キャンペーンがございます。観光キャンペーンは、地元の皆様と協力をして誘客を実施するというものです。地元の皆様には、観光資源の開発、提案、宣伝、素材、特典、そしておもてなしを提供していただきます。JR は座席、列車の提供、自社媒体における PR を行い、それを旅行会社に商品造成、販売してもらい、成り立っているというものです。JR の行う自社媒体での宣伝についてご紹介しますと、名古屋駅コンコースでのイベント、名古屋駅でのデジタルサイネージ、乗りかえ通路等でのポスター掲示、パンフレットなどです。パンフレットは、自社で発行している情報誌「shupo」を活用しアピールしております。伊那市の分杭峠、阿智村の日本一の星空、駒ヶ根市の千畳敷カール、飯田線秘境駅など、飯田線沿線の観光資源と鉄道をセットにした旅行商品を PR しています。パンフレットや旅行商品で取り上げるコンテンツは今も募集中で、今後も、沿線の皆様と連携を密にして幅を広げていきたいと思っております。

次に、さわやかウォーキングイベントです。飯田線の駅をスタートとし、配布したマップ、看板を頼りに、ゴールまで立ち寄り箇所を自らの足で回っていただくものです。ポイントは、地元の皆様と直轄する駅が共同で運営する点で、しかもリピーターがいるということです。これまでに、4,340 コースを開催し、参加人数は500万人を超えております。参加者は、歩くことを目的に参加していただいておりますが、地元と駅が連携し、自慢のスポットを見ていただく、感じていただく、喜んでいただく、そしてまた来ていただくということが大切だと感

じております。沿線の皆様には、今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

観光資源としての飯田線といえば、秘境駅があります。観光資源は、一般的にそこにしかない魅力が必要である、と言われております。飯田線には、ここにしかない駅が何駅もあり、それだけでも十分観光資源になると思います。秘境駅号は、周囲に何もない秘境駅に、特急の車両が停車し、実際に降りて秘境を味わっていただきます。秘境駅は、最近テレビでも取り上げられ人気も高く、普通列車に乗ってもらう、ちょい乗りというツアーも多く企画されております。こういうツアーでは、JR の収入はあまりありませんが、秘境駅の知名度が上がって誘客につながれば、十分価値のあることだと思っております。秘境駅号は平成22年からスタートし、初年は74本を運行し7,735名の方がご乗車していただきました。それから毎年、20から56本の運行をしており、今年は夏に8本運行し1,189名のご利用いただいております。この秋にはさらに12本、全て旅行商品として貸し切りで運行しております。

さて、去年は飯田線80周年に当たりまして、8月のイベントでは沿線の皆様に盛り上げていただきありがとうございました。リニア中央新幹線の開業が順調に行けば10年後でございますので、そのころには飯田線90周年を迎えます。それまで、飯田線の活性化をさらに進めていくよう、努力いたします。

最後に、長野県の南信州地域振興局に作成いただいた JR 飯田線各駅停車の旅というパンフレットをご紹介します。毎年発行され、飯田線の魅力がぎっしり詰まったものとなっております。私も、いろいろな場面でこのパンフレットを活用させていただいております。本当にありがたく思っております。ちなみに、18ページに飯田駅が紹介されておりますが、飯田駅の駅舎は、

飯田特産のリンゴをモチーフにしており、平成4年に改築したものです。今年、外壁塗装を行いまして、当時の色がよみがえっておりますので、ぜひ一度飯田にお越しいただき、見ていただければと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。秘境駅については本学の研修でもよく使わせてもらっています。特に田本駅は、車でも自転車でも行けず、山道をしばらく歩かないと駅にたどり着かない、というのを留学生が見て、大変驚いております。

それでは、次は民俗芸能保存の取り組みについてということで、南信州広域連合の事務局次長、松江良文様、どうぞご報告をお願いいたします。

■南信州広域連合 事務局次長 松江良文 氏

南信州広域連合の松江と申します。よろしくをお願いいたします。それでは、民俗芸能の保存の取組についてご説明をいたします。

南信州地域は、貴重な民俗芸能が今も多く残っておりまして、民俗芸能の宝庫と呼ばれている地域でございます。特に、湯立神楽、念仏踊り、人形芝居、農村歌舞伎、獅子舞、花火などが盛んでございます。国・県指定の無形民俗文化財は15件あります。15件のうち、1つの文化財で複数か所を指すものもありますので、全体としては30を超える文化財がある地域でございます。

しかしながら、少子高齢化、あるいは田舎を離れて都会で暮らす人々が増え、この民族芸能の継承に危機が訪れております。そこで、当地域では、民俗芸能を継承するための推進組織として、芸能団体の代表者、市町村及び関係団体で南信州民俗芸能継承推進協議会を設立しております。協議会の基本的な考え方といたしまして、「醍醐味（真の価値）の普及と共感（響感）の輪の

拡大」を掲げております。民俗芸能を守っていく責任や重みを感じつつも、その一角を担っていることに誇りを持ち、舞うこと、演じること、参加することに喜びを感じ、何よりも楽しんでいただくことが民族芸能の醍醐味であり真の価値、これを内外に広く伝え、理解者をふやし、共に感じ響き合うことで共感（響感）の輪を広げていくことが必要である、という考え方でございます。

では、特徴的な取組をいくつか紹介します。

一つめは、長野県が信州ファン拡大のために設置したシェアスペース、銀座 NAGANO を会場として、民俗芸能に関する講演や記録映像鑑賞、南信州の伝統食の食事会を組み合わせた、民俗芸能体感講習会というイベントを開催しております。

次に、ユネスコの無形文化遺産であります大阪の文楽座の公演を、南信州の中学校、高校で行う、文楽公演・文楽体験会です。これは、文楽座に南信州出身の方がいらっしゃる縁で実現したものでございます。めったに見ることのできないプロの技に触れるとともに、地域の民俗芸能の経験者がプロとして活躍する姿を見てもらうことにより、将来の担い手である若者に大きな刺激となりました。

それから、阿南町の新野の雪祭りとかわりの深い、民俗学者折口信夫先生の生誕130周年記念に合わせて、折口先生と縁の深い國學院大學で舞の奉納や映画上映会、講演会を行いました。首都圏の住民に対し、南信州の文化の豊かさを感じていただくとともに、南信州とのつながりを持ってもらうきっかけづくりとして開催したものです。

また、南信州民俗芸能フォーラムでは、特に若い民俗芸能の担い手に焦点を当てて、芸能発表や意見発表を行ってもらっております。

これらの取組に加え、南信州民俗芸能パ

ートナー企業制度というものを立ち上げております。協議会事務局である南信州広域連合と、民俗芸能の継承活動の支援に関する協定を締結していただいた企業を、県がパートナー企業として登録するという制度でございます。本年9月末現在で、42の企業、団体がパートナー企業として登録していただいております。登録されたパートナー企業には、従業員への休暇への配慮、協議会活動の広報や出席の協力など、民俗芸能の継承活動に様々なご支援をいただき、企業と各地区相互の支援環境により、地域一丸となって取り組んでおります。

民俗芸能の継承が、万が一途切れた場合に備え、映像記録への保存の取組も実施しております。平成27、28年度に、新野の雪祭りや年中行事の映像を記録したものは、書籍、DVD を販売しており、保存会の活動費用としても活用しております。平成29年からは、阿智村の清内路煙火の映像保存を実施しております。これは、手づくり花火の奉納として10月に行われており、村人が花火師の資格を取り、仕掛け花火や大三国という花火を行い、その周りを、子供が、おいさ、おいさ、というかけ声で練り歩くというものでございます。

民俗芸能保存の取組の成果についてお話しします。まずは、民族芸能に関する催しが増加しており、メディアに取り上げられる機会が増加するなど、地域の関心の高まりが見られます。また、各地域の民俗芸能の保存会の新規加入者の増加や、高校で民俗芸能を取り上げるクラブが生まれるなど、児童、生徒への継承活動も広がってきております。地域おこし協力隊を中心に、地区外出身者や若者の参加も見られ、将来の担い手の確保に向けて期待が持てる状況になってきております。

しかし、民俗芸能の継承は一朝一夕に成り立つものではなく、これからも息の長い取組が必要だと考えております。本協議会

の取組方針の中に未着手の事業もございますので、これらも引き続き取り組んでまいりたいと思っております。終わりのない長い取組になりますが、一步一步着実に前へ進んでいきたいと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございました。この地域は、長野県だけではなく、愛知県も静岡県も、それぞれ伝統芸能があるかと思いますが、中でも南信州は非常に数多くて有名です。それをどうやって若者に伝えるか、どうやって企業に支えてもらうか、という取組をされているということで、本日の議論にも参考になるかと思います。

それでは、これから意見交換に移っていききたいと思います。この三遠南信地域の振興、活性化のために、どのような取組をしていけばよいのか、それぞれ発表者からご意見をいただきたいと思います。

まず、重点プロジェクトの4「三遠南信探訪プロジェクト」です。この地域には、有形、無形のさまざまな地域資源があると思います。それらをどのように活かしてどのような観光の振興をしていけばよいかについて、お考えをお聞かせ願いたいと思います。

最初に、設楽町長の横山光明様、よろしくをお願いします。

■設楽町長 横山光明 氏

地域資源をどう活かすか、またどう位置づけていけばいいかということについてですが、まず、道の駅、サービスエリア、パーキングエリアを活用した地域の観光情報の発信についてです。設楽町では、昨年度、観光まちづくり基本計画アクションプランというものを立ち上げました。これは、町が目指す観光の姿を共有し、住民、町が行うそれぞれの観光アクションをつないでいく、まちづくり計画です。

現在、設楽町では、設楽ダムの建設が国土交通省によって進められております。これを観光に活かしていくために、民俗資料館を併設した新たな道の駅の整備などの周辺整備、誘客施設の計画を進めているところでもあります。これらの施設の整備においても、観光まちづくりの観点から、地域の人、物、そして暮らしの魅力を発信する場を目指していこうとしております。新たな道の駅がオープンした暁には、町内の既存の道の駅、また奥三河、そして三遠南信地域の道の駅と情報を共有し、各道の駅の来場者や売り上げの向上につなげたいと考えております。

2点目、地域内の食文化を用いた観光振興についてです。前田様からお話がありましたように、岐阜県を舞台としたNHKのテレビドラマの影響で、私の地域でも五平餅の人气が高まっています。設楽町の五平餅の店舗数はさほど多くはないですが、それでも地域によって味が違うということで、五平餅文化が盛んな三遠南信地域においても特徴的なものではないかと思えます。地域の風土が生み出したお米などの食材、各地域での暮らしの知恵、味つけなど、それぞれの持つストーリーもあわせてPRしていくと、三遠南信地域の食文化に対する関心も高まり、観光誘客へとつながるという期待をしています。

三つめに、自然資源、文化遺産を活用した観光客の誘致でございますが、設楽町の最大の自然資源として、東三河の都市部を潤す豊川、天竜川の源流域にもなっている原生林がございます。観光まちづくり基本計画アクションプランでは、この原生林をつないだ観光コースづくりを掲げ、今年の夏から秋にかけて、豊橋市の旅行会社と地域住民が連携し、50年前に廃線となった田口線という鉄道をテーマにしたツアーを企画、開催をいたしました。キャンセル待ちが続出するほどたくさんの方にご来場いた

だき、大変好評を得ました。三遠南信地域においても、旅行会社と地域が連携をし、自然遺産、産業遺産をつないで、観光として確立できるといいのではないかと思います。

最後に、サイクルツーリズムの推進というのがうたわれております。三遠南信地域で統一したデザインをつくって、地元産材によるバイクスタンドを各観光施設に設けてはどうかと提案したいと思えます。そして、この地域の観光施設を結んで、サイクルツーリストに魅力のあるルートを連携してつくることができたらいいのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。私も今年の3月、豊鉄観光の奥三河再発見のツアーに参加しようと思って、電話をしたら、もう満員です。次回ご利用ください、とあっさり断られ、大変な人気だなと思いました。

確認ですが、現在、確か田口に奥三河郷土館があって、田口線の電車が静態保存されたり、土人形が多数展示されたりしておりますけれども、それとは別に、新しく民俗資料館もおつくりになるということでしょうか。

■設楽町長 横山光明 氏

はい。既存の郷土資料館は老朽化が進んでおり、以前から町としてつくりかえる計画をしておりました。今は高台にあり、なかなか人の足が遠いということで、今度は道の駅と並列して、国道筋に移していきたいと思っております。当時走っていた田口線の電車も、あわせて新しい郷土資料館へ移動させて、多くの人たちに見てもらえるようにしようと計画をしております。

■コーディネーター

わかりました。

それでは、次に、松川町長の深津徹様、お願いいたします。

■松川町長 深津 徹 氏

私どもの町は、下伊那郡の一番北に位置しており、上伊那郡との接点の伊那谷のちょうど中心で、人口1万2,800人余りの、中山間地域の小さな町でございます。「くだものの里まつかわ」ということで、リンゴ栽培が始まって103年目という、果物については長い歴史を持っており、3年前に果樹栽培100年の記念式典をしました。春先のサクランボから始まり、ブルーベリー、プルーン、桃、梨、リンゴと、これからちょうどぶじの最盛期になってまいります。松川町では、1年間を通じて唯一、11月の土日に中央自動車道の松川インターチェンジの出口が渋滞します。

町の活性化の1つには、交流人口を増やすことだという思いでやってまいりました。交流人口をふ増やして地域の宝を再発見して発信をして、来ていただいて、また来てね、また来るよ、そうしたおもてなしを町全体がすることで、一人一人ファンを増やすことが、町長としての方針でありました。その中で思ったことは、行政が動き回り、全てをやっていると、パンクしてしまうのではないかということでした。そこで、2、3年前から、DMOを目指したいと思い、今年の4月に松川南信州まつかわ地域づくり観光センターという一般社団法人を立ち上げ、観光協会や果樹組合等と協力してDMOを目指しております。まだまだ未熟で、課題も多いわけでありませけれども、育てていきたいなというふうに思っております。

地域の施設としては、清流苑という直営の温泉がございまして、26年目になります。唯一の自慢が、26年間、1回も一般会計から積み立てたことがなく、独立会計の中でやってこられたということです。地域の皆さんに愛されるとともに、リピーターがそれ

だけ多いのかなという気がしています。その温泉を中心に、スポーツ施設、森林セラピー基地の認定をいただいておりますおよりての森、森を生かした冒険ができるフォレストアドベンチャーという施設があります。おかげさまでフォレストアドベンチャーの収支も若干余裕ができています。そして今年、ツリードームという、木につらされた宿泊施設を3基設けました。ちょっと豪華なキャンプができる、いわゆるグランピングです。このように、森、森林を活かした観光振興をやっています。その他に、県の施設でありました青年の家を譲り受けています。今は休んでいますが、どのように活用し、どのように改装をするか、今、研究をしている段階でございます。

また、果物の里ですので、ジャムやジュースがありますが、今一番燃えているのは、リンゴのシードルです。最初、8軒の農家さんが、それぞれ独自のブランドのシードルをつくっています。リンゴの種類も全部ばらばらです。先日、飯田線でも天竜峡と伊那を往復するシードル列車を企画し、アピールしております。また、農家の皆さんが自主的に醸造所をつくりたいということで、間もなくシードルの醸造所ができるという段階まで来ております。

一般社団法人を設けるときに、住民の皆さんの声で一番多かったのが、町を観光地にしていくのか、町に全国的に名の知れた観光地があるのか、それだけのキャパシティがあるのか、という言葉でございました。しかし、観光は、それを通じた地域づくりだと私は思っています。これからの観光地域づくりのために、自然、体験、学習、学びといった言葉をキーワードにしながら進めてまいりたいと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。松川町というと、JAの直売所がモモ、梨、リンゴで、「も

なりん」という名前だったと思いますが、そのぐらい果樹で有名なところで、果樹、温泉を活かして、観光を通じた地域づくりを目指すという、重要なご発言でした。

では、阿智村の村長の熊谷秀樹様、続けてお願いいたします。

■阿智村長 熊谷秀樹 氏

映像に出ました阿智村の清内路というところの花火、あれも実は伝統芸能で300年続く花火でございまして、ああいった伝統芸能の体験ということも含めて、我々やっております。

阿智村は人口が6,500人という小さな村ですが、昼神温泉があり、観光客が年間130万人来ております。松川町と同じように、やはり観光を基軸にまちづくりをしていきたいと考えております。

昼神温泉は、日本一の星空という環境省の認定がとれたことから、知名度を集めました。どの市町村も、どうやって売り出していくか、ということが一番のテーマだと思いますが、私どもは、自分たちが住んでいて当たり前だと思っていたものが、たまたま JTB さんからアドバイスをいただいたことから、星空で売っていこうということで、5、6年ぐらい前からプロモーションを展開してきました。例えば望遠鏡メーカーのビクセンさん、自動車メーカーのスバルさん、星のマークのサッポロビールさん、キキララというキャラクターがいるサンリオさんなど、星に関連する全国規模の企業の皆様と提携をしながら、互いに経済効果があるように PR をしてきたことが大きな要因です。また、企業の皆様の保養や研修ということで来ていただいたことも、ポイントだと思います。

例えば我々が沖縄や北海道へ旅行に行ったときに、1泊2日で帰ってくるのはもったいないわけです。この三遠南信地域も、北海道や沖縄から来た皆さんが、2泊3日かけ

て地域を回って帰るような地域振興が大事だと思いますので、そういったプロモーションを本気で取り組んでいかないといけないと思います。行政ではやはり限度があるかと思いますが、経済界の皆さん、観光業者の皆さん、民間の皆さんのお力をかりて、日本のここにしかないものを、全国にプロモーションしていくことができればなと思います。

リニア中央新幹線もあと9年後になりますので、あと5年ぐらいが勝負だと思います。ぜひ、長野県でリンゴがとれ、車で1時間半ぐらい走ればミカンもとれるというような体験ルートができるという強みもしっかりプロモーションしていただければ嬉しいです。

阿智村に来られるほとんどの方が言われることが、星もいいけれど川や空を見たい、ということです。2年前に天皇皇后両陛下がお見えになって川を見たいと言っていました。この三遠南信地域の、2,000メートル級の山、川、魚など、豊富な資源が強みだと思いますので、ぜひ、そのプロモーションをお願いしたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。本学の南信州研修には事前学習授業があり、留学生以外に日本人学生も参加していますが、最初に聞いてみると、人口10万人の飯田市よりも、人口6,500人の阿智村のほうが有名です。テレビでも日本一の星空として報道されていますので、行ったことがあるとか、今後行きたいという若い学生がかなりいます。また、自分のところだけではなくて横につないでいこうという貴重なお話もいただきました。

続きまして、豊橋商工会議所会頭の神野吾郎様、よろしく申し上げます。

■豊橋商工会議所 会頭 神野吾郎

風土を考える二つのポイントと、三つのテーマの話をしたいと思います。

ポイントの一つ目は、やはりその地域の本物を大事にするべきです。あれもこれもというコンセプトがぼやけてしまいますので、その地域が持っている本物の資源を大事にするということです。

二つ目は、広域で取り組む必要があるということです。愛知大学の藤田佳久先生が、昔から、集落の星座、ということを言っています。集落の一つ一つは小さな星だけでも、つなげると星座になり、そこに物語をつけたことによってはじめて魅力ができる、ということです。一つ一つの魅力はもちろんですが、やはり周辺地域を含めた総合的な魅力が重要だと思います。

では、三遠南信地域は何をテーマに考えたらいいかということですが、一つはやはり祭りかなと思います。祭りは南信州、遠州、東三河で、いろいろな意味で共通していますね。花祭りなどの鬼、花火、凧など、歴史や民芸にもつながると思いますが、大きなテーマではないかと思います。この地域の祭りを1年間つなげて、日本中の人、世界中の人たちを呼び込めると思います。

二つ目のテーマは食ではないでしょうか。この地域には誇れる食文化がいっぱいあります。世界を見ると、スペインのサンセバスチャンは、食をテーマに世界中の人を集めています。コンベンションをするにもサンセバスチャンは人気だそうで、おいしいものが出るから参加率が高くなる、ということらしいですが、スペインのサンセバスチャン、イタリアのボローニャ、フランスのボルドーなど、地域の名前ですが食のイメージが出来てしまうというところがあります。そういうような、食でイメージできる、ということがテーマの一つになるのではないかと思います。そのためには、生産者、料理人の人材育成、フードプロデュ-

サー、ジャーナリスト、教育機関、食品メーカー、企業とのタイアップなど課題は多いですが、野菜、果物、畜産、水産物と全部そろっている地域はなかなか無いので、食をテーマにするのもよいのではないかと思います。

それから最後に、それらをつなぐための三遠南信地域のポイントは、飯田線かなと思います。JRの幹部の人と話すと、通勤、通学の足としてずっと確保するから大丈夫と言われますが、観光や文化をつなぐという面でも、JR東海に深みのある提案をして、飯田線をシンボリックなつなぐ線、というふうにできればと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。本物を大切にするとか、星座のように点をつなげていくというお話は大変貴重だと思いました。

飯田線はいろいろな方からお話が出ておりますけれども、実は我々の研修も、東京から行く場合はバスのほうが安いのですが、行きだけは豊橋から飯田線に乗っています。飯田線をつくるときにいろいろな方の苦労があったわけで、「合唱劇カネト」のDVDを事前に見て、アイヌの人々をはじめ先人の苦労をしのぶという意味でも飯田線を使っています。

続きまして、袋井商工会議所会頭の水谷欣志様、どうぞよろしくお願いいたします。

■袋井商工会議所 会頭 水谷欣志 氏

袋井商工会議所は、以前から花火を三遠南信地域の共通の地域資源ということで活用し、経済の活性化と伝統文化の承継で相乗効果を出していきましょうという提案をしてまいりました。

豊橋商工会議所の神野会頭がおっしゃられたように、花火は、長野県、静岡県、愛知県で日本全国の3割以上の生産があり、3県とも打ち上げの数が上位10県に入ってい

るということから見ても、この地域では花火が根づいています。古くから、手筒花火を初め地元で開催されている花火大会がございますし、また最近は音楽と連携した最新式の花火大会なども多数企画されており、若い方からお年寄りまで、皆さんが楽しめるこの花火文化を、これまでの歴史に加えてさらに継続、継承していくために、広域連携をしまして一層盛り上げていくことが必要ではないかと思います。2020年の東京オリンピックは、7月24日から8月9日までの、まさに花火のシーズンのピークに開催されます。パラリンピックもその後にありますが、インバウンドのお客様を含めてぜひ大勢の方に来ていただくために、今日はここでこういう花火大会がある、明日はどこで花火大会がある、ということをつかりやすく整理し、1つの花火大会だけではなくて2つ、3つ回ることができるようにルート設定し、英語、中国語等も備えて、検索もできる、そんなコンテンツがあるといいかなと思います。

先ほどお話のありました阿智村の花火など、日本中探してもない伝統的な花火大会は、非常に貴重なものですので、この地域で花火がどういうふうに生まれて根づいていったのか、という歴史的なことも含めて、来ていただいた方に知っていただくということも重要なかなと思います。

昨年2月に第1回三遠南信花火サミットを袋井で開催させていただきました。これからもぜひ継続開催してもらいたいと思います。できたら、第2回は、手筒花火発祥の地、豊橋で開催していただければありがたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。私もこの仕事をするようになってから、三遠南信地区のイベント情報メールを登録していますが、春は圧倒的に桜の情報が、夏から秋にかけ

ては花火やお祭りの案内が非常にたくさん届きます。なかなか行けないですけども、情報だけは拝見しております。

それでは、前半の最後になりますが、住民団体代表ということで、愛知大学総合郷土研究所の平川雄一様、お願いいたします。

■愛知大学総合郷土研究所

研究員 平川雄一 氏

本日、午前中に私が所属している三遠南信住民ネットワーク協議会では、住民セッションを行いました。今回は地域おこし協力隊をテーマに、OB、OG、現役の方3名から活動報告をしていただき、とてもよい内容でした。現在策定中の新連携ビジョンの参考になったのではないかと思います。

さて、観光といってもいろいろな見方がありますが、観光客、来場者への市場調査がとても重要になると思います。やはり三遠南信地域全域の観光施設来訪者の動向や観光行動、ニーズなどをきちんと調査・分析し、把握することが必要だと思われます。そしてそれを施策等に活かしていくと思われますが、そのためには三遠南信の連携を強められるでしょうし、今後の組織としての動きを期待したいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。問題提起ということで、観光客の人数や動向を把握して、政策にそれを活かす必要がある、ということでした。

ここまで、重点プロジェクト4について6名の方からお話をいただきましたが、ここまでで前田様、何かコメントをいただけないでしょうか。

■アドバイザー

ありがとうございました。星空、花火、お祭り、食、いろいろなキーワードが出ました。基本的に観光も一般の企業の運

営と全く同じ考え方で、事業展開を立案し、実行するということ、マーケティングをするということです。

基本的に、通常の企業はマーケティング活動として、自分たちの弱みを外部環境の機会に乗っかって克服していこうとか、自分たちの強みを外部環境の機会と掛け算し積極的に攻めていこうとか、そういった戦略を立案し実行する基本的なスキームがあります。観光も同じことで、我々の、この地域の強みと弱みを自分たちで理解して、それに対して外部環境の機会や脅威に対してどう立ち向かっていくのか、ということを考える必要があります。先ほど、神野会頭がおっしゃっていた、地域の本物というキーワードに、私は非常に心を打たれました。事業戦略と同じように、観光で立案される戦略の中に、各地域のキラーコンテンツとは何か、ということ自分たちで導き出さないといけないと思っています。いろいろなコンテンツがある、ではお客様は来てくれません。例えば、阿智村の例ですとやはり星空がキラーコンテンツとなったと思います。

企業は選択と集中です。行政の予算も同じことだと思いますので、観光も自分たちの強みが何なのか、弱みをどうやって克服しようか、というところから全てが始まります。それをつかさどる団体が観光においてはDMOというふうに言われていますので、ぜひ、そういった活用の仕方を皆様方も模索されてはいかがかなというふうに思いました。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それでは、重点プロジェクト5「中山間地域が輝くプロジェクト」に移りたいと思います。全国的に中山間地域をどう活性化するかということが課題になっていますけれども、この地域はそういう地域が多く含ま

れるということで、活性化のためにこれからどういう取組を進めていけばいいのか、それぞれお考えを發表いただきたいと思います。

では最初に、浜松市長の鈴木康友様、お願いいたします。

■浜松市長 鈴木康友

地域おこし協力隊の取組についてお話しします。協力隊の皆様には、中山間地域の活性化について大変頑張ってもらっており、浜松では山里いきいき応援隊、通称、山いき隊、と呼んでいます。地域外から来た若者が、例えば耕作放棄地やボロボロになったキャンプ場を再生するなど、いろいろな知恵で地域を元気にする取組をしていただいております。大変我々も期待をしております。また、3年間任期を務めた10名の方がこの地域に全員定住してくれており、移住の支援にもなっています。

三遠南信地域全体では、平成30年3月時点で181名の隊員が活動していると伺っており、おそらくそれぞれの地域で活動をしていると思いますが、1人でその地域に入っていくと、孤立してしまう場合もあります。それには、例えば定期的な情報交換をしたり、お互いにフォローし合ったり、という横展開ができるといいのではないかと思います。三遠南信サミットなんかで彼らの活動紹介をすれば、お互いの活動内容も分かりますし、この交流の中で連携ができるのではないかとということで、ご提案をしたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。ちなみに、浜松市の地域おこし協力隊には法政大学の卒業生である小川祐希さんもおりまして、この間、私の授業に招いて、自分が入り組んでいる活動の話をしてもらいました。学生たちも大変興味を持って聞いてくれました。

では、続きまして天龍村長の永嶺誠一様、お願いいたします。

■天龍村長 永嶺誠一 氏

私からは、重点プロジェクト5「中山間地域の輝くプロジェクト」の、県境地域での観光振興や交流連携事業の推進について、発言をさせていただきます。

私どもの天龍村を含めました長野県の南部地域と愛知県の奥三河と呼ばれている地域は、小規模の町村が多く、行政運営をしていく上で大変な場面が多いです。町村によって、抱える課題はそれぞれ違いますが、共通している地域課題については、連携をして対策を講じているというのが現状でございます。

例えば、下伊那の南部には5つの町村があり、当然、南信州広域連合にも加盟しておりますが、その5町村で総合事務組合を組織して、火葬場、診療所、公共交通バス、訪問看護ステーションの運営など、なかなか単独の町村では難しいものを一緒にやっていきます。

また、愛知県と長野県の県境をまたぐ5町村、愛知県は豊根村、長野県は阿南町、根羽村、売木村、天龍村、で県境地域の開発、振興、県境を越えた新たな山村づくりを推進していこうという目的で、昭和52年に、愛知・長野県境域開発協議会を発足し、40年たった現在もいろいろな活動をしています。県境域開発協議会では、議員同士の研修会や、住民同士の交流、道路交通や産業振興にかかることなど、3つに部会ごとに、それぞれが課題解決に取り組んでいます。

また、愛知大学の戸田先生にご協力いただきまして、「県境をまたぐ共生圏における新たな交流の創生」という冊子を作成し、こうした連携が大事だということで、昨年の2月に飯田市で行われました第24回三遠南信サミット全体会でもお話しさせていただきました。県境地域の置かれている厳し

い現状を踏まえ、教育、農林業、観光、スポーツ、移住・定住促進など、独自の地域づくりを実践してきたことが記載してあります。例えば観光では、5町村で、おいでんスタンプラリー、というものを行っております。愛知県の一番高い山である茶臼山を中心として、各町村で二つずつ観光施設などのポイントを設け、スタンプを押しながら全部で11か所をめぐると地域の特産品のプレゼントがもらえるというもので、年々参加者が増えています。

この5町村は、三遠南信地域の中心部分に位置していることから、歴史的にも東西、また南北の交通の交差する地域でございます。リニア中央新幹線開業後も、その特性を失うことなく、地域の将来に結びつけることが必要です。

三遠南信地域連携の中では、これまでハード面では三遠南信自動車道を始め（はじめ）とする道路整備、ソフト面ではドクターヘリ、防災体制、広域的な文化観光の情報発信や誘客に結びついており、山間部と都市部の連携の基礎、基盤が整備されたと思っております。その反面、リニア中央新幹線や三遠南信自動車道の開通後、これらの効果が都市部だけでなく山間部に及ぶように、この地域が通過地域にならないような、工夫、対策が今から必要ではないかと思っております。これらを踏まえ、私ども愛知・長野県境域開発協議会としては、地域の持続性を確保するための県境地域が一体となった計画の確立と、その実現に向けた活動を進める決意でございまして、今後さらに連携を図っていくことが重要だと思っております。

このことは、我々の愛知・長野県境域開発協議会に限らず、この三遠南信地域においても、プラットフォーム等を活用した地域連携が不可欠でありますし、それには三遠南信地域の知名度がアップしなければ、この地域が薄れてしまいますので、そのた

めにも連携が必要ではないかと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。SENA がなく、あるいは三遠南信という決まりきった言葉もまだ定着していなかった時代から、三遠南信の源流として、愛知・長野県境域開発協議会が長年活動されてきたということで、非常に大事な取り組みだと考えられます。

それでは、新城市商工会会長、権田知宏様、お願いいたします。

■新城市商工会 会長 権田知宏 氏

中山間地域が輝くプロジェクトということですが、実際はなかなか難しく、四苦八苦しているのが現状です。新城市は設楽町、東栄町、豊根村を含めた4市町村で奥三河地域と言われていますが、約20数年前から一緒にいろいろなことに取り組んでいます。

平成26年から地域おこし協力隊を各地域3人ぐらいずつ委嘱しており、任期の3年が経つと地域から出ていってしまうのが実情ですが、中には残っていただける方が見えて、日本でも特殊な技術を持ったり、ここでしかできないような産業を持つ会社もあったりしますので、その方々と協力しながら、いろいろなことに取り組んでいます。農家レストラン、スポーツツーリズムのパワートレイルラン、naori というビューティーツーリズムや、JA の外郭団体と協力しながら統一したデザインをつくって売り出すなど、我々も力を入れています。これを食べたら、ここに来たら健康になる、女性は美しくなるというテーマを掲げてやっておりますので、ぜひ、皆さんも一度お試しいただきたいと思います。

商工会としても連携をしており、おくみかわ創業塾や、本日の「技」分科会でも発表させていただいている新城軽トラ市など

を開催しています。軽トラ市は昨日、103回目の開催をさせていただきまして、三遠南信地域のそれぞれの商品、特産品を毎月一度売り出しておりますので、ここから企業同士の連携や特産品の交換などができるようになれば、中山間地域を活性化する一助になるのではないかと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。私も、このコーディネーターを務めるのに、103回を数える新城軽トラ市「のんほいルロット」を一度も見えていないのはいけないと思い、昨日お邪魔していろいろ買わせていただきました。

では、天竜商工会会長の大村邦男様、お願いします。

■天竜商工会 会長 大村邦男 氏

私どもは浜松市の天竜区の商工会でございます。面積は浜松市の62%ぐらいを占めていますが、人口は2万人を切っています。年間数億円の商売をなさっていた地元のスーパーが一昨日閉店し、すぐ近くに大型店がいくつかあるものですから、会員数はどんどん減る一方で、苦慮しております。

明るいニュースとしては、昨年二俣城跡と鳥羽山城跡の2つ、国の文化財の指定をいただきました。二俣城は、徳川家康公の長男の信康公が切腹したところでございますが、これから観光にも注力をしていかなければならないと思っております。他にも、本田宗一郎の生家や、お寿司屋のすきやばし次郎さんが幼少期を過ごした建物が現存しており、これらも活かすことができたかと思っておりますが、地主さんやご本人さんなどの調整など課題も多くございますので、今後取り組んでいきたいと思っております。また、かつては日本の三大祭りの1つと言われた花火、外国の品評会の金賞や農林水産大臣賞をいただいたお茶屋さんが数軒ござ

いますので、それらも発信をしたいと思います。

最近では、天竜区でも長野県の松本ナンバーの車を多く見かけますし、新東名高速道路の浜松浜北インターチェンジの高速道路の案内表示に、天竜区も入れてもらいたいなと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございました。天竜区は中山間地域ですけれども、海のもの、例えば佐久間でアワビの養殖をやったり、春野でキャビアの養殖を始めたりということを知っています。

それでは、泰阜村のけもかわ project の井野春香様に、ご発言をお願いしたいと思います。

■けもかわ project(元泰阜村地域おこし協力隊)

代表 井野春香 氏

私からは、地域おこし協力隊のネットワーク化支援についてお話しします。

私はもともと、平成25年から平成28年まで、泰阜村の地域おこし協力隊だったのですが、その時も地域おこし協力隊同士のネットワークやつながりは、交流会などの形でいくつかやられてきていました。ただ、私が当時感じたのは、自分には確固たる目的があったので、つながりさえできてしまえば、密に連絡を取るとか、情報交換を積極的にするとかいうことについてあまり必要性は感じませんでした。というよりも、事業を立ち上げるときに、アドバイスをくれるような方たちとのつながりがほしかったな、というのを感じていました。

最近、いろいろなところでネットワークをつくるという話をよく耳にします。南信州では、南信州発の長野地域おこし協力隊 OB・OG ネットワークというものを、伊那市の地域おこし協力隊の OG の方を中心に有志6人で立ち上げました。OB・OG がそれぞ

れいろいろな専門分野、私であれば猟であるとか、皮革活用であるとか、これから協力隊として活動していく人たちへのアドバイスができます。それ以外にも、カフェを運営している OG の子もいれば、ヨガをやっている方、シェアハウス、婚活事業、カウンセラー、商品開発、いろいろなことをやっている人たちそれぞれの課題や疑問、あるいは自治体側の課題もふくめて、そのネットワークで解決できたらいいなと思っています。

現在はコアメンバー6名ですが、さらに OB・OG を中心に講師登録として参加してくれる方たちを増やしていったらいいなと思っています。合ったイベントや継続的な契約などを行っていく予定でいますので、まずは南信州からなんですが、三遠南信地域にも広げていきたいなと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。井野さんは、泰阜村の元地域おこし協力隊であり、現在はけもかわ project ということで、鹿の皮や肉などをさばいて事業化していらっしゃる方ですけれども、地域おこし協力隊の体験者の情報ネットワークということで、大変興味深いと思います。

「住・人」分科会でご報告をいただく木村彩香さんも、飯島町の元地域おこし協力隊員ですが、南信州には卒業後も地域に残って活動を続けている方が多いですね。

■けもかわ project(元泰阜村地域おこし協力隊)

代表 井野春香 氏

そうですね。ちなみに、その木村彩香さんが発足人です。

■コーディネーター

ありがとうございました。それでは、後半のテーマである重点プロジェクト5について5名の方からご報告をいただきました。

前田様、ここでまたコメントをいただけないでしょうか。

■アドバイザー

ありがとうございました。地域おこし協力隊に関して、私のほうから事例を挙げさせていただきたいと思います。

私の大井川鉄道時代に、SLの車窓から見える昔ながらの原風景を再度取り戻そうということで整備を行いました。本線は約30kmありますが、自分たちで全ての整備はとてできませんので、地域の方を巻き込むために、島田市2名と川根町1名の地域おこし協力隊の方に事務局をお願いしました。彼らが地域のキーマンの方々にお伺いをし、何月何日、こういうものを植えたい、もしくは草刈りをしたい、一緒にやりませんか、と働きかけをやっていただいていた。当初はお願いするに当たって、やってくれるかどうかということを心配していましたが、むしろ逆で、彼らも頼りにされることを非常に喜んでくれて、彼らが大井川鉄道と地域をマッチングしてくれたという場面が多く、今後も、地域おこし協力隊の活用の仕方というのは多岐にわたるかなと思っています。

また、浜松市の地域おこし協力隊の小川祐希さんは、私たちが立ち上げた、浜名ジェンヌという地域の女性のSNSチームに入ってもらっています。現在、11名、地域のインフルエンサーの方を私たちが委嘱していますが、彼女にも、ローカルなエリアの情報発信、リアルなシュールな情報を発信してくれるように、今、実際に動いているところです。そういった意味でも、今後は今までとは違う概念で、協力隊の方々の活躍の後押しをしてみたいかなと思います。

最後に、今日の分科会では、移動手段というキーワードが必ず入ってくるとは思います。私は、JR飯田線はほかにはない強み

だと思っています。鉄道が走っているエリアの皆さんは、昔から走っているので当たり前だと思いますが、走っていないエリアからしてみると、うらやましくてしょうがないんです。今の時代鉄道を敷いてほしくても、JRも含めて投資する企業はまずいいです。次に出てくる代替手段はバスですが、ローカルのバス路線は基本的に黒字になり得ないものなので、どんどん便数が減っていきます。だから、既に目の前を鉄道が走っていることを活用しない手はないと思います。私が先ほど申し上げたキラークンテンツ、この地域の強みの中に、必ず飯田線が入ってくるとは思いますし、今後できる三遠南信地域の道路も入ってくるべきだと思いますので、公共交通のあり方についてぜひ議論を進めていかなければいけないと思っています。

例えば、昨日、しまなみ海道のサイクリングイベントに行ってきました。私も自転車で走りましたが、昨日は推定4,000人から5,000人ぐらいの方が全国から集まってきました。帰りに電車に乗ると、輪行といって、自転車を折りたたんだり、分解して背負ったりして電車に乗って帰られる方が非常に多く見受けられました。車で来る方ももちろん多いですが、やはり鉄道を利用して、飲みながら帰るという楽しみ方もあると思います。こういった鉄道の活用の仕方など、飯田線はまだまだ潜在価値があると思っていますし、皆さんが、地元の方が、まずは自分たちが飯田線に乗って楽しみ方を考えようという活動の仕方も、大切ではないかと思っています。

地域の強みを分析していく中で公共交通のあり方も、ぜひ、皆さんお考えいただきたいなと思いました。

■コーディネーター

ありがとうございました。やはり鉄道、路線バス、コミュニティバスの存在する意

義を考え、いろいろな使い方を工夫できるのではないかと思います。

さて、ここで本日の主な意見を簡単にまとめさせていただきます。

設楽町の新しい道の駅に民俗資料館を建設するとか、松川町のように新たな DMO の設立を目指すなどから始まって、各自治体の新しい取組のお話、またこの地域にしかないものを大事にしたり、横の連携を図っていくというご意見をいただきました。それから飯田線をひとつの資源として大切にしたいというお話も、複数の方からあったと思います。

この後の報告会での報告は、以上をもとに、私と事務局でまとめさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。中身の濃い意見交換ができて、大変うれしく思っております。以上をもちまして、この「風土」分科会を閉会といたします。

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	役職	氏名
コーディネーター	静岡文化芸術大学	副学長	池上 重弘
アドバイザー	豊橋技術科学大学	副学長	井上 隆信
報告者	LLP マリッジ・ローカル・コネクト	代表	木村 彩香
報告者	NPO 未来化プロジェクト	理事	川端 務夢
発言者	豊川市	市長	山脇 実
発言者	飯田市	市長	牧野 光朗
発言者	駒ヶ根市	市長	杉本 幸治
発言者	高森町	町長	壬生 照玄
発言者	平谷村	村長	小池 正充
発言者	下條村	村長	金田 憲治
発言者	売木村	村長	清水 秀樹
発言者	泰阜村	村長	横前 明
発言者	豊丘村	村長	下平 喜隆
発言者	てほへ	副理事	大脇 聡
発言者	龍山秘密村（浜松山里いきいき応援隊）	村長	川道 光司

■コーディネーター

静岡文化芸術大学 副学長 池上重弘 氏

静岡文化芸術大学の池上でございます。昨年から新ビジョン策定委員会の委員長を務めており、この会議にも関わっております。もともとの専門は、インドネシアをフィールドとする文化人類学ですが、1996年に浜松に来てから、外国人住民の増加に伴う地域社会の変化という多文化共生と呼ばれる分野に関心を持ち、牧野市長とは外国



人集住都市会議でずいぶん前からのおつき合いということになっております。

それでは、「住・人」分科会のテーマを確認します。新ビジョンの基本方針4の「住」の、安全安心な広域生活圏の形成、そして基本方針5の「人」の、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成、の2つがテーマになります。

それではまず、新ビジョン案について、事務局からご説明をお願いします。

■事務局

新ビジョン案では、地域連携の基本方針を5つにまとめており、そのうち特に重点的に取り組むものとして、7つの重点プロジェクトを設けております。この「住・人」分科会は、基本方針の「住」、「人」と、重点プロジェクトの6、7について意見交換を行います。

重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」は防災体制、婚活事業や移住・定住、女性が暮らしやすい地域づくり、県境を越えた住民交流などが掲げられております。

重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」は、子供、学生、行政職員などの交流機会の創出・拡大、地域教育活動の促進、人材の育成・定着化などが掲げられております。

■コーディネーター

ありがとうございました。新ビジョンのうち、重点プロジェクト6と7、人にかかわること、暮らしに関することについて意見交換をしていくということでございます。

それでは最初に、関連事業報告ということで、連携した婚活事業について、LLP マリッジ・ローカル・コネクト代表の木村彩香様からご報告をお願いいたします。

■LLP マリッジ・ローカル・コネクト

代表 木村彩香 氏

LLP マリッジ・ローカル・コネクトの木村彩香と申します。連携した婚活事業、「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」についてお話しさせていただきます。こちらは、本日同席させていただいている泰阜村社会福祉協議会の松川さんの発想から始まりました。私たち民間企業の橋本がシステムをつくり、私が広げたという形で、行政と民間との連携になっています。

まずご覧いただきたいのは、長野県内の結婚相談所に登録のある男女比率が7対3ということです。私が婚活イベントを始めて5年目になりますが、実際に長野県内の女性がイベントに出てくることは少ないです。一方都市部の女性には、自然豊かな場所で暮らしたいと思っている方が多く、さらに田舎の男性に対して、すごくプラスなイメージを持っております。長野県の男性に対しても、まじめで素朴で優しい、全てプラスの言葉をいただきます。例えば、15年間結婚相談所に登録していた男性が、東京へ婚活に出て成婚が生まれたり、失恋して結婚を諦めていた男性が、このイベントに出て名古屋圏の女性と結婚したり、長野県で婚活していた男性は、県外の女性からすごくモテました。

この「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、4年目になりますが、この地域に移住して結婚するカップルが3組発生しており、4組目、5組目となりそうなカップルもあります。「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、長野県内の独身男性が実際に東京や名古屋へ出て行って、女性と2回に渡る婚活イベントを実施いたします。私も神奈川県出身で、東京で働いていたときに、地方の婚活イベントに1泊2日で行くのは、自分の予定が制限されると感じていましたが、都市部の女性が足を運びやすい場所で田舎の男性に会えるというのはすごくメリ

ットになります。同時に参加自治体の市町村のPRにもなりますね。田舎で暮らしたい、自然が好き、農業がしたい、林業がしたいという女性が多く来場されます。婚活イベントと同時に移住相談ブースをつくっており、ふるさと回帰支援センターの担当者が実際にそのブースに出向いたこともありまして、移住相談ブースは、毎回女性の列ができるほどすごく人気になっております。

過去に名古屋と東京で開催いたしました婚活イベントの結果です。名古屋から見ると三遠南信地域は移住が考えられる範囲の距離で、すごく強みがあります。名古屋でのイベントは大体20人から30人の女性が集まりますが、東京では30名ほどの予約があっても当日キャンセルが多く、名古屋の女性のほうが、田舎に住みたい、長野県の男性と結婚したいという気持ちが強い傾向にあると思っております。

「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、現在7市町村が連携でしており、ひとつの自治体ではできないことを、複数自治体で連携することによって、仕事を分担できますし、南信州のよさをPRしていくことができます。横のつながりを大事にして、個々の自治体での人口の取り合いではなく、協力していくことが大事だと思います。

システムにもメリットがあります。男性は1日に20人から30人の女性と会いますので、経験値がすごく上がります。また1か月前に事前レクチャーを必ず行い、服装のチェックなど、イベントまでの期間を私たち民間の団体がサポートさせていただきます。

移住と婚活はすごく相性が良く、女性は「いい人がいたら、その地域に行きたい」と必ず言います。「突撃！田舎にお嫁に来ませんか！？」は、地域の男性と都市部の女性をつなぐことによって、地域への移住促進にもつながります。今の時代、移住、結婚、少子化対策の一つだけを進めるのはなかなか難しいです。豊かな自然、名古屋か

らの近さ、という三遠南信地域の強みと、移住、結婚、少子化対策の三方よしの取組を、広域で連携するというのがすごく大事だと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。それでは続いて、若者の人材育成についてということで、NPO 未来化プロジェクトの川端務夢様に報告をお願いします。

■NPO 未来化プロジェクト 理事 川端務夢 氏

NPO 未来化プロジェクトの川端と申します。

この NPO 未来化プロジェクトは、平成27年に浜松を中心に地域を盛り上げていく人材の発掘と育成を目指して設立された団体です。その中で次世代、若者の育て方をどうしていこうかという課題に対して取り組んでいるのが、この「浜名湖若者1,000人会議プロジェクト」です。浜名湖、とありますが、浜名湖から何 km が浜名湖圏内か、というお話ではなく、象徴的な場所として浜名湖を設定しているだけで、基本的には遠州三河の若者のため、我々年寄りが伝えていこうというプロジェクトです。

現在の若者の感覚ですが、まず、ものづくり中心志向は、悪いことではない成功体験の呪縛があるそうです。また、強烈な競合体質で、仲間以外は排除することも若干あるようで、例えば、A 組織と B 組織の仲が悪いとか、この地域とこの地域の仲が悪いとか、そういう対立が地域活動に支障を来しているようです。もう一つは、男性志向が強くて女性蔑視的なところも若干あるのではないのか、ということも若者の感覚です。きちんとリサーチをしたわけではないですが、我々がおつき合いさせていただいている若者の感覚は以上のようなもので、このような環境ではリノベーションは起こしにくいです。

それでは、次世代を担う若者には何が必要でしょうか。我々は、社会性を持った若者が自分の位置を確認できるような若者同士のネットワーク、それから、よりよい地域連携を築くためのシステムを学ぶ場、それらの解決をサポートする専門家、の三つだと考えました。

そんな中、次世代に対する我々大人のミッションは何だろう、ということで、地元の若者ないしは県外在住の地元の出身若者と、大人サポーターによる大会議をやったらどうだというアイデアが出てきました。若者1,000人会議は、決して目新しいフレームではなく、高知や、長野県の東信でも既に行われていますが、住んでいる若者たちはそれぞれ違います。その若者1,000人、そして大人のサポーターが入ることによって化学反応が起き、そこで人が育つ、ということを我々の目標としたいと思っています。世界中から人が集まる地元の未来づくり、未来の地元を担う核となる若者の育成です。我々は2022年に浜名湖若者1,000人会議を開催しようと思っていますが、そのプロセスを、今年から始めています。遠州と東三河の若者に、社会的課題をビジネスの手法で解決できるソーシャルビジネス・アントレプレナーという手法を学んでいただき、その若者が核になって、自分たちなりの若者1,000人会議を構築して、地域に貢献できる産業や事業フレームをつくってもらえたらいいのではないかと考えています。「自分たちの未来は自分たちでつくる」をテーマに、今年から2020年まで3期にわたってソーシャルビジネスのフィールドワークや座学を行い、2022年に1,000人の若者が集まって化学反応を起こしながら地域活性を行うという構想です。また、既に地域の活性化に活躍していてこのような学びは必要のない若者もおりますので、その方たちとも連携しながら、三遠南信地域の課題を自分たちのこととして考える若者を育成したいと思

っています。

実は昨日、浜松の市民協働センターでセミナーを行い、菊川市より西側の若者約30人近くが集まりました。富士市から参加してくれた方もいます。また、愛知大学の戸田ゼミナールのご協力をいただいて、愛知大学でも10月からセミナーを始めています。

我々は次世代の若者のため、いろいろなフレームをお伝えしながら、社会の課題を解決する人材をどんどん育てて、それがソーシャルビジネスでなくても、ビジネスでも結構だと思っています。本来ビジネスというのは、どれも社会をよくするために存在していると我々は認識しておりますので、あえて申し上げるなら、地域の産業の軸も含めた収益性を持った継続的な活動ができる若者を育てていきたいというプロジェクトでございます。

■コーディネーター

ありがとうございました。最新の状況なども含めてご紹介いただきました。

それでは、ここから意見交換に移りたいと思います。重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」という2つのトピックを扱います。

先ほどの全体会の登壇者や観覧者は私を含めて、ほとんどが男性でした。女性や経験を積んだ年配の方、この地域の特色として留学生とか定住外国人など、様々な方が集まって、2030年に向けてこれからの10年を考えていかなければいけないのに、50歳代の男性ばかりで、何か説得力がないなと思っていました。幸いこの会場では、女性の方々の顔が見えて、こうでなければいけないと思って少し安心しています。ただ、本日は時間が限られていますのでフロアからのご発言はできないのですが、ぜひここでの発言を踏まえて、この後の交流会等で意見交換ができればなと思っています。

それでは、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、住民が住み続けたいと感じる地域づくりのためにどんな取り組みをすればいいか、という意見交換に移ります。私自身、実は生まれも育も北海道札幌で、約20年前に親戚や縁者、友人、知人が全くいない浜松に来ましたが、今やここがすっかり気に入っています。先ほど婚活イベントのお話もありましたが、他地域から来た人が、ここに住んでみたいと思うような地域づくりにどんな取り組みが必要かについても、ぜひお話をいただきたいと思います。

では最初、NPO 法人てほへ副理事の大脇聡様からお願いします。

■てほへ 副理事 大脇 聡 氏

私たちは、日ごろは東栄町を拠点に活動しておりますが、私の本職は和太鼓プロ集団志多らという、プロの和太鼓チームのプロデューサーです。その志多らが地域を元気にしようということで立ち上げた法人が、この NPO 法人てほへで、この両輪で活動をしています。本日午前中に三遠南信地域住民セッションが行われ、てほへは三遠南信住民ネットワーク協議会にも入っており、分科会にも参加させていただいております。

住民セッションでは、「地域おこし協力隊の連携ということをテーマとしてほしい」と SENA からお話があり、どんな形で進めようか協議会で話をしました。我々は活動しながら、いろいろな地域の協力隊ともかわっていますが、本当に協力隊の連携が必要なのか、協力隊の任期を終えて定住した人の連携が本当に必要なのかと考えた時に、連携しなくてもできることはあるし、協力隊員以外にも地域に戻ってきて、地域のためにいろいろなことをやろうという若者もいます。私も25年ぐらい前、地域おこし協力隊の制度がある前から東栄町に移り住んでいますが、若者が地域に住み続けて

活躍していくためには、自分の活動を継続していくための経済的な要素が必要で、そういう面での連携が大事ではないかということを、OB・OG フォーラムでは話し合いました。

都会の若い子が志多らにいっぱい来ますけれども、みんな太鼓のプロになりたいという夢を持って来ますし、私たちの回りにいる若い人たちをみていると、自分の望む生き方をするにはどの地域が合っているかと考える人が多いです。自分がやりたいこと、仕事、生きがい、結婚、地域の方とのかかわりなど、いろいろなものがそこで住みたいという思いになりえて、それらと地域がどうマッチするかということが一番大事だと思います。それら全てがそろっていることはおそらく都会でもないでしょう。この地域では、こういうことができる、こういう人がいる、という求心力のようなものを行政の区分だけではなくて、三遠南信地域で連携して持っていくことで、全国の中でこのエリアのどこかに住みたい、となるのではないかなと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございます。自分の生きざまを体现できる場所としての三遠南信の魅力を連携して発信していく、というアイデアをいただきました。

それでは次に、売木村の清水秀樹村長お願いします。

■売木村長 清水秀樹 氏

私は、売木村に住んでもらいたいというところからお話をさせていただきたいと思っています。

私は、交流の中から定住を、ということで村づくりをしております。そう思ったのは、私が村長になる前の平成18年に「うるぎ米そだて隊」というイベントがきっかけです。もみまきから始めて最後の稲刈り、

脱穀まで年7回、参加者に売木村へ足を運んでいただくというイベントです。7回足を運んでいただくと、村が非常に身近な存在になります。またイベントに参加してくれた皆さんが、今度は農作物を持って、豊橋、浜松、名古屋などに一緒に売りに行ってもらったり、友達を紹介してくれたりして、売木村のファンになってくれた方や、中には移住してもらった方もおられます。その経験から、まず村を知っていただき、来ていただくことで、村に愛着を持ってもらうことが一番大事ではないかと思っており、「売木の村長はイベントが好きな村長だ」と言われますが、村を知っていただくためのイベントをいつも開催しております。

また、元気な村には人が集まってくるといふ、私の強い思いがございまして、村の活力を発信するため、マラソンランナーの合宿地を目指して政策を進めており、おかげさまで3,000人を超すランナーが、村に合宿に来るようになりました。若い人たちが走っていると、「この村は元気なんだ」と感じていただけ、そこにやはり人が集まってくるとおもっております。

それともう一つ、売木村は小さな村で4つの峠に囲まれた盆地なのですが、田んぼがあつて、周りに山があつて、「ああ、田舎だなあ」と、感じていただく村の風景を残しておくことが、これからの時代には癒される村として、移住などにつながってくるのではないかと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございます。まずは村を知ってもらって、それが移住につながるというお話でした。実は昨日、島田市でフルマラソンを走りましたが、「売木村」というTシャツを着ている人が走っているのを見かけました。

■売木村 清水秀樹 氏

「売木村」と入ったTシャツを販売していて、それを着ていろいろなマラソン大会に出ています。それもPRになっていると思います。

■コーディネーター

今度私も着て走りたいと思います。

それでは続きまして、下條村の金田憲治村長にお願いします。

■下條村長 金田憲治 氏

先ほどマリッジ・ローカル・コネクトさんから婚活のご報告があり、それを応援する意味で発言させていただきます。

私の村は少子化による人口減少が大きな課題でございます。村の現状と、その課題に対して取り組んでいる事例を申し上げて提言をさせていただきたいと思います。

下條村の面積は38.12km²で、長野県の中で4番目に小さい村です。海拔332m から828mの間に14の集落があり、農業と製造業が主な産業です。人口は、本年度10月1日現在で3,770人です。平成4年とほぼ同じ人口で、平成14年ごろに4,200人ほどまで増えましたが、その後減少傾向となり、ここ3年はその傾向が強まっています。平成27年の合計特殊出生率は、1.82という比較的少ない数字ではありませんが、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計によりますと、2040年には2,800人まで人口は減ってしまうということでございます。

総務省の自治体戦略2040構想研究会でも、人口減少と高齢化については、未曾有の危機というような表現をされております。私どもも、平成4年度から、定住住宅の建設、中学生までの移住の無料化、安心して子育てができる環境づくりなどに取り組んでおります。

その後も、高校生の通学補助、保育料無料化、子育て支援センターの建設など、環

境は整えてきましたが、なかなか減少に歯止めがかかりません。1番大きな原因は少子化で、中学生は1学年平均50名に対し昨年度の出生が20名程度と非常に少なくなっています。また、30代の未婚率が30%ほどで、その方たちからは、いい相手がいれば結婚をしたい、ということ聞きます。そういう点で婚活イベントは効果的である反面、イベントに参加する人はまだ一部で、参加しない方々もいるので、そういう層まで幅を広げていく必要があると感じており、広域連携で婚活を進めていただけると非常にありがたいと思っております。

■コーディネーター

ありがとうございます。厳しい少子化の状況の中で、住宅や保育料といったところで村が大幅な財政支援をしていること、また、婚活に期待している一方で、婚活イベントに参加できない、しない人たちにも何か方法があればというお話をいただきました。

それでは続きまして、豊丘村の下平喜隆村長、お願いします。

■豊丘村長 下平喜隆 氏

豊丘村は、南信州広域連合で考えた「ダーチャ」という地域おこしの一つのスタンスを進めています。

「ダーチャ」とは、旧ソ連で普及したもので、国が給料を払えないから、住民に自分で食べ物をつくってもらおうというもの。国が都市部の住民に、車で1、2時間のところへ1戸当たり約1aの土地を与えました。それで自分の食べ物は自分で作り食いつないだわけですが、それが現在になっても、そのまま都市部の文化として残っています。大都市の皆さんは、郊外に住宅付きの手づくりの家と畑を持っていて、必ず土日になると家族でそこへ行って、食べる物をつくって、家族のコミュニケーション

を兼ねて帰ってくるそうです。

日本でも、既に企業版ダーチャとして、山梨の都市ではいくつかの会社が動き出しています。この地域でも南信州広域連合の第1号を豊丘村でやってみてはどうかと、飯田市長の助言があり、我が村としましても、民間企業へ従業員を派遣して、まずは第1号の企業版ダーチャをやってみようと思っています。

なぜ企業版かと申しますと、都市部の企業では従業員の精神疾患が非常に問題になってきており、メンタルなものに対しては、自然や農業は効果が高いらしく、最初のころは、いやいややっていたものが、土日を挟んで次の月曜にはみんなの目が輝いていて、チームのまとまりもよくなるということです。日本では、土地は個人が持っているもので、個人と企業の間には行政が入って、企業版ダーチャをやることで、都市と田舎の交流を深め、いろいろなものが生まれてくるのではないかと、現在具体的に相手の企業を探し始めているところです。

また、三遠南信地域の都市部の皆さんにおきましては、これについて広めていただければありがたいと思います。

■コーディネーター

ありがとうございます。ダーチャは菜園つきのセカンドハウスというような一般的な理解があらうかと思いますが、それを企業向けにということに特色があることがよくわかりました。ありがとうございます。

それでは続きまして、泰阜村の横前明村長にお話をお願いします。

■泰阜村長 横前 明 氏

最初に LLP の婚活のことについてご報告をさせていただく時間をいただきまして、私からも御礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、住み続けたいと感じる地域づくりということですが、私は移住者にスポットを当ててお話をさせていただきます。泰阜村へ移住をしてきた、子供のいる若い夫婦に、なぜ泰阜村、なぜこの地域に移住をしたのかというお話を伺いました。一番は子育て環境がよかったということでした。子育て環境といっても、補助金などではなく、自然環境がよかったということでした。それから、三遠南信地域は東京から遠く、ゆっくりとせざるを得ない、という価値もあるそうです。中国地方への移住者も増えていて、同じように都会から遠いことこそいい、という価値観が若者の中にあると言われています。

これは、豊かさをはかるものさしが、物質的なものから心のゆとりにさらに変わってきていることも影響しているのでしょう。内閣府の国民生活調査では、昭和47年と平成24年を比較すると、豊かさを物質的に依存する人は10ポイント減って30%に、心の豊かさやゆとりに重きを置く人は27ポイント増えて64%になったことを見ても、物質が豊かになったとも言えますが、若者が求める価値観も変わってきていることが分かります。

三遠南信地域は、都市部から中山間地域まで幅広く、またリニア中央新幹線の開業によって地域が変わるかもしれませんが、中山間地域では、自然の中で伸び伸びと育てられる環境と、それをきちんと行う仕組みが大事だと思っています。泰阜村にはNPO 法人、教育センターがあり、そういったプロ集団がいて、自然の中で保育をしていく仕組みをきちんとつくることができれば、子育ての環境がいい田舎への移住者が増えると思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。東京から遠いこと、ゆっくりせざるを得ないメリットが

ある一方で、リニア中央新幹線の開業でどう変わるのかという大きな問題もありますね。

それでは、豊川市の山脇実市長にお願いいたします。

■豊川市長 山脇 実 氏

豊川市は平成28年に第5次総合計画が終了し、新たに第6次総合計画を策定しましたが、その大きなテーマといたしまして、人口減少問題に対応するため、子育てをしながら女性が働きやすい環境づくりに取り組み、「子育てするなら豊川市」と言われるような施策を進めています。国勢調査の結果、平成27年までの5年間で、東三河全体では人口が減少しましたが、おかげさまで豊川市はわずかですが増加しており、これからも子育て支援に力を入れていきたいと思っています。具体的には保育園や児童クラブでの子育て支援の充実、全ての小・中学校の普通教室へのエアコン設置などを進めています。今年は猛暑で、豊田市では小学生が熱中症で亡くなるという、いたましいニュースが全国で大きな話題になり、国を挙げて小中学校のエアコン設置に取り組んでいますが、3期目の就任時に掲げた施策がこのような形で取り上げられることとなり、実施にあたって非常にタイムリーな事業であったと思っています。

人口増加には、結婚と出産がポイントであり、農協や青年会議所と協力して縁結び事業等に取り組んでいますが、残念ながらなかなか思うような成果は出ていません。一方、転入促進の施策において、豊川市内の主要な7つの鉄道駅の周囲800m 以内に、市外にお住まいであった方が家を建てて住んでいただければ、固定資産税相当額を交付するとともに中学生以下のお子さんがいらっしゃる世帯の場合には、上乘せの奨励金を交付する事業を始めました。今年は9月末時点において23件の申請があり、今後

にさらなる効果が出てくると期待しています。

また、災害に対する市民の皆さんの不安が大変大きいということで、災害への備えとして、平成31年の完成に向けて防災センターの整備を進めています。今後も「子どもたちの笑顔があふれ安全安心で人にやさしいまちづくり」をしっかりと進めていきたいと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

ここまで、重点プロジェクト6の「住むなら三遠南信プロジェクト」についてのご意見をいただきました。ここからは、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」のパートに移ります。この地域の未来を担う人材の育成や、定着のためにどんな取り組みをするといいだろうか、ということでお考えをお聞かせいただければと思っています。

それでは高森町の壬生照玄町長からお願いいたします。

■高森町長 壬生照玄 氏

市田柿発祥の里の高森町の壬生です。よろしくをお願いします。

人材育成や地域教育の促進というのは非常に難しいテーマですが、まず三遠南信地域の歴史や文化を小中学生に浸透させることが必要です。けれども、メディアで三遠南信地域全体が取り上げられる機会というのは非常に少ない上に、テレビの放送地域や新聞の圏域が違っての中で、小中学生に同浸透させていくのかということは非常に難しい状況です。それから、今の小中学生、高校生は、勉強に費やす時間が多く、三遠南信のことを考えると、か、地域のことを考える時間があまりないのではないかと考えています。そういった時間をつくるために、例えば、昔のゆとり教育の中で地域

を考える時間をつくる、というような根幹のところから政策を打っていかないと、三遠南信地域を語るとか、文化を交流させることは難しいかなと思っています。

その一方で社会人教育を考えると、先ほどのような報告があった1,000人会議のように、大学生や若者に対してアプローチをかけていくということは非常に重要で、できれば飯田下伊那や上伊那にも、そういった活動が広められないか感じていました。特に、南信州にそれは大学がないので、浜松や豊橋の大学にかかわっていただいて、三遠南信地域で、人材育成を進めなければいけません。高森町でも社会人学校を開いていますが、皆さんへの指導や話ができる人材をつくっていかねばいけないと感じていました。

■コーディネーター

ありがとうございました。地域の大学とどうかかわるか、私たちも宿題をいただいた感じがあります。

それでは次は、龍山秘密村の村長という立場で、浜松山里いきいき応援隊の川道光司さんにお話をいただきます。

■龍山秘密村（浜松山里いきいき応援隊） 村長 川道光司 氏

浜松市の龍山町で地域おこし協力隊をしております川道と申します。村長とありますが、自治体の村長ではありませんので、ご承知おきいただければと思います。

龍山町への移住者という立場でお話をさせていただきます。正直、龍山町に何か特出すべきものがあつたかということ、これといったものはありませんでした。僕は自然が好きで移住してきましたが、以前住んでいた、富士山の周りのほうが自然環境はすばらしかったですし、環境面もとてもよかったと思っています。龍山町が決め手になったのは、人でした。僕の友人が前任の地域

おこし協力隊で、その方連れられて、地域の方々と交流したときに、とても温かい歓迎の気持ちを感じ、ぜひここでやっていこうと思って、ここに住むことを決めました。

そうやって人が人を呼び、全てのことがとんとん拍子にうまく進んで、たった2年半でも安定して住むことができており、今度は僕自身が必要な人材を呼びたいと思っています。ただ、僕だけの力で、全国から必要な人材を呼び込むのは難しいので、人を呼び込む補助制度や支援制度があれば、それを利用して新たな人材を生んでいきたいと思っています。地域おこし協力隊という制度で行政の方々が人を呼び込もうと働きかけていただいています、そのこと自体を委任してもらい、僕自身が地域おこし協力隊の窓口として人を呼んでこられれば、次につながっていくのではないかと考えております。

■コーディネーター

ありがとうございます。先ほど、望む生き方を実現できる場所を選ぶ、という話が出ましたが、一方で決め手となったのは人であったということでした。また、人がまた次の人を呼んでくるけれども、個人のネットワークや能力には限界があるので、支援の制度ができるといいなという、重要な指摘でした。

それでは次は、平谷村の小池正充村長にお願いします。

■平谷村長 小池正充 氏

平谷村は標高が920m、人口は440人弱で、ともに三遠南信地域では一番と思っています。三遠南信地域には、都市から小規模の自治体、そして自動車産業から農林業まで、さまざまな産業が存在しております。それぞれの自治体や企業の得意とする分野で地域や産業の壁を越えて、学びや体験の機会の提供をし合い、地域内の人材の育成

や定着につなげていきたいと思っています。

平谷村では未来を担う子供、地域住民が遊びたい、学びたい、働きたい、暮らしたいと思える魅力的な村づくりを目指し、ヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトという教育を軸とした活動を行っています。ヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトは、教育委員会を中心に小学校、地域住民、都市部の大学生、地域おこし協力隊が連携しながら、地域の子供たちがさまざまな人材や多様な学びと接する機会を創出しています。

プロジェクトの活動の一つの大学生受け入れ事業で、平谷村の小学生が、大阪教育大学の学生との放課学習、野外炊飯や小学生都市体験等を通じ、普段接することが少ない都市部の大学生と触れ合い、互いに学び合っています。単なる交流だけにとまらず、持続性のある体験に基づいた学びに触れることによって、地域の特性を深く理解した人材、地域の未来を担う人材を搬出できると考えています。

小中高生が三遠南信地域で多様な学びに接し、地域の魅力を発見し、自身の未来の夢を描ける地域づくり、教育環境づくりにともに広域生活圏のネットワークの形成の提案をするところでございます。

■コーディネーター

ありがとうございます。教育委員会が主導するヒラヤ・キッズ・ビレッジ・プロジェクトについて重点的にお話をいただきました。村にしながら、都市の若者たちとも接点を持てるというお話しでした。

それでは次に、駒ヶ根市の杉本幸治市長をお願いします。

■駒ヶ根市長 杉本幸治 氏

ここまで皆様のお話をお聞きして、地方が抱える少子化の問題、人口減少という課

題は、どこも同じだと思います。

今、駒ヶ根市は、地域の財産をもう一度見つめ直し、それを活かしたまちづくりをしようとして取り組んでおります。駒ヶ根市の1つの財産はJICAの青年海外協力隊の訓練所があることです。今年の3月には、青年海外協力隊のOBがつくっている青年海外協力協会の本部が東京から駒ヶ根に移ってまいりまして、正規の職員30人、その家族20人、合計50人が一気に駒ヶ根市に来ていただきました。

その中で、JICAの訓練所には語学のできる先生が大勢いるものですから、大学生の皆さんにJICAボランティアの訓練に参加してもらい語学を学ぶ、駒ヶ根グローバルユースキャンプを、平成29年から実施しています。今年は横浜国立大学の大学生が何人か駒ヶ根に来ていただきました。取組を進める中で、地域に興味を持っていただき、それが移住・定住につながればいいなと思います。

これからの新しい取組として、三菱総研と逆参勤交代を進めています。逆参勤交代と言っても分かりやすいですね。都会で働いて疲れている皆さんが田舎へ来ると元気を取り戻すということで、大企業に田舎の事務所をつくってもらい、2、3か月田舎に来て仕事をして、リフレッシュして都会に戻ってもらう、という取組を進めています。逆参勤交代をするなら、三遠南信地域へ、といった受け入れ先のチームをこの地域で組めたらおもしろいのではないかと思います。駒ヶ根市でもテレワークオフィスを一か所つくりました。そのおかげで、女性の皆さんが働く場所ができています。

また、平成23年に田舎暮らし推進協議会というワンストップの移住者受入窓口をつくりました。銀行、不動産会社、行政、建設会社、全てを1つの窓口で案内するもので、平成23年に9組22人だった移住者が、去年は62組152人まで増えました。また、移住して

来た皆さんが、駒ヶ根ってこういうところで、一緒に来て事業を始めないか、というネットワークによって何人か来ていただけています。今は、ハウス型の農業を一つのグループになって起こしていただけており、移住者が安心して来られる、そういうネットワークも貴重だなと思っています。

それから子供たちには郷土愛プロジェクトに取り組んでいます。小学校や中学校に地元の企業の皆さんが行って、地元にはこんな企業あるよ、とPRします。高校生は、生徒、親、先生と一緒に企業等を回り、これからの未来を高校生の皆さんに託すという言葉をかけています。私も、成人式など機会があれば、これからの自分たちをどう考えるかという動機付けをしています。

しかし、少子化については一生懸命取り組んでいますが、なかなか歯止めはききません。これからの子育て世代の皆さんに、少子化が進んでしまったら、これからの未来、自分たちの世界がどうになってしまうのかを感じてもらわなければなりません。ご報告のあった1,000人会議のように、それぞれが主体者となってまちづくりを進めるような取組をしていきたいと思っています。

もう一つ大きいのは連携です。連携なくして地域の発展はありませんので、それぞれの地域が全てを用意するのではなく、あるものをお互いが補完しあって、三遠南信地域の連携も、もっと進めるべきだと思います。ただ南信州の場合は、どうしても山の峠を越えなければならず、東三河と遠州と連携するには少し工夫が必要だと思いますので、皆さんからまたアイデア頂ければと思います。

■コーディネーター

ありがとうございました。JICA、JOCAを地域資源として活かす、大学生を呼んでグローバルユースキャンプをする、逆参勤交代という企業からの受け入れをする、非常

に斬新なアイデアをたくさんいただきました。

それでは、飯田市の牧野光朗市長にお話をお願いいたします。

■飯田市長 牧野光朗

地域の将来を担う人材育成について、お話をさせていただきます。我々が地域人と呼んでいる「地域を愛し、地域を理解し、地域に貢献する人材」をどうやって育成するかということが、非常に大きな課題だと思っています。

市町村の教育委員会は、基本的に義務教育を担当しているという意識がありますから、小学校、中学校においては、地域人材の育成に取り組んでいるところが多いと思います。飯田市でも、小中一貫教育やコミュニティスクールの導入など、地域と学校との関係を強めて、子供たちが地域を学んでもらう機会をつくっています。問題は、高校生です。若者の進路の転機は、高校卒業時にあり、飯田市では約7割の高校生が一旦地域を離れていくという状況で、そのままでは帰って来ません。高校生までの期間に地域人材としての学びを身につけてもらうことが重要になると思います。

飯田市では現在の飯田OIDE長姫高校、松本大学と3者でパートナーシップ協定を結び、飯田OIDE長姫高校商業科の正式な単位科目として、地域人教育を導入しました。今年で7年目になりますので、地域人教育を受けた高校生が3度卒業していることになります。この取組によって、地域のことにについて考える高校生が非常に増えてきました。高校1年生の最初の授業は私が担当するのですが、「地域のことを考えるなんて面倒くさい」とか、「うざい」という感じが、伝わってきます。しかし、高校3年生の12月になると、目の色が違ってきます。高校生が、地域人としての素養を身につけ、地域のことを自分のこととして考える人材に変わる

のを目の当たりにしています。

このことは、私も様々な場面で話をさせてもらっています。文部科学省も非常に注目し、今年の骨太方針で高校教育改革の一つの柱として地域人教育が取り上げられていますし、私も参加している教育再生会議でも重要な柱になってきています。地域人教育を全国展開していく流れができ、大学と高校と地域の皆さん方で、どのように展開していくかということが、考えられています。

地域人教育で重要なのは、高校の教育と地域を結ぶかけ橋になるコーディネーターの存在です。文部科学省は、飯田市の例のほかに、離島の高校に本土から高校生が通ってくる島根県海士町の例を取り上げています。2つの共通点は高校と地域を結ぶコーディネーターがいるということです。海士町ではこのコーディネーターをNPOが担当しています。NPOが行うことはもちろんいいことですが、継続的に行うためには課題も多いと指摘されています。飯田市ではその役割を若い公民館主事が担い、継続性が担保されているということで評価されています。横展開のときには、このコーディネーターの役割を誰が担うかが重要になると考えています。

■コーディネーター

ありがとうございます。高校生向けの地域人教育ということで、地域と学校を結ぶコーディネーターを公民館主事が担い、継続性を担保するとのことご報告いただきました。

ここで、分科会のアドバイザーである豊橋技術科学大学の井上隆信副学長にコメントをいただければと思います。

■アドバイザー

豊橋技術科学大学 副学長 井上隆信 氏
皆さんのお話を聞いていて感じたのは、

人が人を呼ぶということです。魅力ある人がいないと人は集まってこないだろうと思いますし、その魅力ある人をどうやってつくるのかということが、重要だと思いました。

もう一つは、牧野市長の言われた地域人教育です。小学校、中学校、高校で村を愛する子供をつくれば、女性が村から出ていっても、結婚相手を連れて村に戻って来て人口は増えるだろうと思います。

出て行った女性はなぜ戻って来ないのか、戻って来るためにはどうすればいいのかを考える必要があります。理系の発想で言うと、少子化や人口流出という現状から、なぜそうなっているのかという課題を抽出し、それを解決するにはどうすればいいかということを考えますが、その際に他と同じ発想をしていたのでは埋もれてしまいます。それぞれの自治体プランがあると思いますが、何かきらりと光るものを持ってもらうということが一つ。もう一つは、この三遠南信地域が一体となって、いかに外から人を呼んでくるかということ、その人たちを、自分たちのまちに引っ張り込むということ、その両方の観点から、それぞれが特徴を活かして、それぞれの地域が伸びていくようになってもらえたらいいなということを感じています。

■コーディネーター

ありがとうございました。私も、人が人を呼ぶということは、とても大事だと感じています。その場所が気に入って移住したけれども、とんでもない人間関係に巻き込まれてまた引っ越していったというネット上での話を、私も逆の意味で興味を持って読むことがあります。やはり人という条件があって初めて移住の条件を満たすのだろうと思って聞いておりました。

ではここからは、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、重点プロジ

ェクト7「人生100年時代プロジェクト」のどちらでも構いません、どなたでも自由にご発言をお願いしたいと思います。

■下條村長 金田憲治 氏

新ビジョンで、現行ビジョンと違うのは、地域おこし協力隊のネットワークではないでしょうか。ご報告のあった婚活も地域おこし協力隊の方を中心に市町村の連携ができたということです。今までは行政の連携が主でしたが、そうではない新たなネットワークの一つではないかと思っています。

下條村も昨年度から地域おこし協力隊を採用し、現在2名の方が、それぞれ目的意識を持ってやっていただいて、新たな動きが出てくるかなと期待しています。

■コーディネーター

ありがとうございました。それでは、地域おこし協力隊の川道さんに、そのネットワークについてどう考えるか、お話いただけますか。

■龍山秘密村（浜松山里いきいき応援隊）

村長 川道光司 氏

地域おこし協力隊のネットワークについて、僕は必要ないと思っています。というのは、地域おこし協力隊の会合や研修が結構あるのですが、杓子定規の会議であって、参加しても、ほとんど得るものがなかったからです。自分が必要な情報や人には自分で接触できますし、無理やりそういう場を設ける必要性はあまり感じませんでした。

ただ、今回参加して思ったことは、たまたま自分に必要な人材が見つかる場合もあります。なので、単純に地域おこし協力隊というくくりでくくってしまうのではなく、それぞれのやりたいことや興味、目的でカテゴライズして、それが合った人たち同士が集まるネットワークであればとても有効だと思います。

■コーディネーター

非常に明確なお話をいただきました。必ずしも、地域おこし協力隊というくくりである必要はなく、同じ目的を持つ者同士で集まる方が効果があるのではないかと、というお話でした。これについて金田村長、どうでしょうか。

■下條村長 金田憲治 氏

私どもも、地域おこし協力隊を採用する際には、移住・定住と婚活というテーマをもうけました。今年度は6次産業をやっていただけの方を募集させていただいています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

他に発言しておきたいという方はいらっしゃいますか。

■てほへ 副理事 大脇 聡 氏

今のお話の延長ですが、移住しても、Iターン者から村人になるためには相当時間がかかります。我々も20年前に東栄町に来た時、なかなか地域の方はなじんでくれませんでした。地域で活動していても、周りに関わりにくい、なじんでいきたくてもなじめない、というところもあると思います。僕たちは長年住んで、メンバーが結婚したり、子供ができたり、志多らの肩書のないいろいろな場面で住民お付き合いすることで、村人になっていきました。地域おこし協力隊の制度が始まって、地域に根づいて活動していきものが、まだ村人になるまでは時間がかかります。その人の努力や周りの支えもありますが、そこに至るまでには、地域おこし協力隊という枠を超えた連携のほう的大事ではないかと思っています。三遠南信住民セッションでも、皆さん同じような意見でした。

■コーディネーター

ありがとうございました。今の件についてご意見のある方いらっしゃいますか。

■売木村 清水秀樹 氏

地域おこし協力隊もそうですが、Iターンをしてきた皆さんが地域に定住できるのは、本当に真剣になって移住者をサポートしてくれる人材が、その集落にいて随分違うと思っております。私の村には、いろいろな悩みを一緒になって聞いてくれたり、いろいろなところに連れ出してくれたり、サポートしてくれる人材がいて、随分助かるなど常々思っています。

■駒ヶ根市長 杉本幸治 氏

私たちの地域でも、移住してきた皆さんが、よりどころとなるところがないと、不満がたまってしまって、地域から孤立してしまうことがあります。移住者が増えてきて、みんなが集まる場所をつくってもらいたい、またその場にはこういう人も呼んでもらいたいという要望があり、丸いテーブルを囲んで意見交換をするような会をどんどんやらせていただきました。

それから、何かがあればこの家に来てください、という場所をつくりました。住人の皆さんとの確執は、お互いに不満がたまり、その不満の言葉がいろいろなところに発信されて、地域のイメージも悪くなりますので、いろいろな相談ができる場所があると効果的です。

それから、全ての地区ごとに市の職員を配置しています。担当の地区の移住・定住に関する相談の方が市役所の窓口に来たときには、最初にその職員と話をします。その地域について、例えばごみはこう出さなければいけない、こういう仕組みがあって、何かあったときは相談に来てください、という話をして、行政もあなたのことを大事にしていますよという姿勢をとっています。

この体制を組んでから3年ぐらいになりますが、いろいろな相談を聞く中で、行政も橋渡し役として成長し、少しずつですが、みんなが溶け込んできているのかなと感じます。

■コーディネーター

ありがとうございました。移住者へのソフト面でのサポートのお話をいただきました。

さて、先ほど泰阜村の横前村長から、泰阜村はある意味で、東京から遠いところなのでゆっくりせざるを得ない、というご発言をいただきました。今後道路やリニア中央新幹線が通り、ハード面で便利な場所になって、泰阜村のゆっくりせざるを得ないという環境が変わっていく中で、それでも都会から人を引きつけるためにどうやって差別化やアピールをしていくか、ということのビジョンについてお話をお伺いしたいと思います。

■泰阜村長 横前 明 氏

三遠南信自動車道の千代インターインターチェンジができると、そこから10分ぐらいで泰阜村に入ることができます。また、飯田市にできるリニア中央新幹線の長野県駅からは、30分ぐらいで泰阜村に入ってくられると思います。それでも泰阜村は一貫して都会を追随しない村づくりをうたっていて、信号機ありませんし、コンビニありません。こうした不自由なことが差別化だと思っています。先ほど話題にも上がりましたが、1週間のうち5日間一所懸命働いて、リニア中央新幹線を使い東京から飯田まで40分、そこから30分で、この田舎に来ることが出来ます。過去に戻ったような景色が見えて、心が安らぐ、そういった村づくりが必要ではないかと思っています。

■コーディネーター

ありがとうございました。

それではもうお一人、飯田市の牧野市長にぜひお伺いしたいと思います。先ほど、飯田市の地域人教育の取組をご紹介いただき、また、それが全国展開の方向に進んでいるとのことでした。そこで、飯田市が行っているのは、飯田市に残りたいという地域人教育なのか、飯田市を超えて三遠南信地域まで意識した地域人教育は展開し得るものなのか、ご見解をいただければと思います。

■飯田市長 牧野光朗

これまでの地域人教育のメインは大学生でした。飯田市以外の地域でも大学生を受け入れて、フィールドスタディをやっているところはあると思います。大学生からすると、初めて出会った地域のことを学び、その地域を学ぶということはどういうことか、ということを経験していきます。三遠南信地域は、伝統芸能の宝庫と言われますし、特徴的な地域づくり、産業づくり、人づくりもされています。それを学ぶことによって、地域づくりにおいて自らができることは何なのかを考えられるようになりますし、我々もそういった人材を求めています。

しかし、それが自分の地元であるのか、三遠南信地域であるのか、もっと別の地域であるのかということは、本人の考え方次第であり、自らが地域のことに興味を持って地域に貢献する人材になっていくという当事者意識を持つことができるかどうかということが重要だと私は思っています。

飯田で地域人教育を受けた高校生が、三遠南信地域のほかの自治体で地域づくりを担うことは十分可能だと思いますし、それを三遠南信地域全体でやっていけば、この地域の将来は開けてくると私は思っています。

最後に申し上げたいのは、私はここで大学の役割が問われると思っております。地域人教育を受けた高校生は、実は大学に行きたがりません。大学でこれ以上地域のことを学ぶ機会が持てるかどうか、ということに対して疑問に持っている子が多く、すぐに地域の中に出ていきたがるのです。そこで私は、生まれ育った地域のことだけではなく、地域の外のことも知り、比較する中でより自分たちの地域のことを知り、ネットワークを広げることも大事だと話しています。そういった点からも、高大連携の地域人教育をどう進めていくか、ということをつ三遠南信地域で考えていくことができれば、素晴らしいと思っています。

■コーディネーター

私も子供たちへの投資は非常に大事だと思って質問をさせていただきました。牧野市長のお話しに答える義務があるだろうと思いますので、少ししゃべらせていただきます。

今、大学は随分変わってきています。豊橋技術科学大学などの国立の理系の大学は基礎研究が多いので分野にもよりますが、その地域にある、という条件を研究に活かす発想はなかなか出てきにくいところもあると思います。静岡文化芸術大学は浜松市にある公立の大学で、当然、地域とどう関わるかというのは重要な課題になってまいります。私の場合は多文化共生分野における、言わずと知れたブラジル人が最も多い浜松での関わりということになってきます。

先ほどの牧野市長のご指摘に対して、私は必ずしも悲観的ではないのは、学生たちが喜んで地域の学びをしているからです。例えば、本学には船戸という教員がいて、彼は毎週土日になると公用車で浜松の北の北遠地域に赴きます。そこでは、学生がひいこら言いながら、一所懸命田植えをしたり、村のお祭りに参加したり、地域の中か

ら学びを得ています。このことのみならず、学生たちは、大学で学ぶ他地域の事例や理論を、自分たちの関わっている地域と照らし合わせることで、いわば鏡で自分の姿を映すように学びを深めていきます。ですから、三遠南信の地域人としての教育、育成、あるいは気づきの機会の提供といったものに対して、今後地域の大学が連携して取り組んでいくことは、2030年に向けての重要なステップであると、私も考えております。

ここまで「住むなら三遠南信プロジェクト」、それから「人生100年時代プロジェクト」という2つのテーマについて、皆さんで議論してまいりました。多方面からの非常に貴重なご意見をいただいたことに感謝申し上げます。これ以外にもさまざまなご意見があろうかと思いますが、ここで区切りとさせていただきます。

なお、この後の報告会では、皆様からいただいたご意見について、私から報告をさせていただきます。たくさん意見が出ましたので、全てを紹介することは難しいですが、主な意見を整理し、ご報告させていただきます。報告の内容につきましては、私にご一任をいただきたいと思いますよろしくお願いします。

ありがとうございます。皆様のご協力によって円滑、かつ中身の濃い議論を行うことができました。改めて御礼申し上げます。以上をもちまして「住・人」分科会を閉会いたします。

■「道」分科会コーディネーター
愛知大学 教授 戸田敏行 氏



「道」分科会では、はじめに浜松河川国道事務所の田中所長から、未来につなぐ三遠南信自動車道ということで、三遠南信自動車道の進捗についてご報告をいただきました。今年度は、(仮称)佐久間インターチェンジから(仮称)東栄インターチェンジまで、来年度は天龍峡インターチェンジから龍江のインターチェンジまでが開通予定ということで、着実に進んでおり、現在約5割が完成したということでした。新ビジョンの期間は2030年までですから、そのときまでの完成を目指すべく、参加者一同努力するということでした。

次に、南信州新聞の河原様から、「三遠南信 Biz」の発刊に向けて、ということで、ご報告いただきました。ローカルビジネスなど、人を軸にして三遠南信をつないでいくことを目指しておられるということでした。県境で情報が途切れるという大きな問題に対する一つの試みであります。

「道」分科会では、新ビジョンの重点プロジェクト1と2の意見交換を行いました。

重点プロジェクト1は、「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」です。道路は道路相互がつながることで効果が出るのですが、県境を越えると、なかなかこの道路間のつながりを考える場がないというこ

とで、こうした情報交換は新ビジョンの存在意義といってもいいぐらいに重要なものです。このネットワークから、生産性の向上や生活の質の向上というストック効果、新たな産業をつくるというフローの効果を生み出すというものです。

重点プロジェクト2は、「三遠南信圏民の一体感醸成プロジェクト」です。これは道路がつながった線を面にしていく、ソフトの動きが必要だというものです。

まず、「三遠南信交通ネットワーク形成プロジェクト」については、命の道ということで、非常に切実な意見が多くございましたが、整理すると空間的に大きく三つのポイントがありました。

1点目は南北軸です。三遠南信地域は、北に大きく広がり、三遠南信自動車から中央自動車道、長野自動車道、上信越自動車道につながり、日本海に至ります。一方南側は、三遠南信自動車道から、浜松三ヶ日・豊橋道路(仮称)、そして渥美半島につながり、日本列島の南北に長い横断軸が形成されます。それに伴い、これまで結ばれなかった産業が結ばれ、三河港の物流や日本海との関連性も意識すべきだというご指摘がありました。また、文化、伝統芸能のつながり、リニア中央新幹線と交差すると航空宇宙産業のつながり、こういう見方が出てくるということでした。

2点目は、中山間部を活かす道路、特に国道151号です。三遠南信自動車道とともに、国道151号がどうつながるかで、県境山間部の通学圏が変わり、つまりは暮らしも変わってくるというお話がありました。リニア中央新幹線が開業すると、県境付近の地域は、東京に出るために北に行くか、南に行くか、丁度ボーダーラインになります。そういう意味で、三遠南信自動車道と国道151

のダブルリンクとリニア中央新幹線の駅とのネットワークをどう結んでいくかは、中山間地域にとっては重要だということです。

3点目は、太平洋側都市部のお話です。三遠南信自動車道と浜松三ヶ日・豊橋道路（仮称）の南北軸、東名・新東名高速道路の東西軸がちょうど循環になり、そこに港の機能が加わり、新ビジョンでは、浜松・豊橋環状道路とされています。先日の台風24号の際、特に静岡県は停電が随分あって、信号が止まって通勤できないということもあったようですが、こうした災害には北上して迂回できるという、いわゆるリダンダンシーになるということでした。

次に「三遠南信圏民の一体醸成プロジェクト」についてです。1点目、喬木村では、ICTで熊本県、オーストラリアと既につながっているということでした。また、ケーブルテレビのコンテンツの共有など、圏域内外で既にある除法基盤をつなぐという意見が出ました。

2点目は道の駅で、三遠南信地域には27か所あります。それぞれの高低差が1,000mぐらいあり、売っているものが違うので、これをきちんとネットワークすることが必要、ということでした。また、東北の事例が紹介され、道の駅をつないで周遊をつくってはどうかという意見もありました。新城市での高速道路退出実験は1時間でしたが、退出時間を2時間に延ばすと随分行動範囲が広がり、地域を回ってくれるのでは、ということもあります。

3点目は、サイクルツーリズムで、浜名湖を回るハマイチの例ができました。また、これを日本海までの南北方向に伸ばして、さらに大きな大会にできるということでありました。

以上で「道」分科会の報告を終わらせていただきます。

■「技」分科会コーディネーター

豊橋技術科学大学 副学長 大貝 彰 氏



「技」分科会では、新ビジョンの基本方針で示されております、「革新を取り込む産業創造圏の形成に向けて」、というテーマで議論を行いました。まず、意見交換の前に、事例紹介ということでご報告がありました。

一つは、豊橋市産業部の稲田部長から、農産物の販路拡大事業、浜松市、豊橋市、田原市、飯田市が連携して、農産物の海外輸出事業を展開しており、広域連携で取り組むことのメリットについてのお話をいただきました。もう一つの事例紹介は、新城軽トラ市のんほいロットについて、実行委員会の加藤様よりご報告をいただきました。

二つのご報告を受け、意見交換を行いました。ポイントとしては、重点プロジェクト3「地域の稼ぐ力強化プロジェクト」のうち、一つは既存の産業の活力をいかに推進して稼ぐ力をつけていくか、もう一つは、新しい産業をいかにこの地域に取り込んで稼ぐ力をつけていくか、という二つの視点で意見交換を行いました。個々の発言について1つ1つ紹介するには時間がないので、ポイントをまとめてご説明させていただきます。

既存産業の活力をつける、という議題において、重要になるのは何かということで、まずは人材を育てる、確保するということが重要なのだというご意見が、伊那商工会議所の川上様、田原市商工会の河合様などからありました。また、三遠南信地域全体

の道路整備、基盤整備も重要になる、ということについては多くの方から意見がありました。

そして、三遠南信地域全体の一番南の河口から、一番北の山のほうまで標高差は1,000mぐらいあり、気候や温度が全然違ってくるということで、消費者目線で見たときに、それを活かした多様な農産物売り込んでいくことが重要だということでした。また一方で、生産者の立場から見た、農産物の輸出戦略についても考えていく必要があるというご指摘もありました。さらに、第1次産業、第2次産業、第3次産業、特に農業と観光をうまくリンクさせることで、既存産業の活力を高めていってはどうか、という意見がありました。

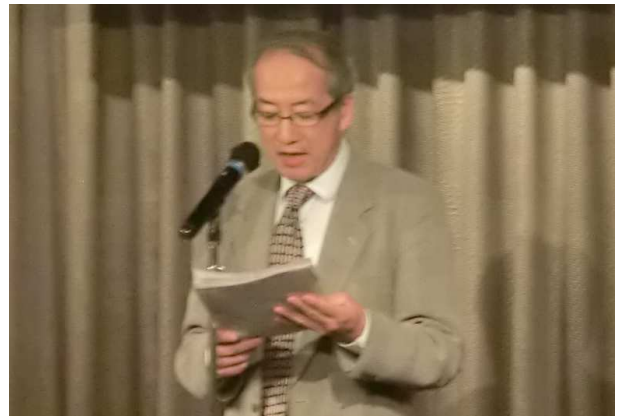
後半部分では、新産業をこの地域へどう取り込むか、ということでお話をいただきました。

1つは、三遠南信地域の豊富な森林資源を、なんとか活かさないか、木材の海外輸出などがうまくできないだろうか、というご発言が根羽村の大久保様、伊那市の白鳥様からありました。そのためには、道路整備も必要ですし、港と森林組合、あるいは複数の森林組合が連携することで、可能性が生まれてくるのではないかとということでした。また、そういった新たな取組を生み出していくためには、やはり連携のプラットフォームづくりといったものも重要になるのではないかとことでありました。

最後に、これはアドバイザーの萩本様からご指摘をいただきましたが、新たな産業を育てていくためには、長期的な視点をもって、人を育てる、産業を育てるということが重要であって、それをこの地域全体で取り組んでいく必要があるのではないかとご意見をいただきました。

以上で、「技」分科会の報告とさせていただきます。

■「風土」分科会コーディネーター 法政大学 教授 高柳俊男 氏



「風土」分科会では新ビジョンの基本方針、「流域文化創造圏の形成」をテーマに議論いたしました。

まず、関連報告として、2名の方にご報告をしていただきました。まず、JR 東海飯田支店の大坂勝典様から、飯田線の、とくに秘境駅を活用した取組についてお話いただきました。次に、南信州広域連合事務局の松江良文様から、民俗芸能をどう保存し、若い世代にどう伝えていくのか、あるいは企業にどうそれを支援してもらうのか、といった取組についてご説明をいただきました。

その後、重点プロジェクト4「三遠南信探訪プロジェクト」及び、重点プロジェクト5「中山間地域が輝くプロジェクト」について意見交換を行いました。ご意見の内容は多岐にわたりましたので、全部は紹介できませんのですが、いくつか印象に残っているものをご紹介します。

「三遠南信探訪プロジェクト」では、この地域にはいろいろ有用な素材があり、それをどう活用していくかということで、皆様から取組のご紹介をいただきました。例えば全国的に星で有名になった阿智村では観光的な施策を一貫して行う DMO があり、果物の町松川町では設立を目指している最中で、袋井商工会議所からは三遠南信の花火サミットを始めた、というお話がありました。また設楽町では、これからつくる新

しい道の駅に、今ある民俗資料館を移動させ、もっと魅力あるものにする、というお話がありました。

それらを踏まえて大事なことで、あれもある、これもある、ではなくて、これが本物だ、という核となるものを中心に観光PRをしていかななくてはいけない、というお話が豊橋商工会議所の神野様からありました。また、個々の市町村で互いに競走して敵対関係になるのではなく、むしろ点を線にして面にしていくようなネットワーク化によって、観光客の誘致、誘客を共同で進めていくことの重要性が語られました。

次に「中山間地域が輝くプロジェクト」では、この地域は広大な中山間地域を抱えており、取り組むべき重要なテーマです。例えば、浜松市や新城市商工会から、中山間地域を活性化するための、地域おこし協力隊の取組についてご報告がありました。3年間の任期が終わったあと、地域に残る人が多い自治体もあれば、あまり残らない自治体もあるようです。これについては、午前中の住民セッションでも集中的に議論されたという報告もありました。

また、県境付近では、1970年代から、愛知・長野県境域開発協議会をつくって現在に至っているとして紹介がありました。それから「技」分科会でもあった、昨日で103回を数えた新城市の軽トラ市についても報告がありました。

それらを踏まえて、地域おこし協力隊は共通の目的を持って活動しているので、連携を図ることが大事であり、協力隊のOB・OGが新しくネットワークを立ち上げたという話も出ました。それからこの地域の資源として、やはり飯田線があることは大事だろうという指摘もされました。今から線路をつくることはなかなかできないことであって、バス路線等も含め、これらをきちんと残して活用していくことは重要な課題と言えましょう。

以上で、「風土」分科会の報告とさせていただきます。

■「住・人」分科会コーディネーター

静岡文化芸術大学 副学長 池上重弘 氏



「住・人」分科会では新ビジョンの基本方針、「安全安心な広域生活圏の形成」と「地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成」をテーマに議論いたしました。特筆すべきことは、ギャラリーの中に女性がとても多かったということです。そこに希望を見出しました。

討論に先立って、LLP マリッジ・ローカル・コネクト代表の木村様から、連携した婚活事業について、また NPO 未来化プロジェクトの川端様から、若者の人材育成についてということで、浜名湖若者1000人会議プロジェクトについてご報告をいただきました。

そして意見交換では、7つの重点プロジェクトのうち、重点プロジェクト6「住むなら三遠南信プロジェクト」、そして7「人生100年時代プロジェクト」の2つを取り上げました。

まず、「住むなら三遠南信プロジェクト」についてですが、大きく4つの論点がありました。

1つ目は少子化、人口減少といった状況に対して、どんな対策を展開しているかということでした。例えば、若者の定住住宅を用意するなどの住宅支援、医療費の無償化、教育環境の整備などの子育て支援など、行

政としての取組ですが、非常に多様なものが紹介されました。

2つ目は、交流が定住につながるという考えのもとに、まずは交流を促進しようという具体的な取り組みがいくつか紹介されました。例えば、うるぎ米そだて隊というプロジェクトでは、村を知ってもらうために、年に数回村に来てもらい一緒に米づくりをして村を知ってもらい、その交流を通じて村への愛着を持ってもらう、というものでした。また、長距離ランナーの合宿を誘致する走る村プロジェクトでは、ランナーがすぐに転入するわけではないのですけれども、足しげく通ってもらう試み、ということでご報告をいただきました。

3つ目は移住者のことであります。最近ではリタイア組のみならず、自然の中でのびのび子育てをしたい、というようなファミリー層の移住者が増えているとのことでした。東京から遠くて不便なこと、ゆっくりせざるをえないことが強みだ、というポジティブなご意見もありました。また、移住先には自分の生き様を体現できる場としての意味を求めるというお話もありました。

しかしながら、自然環境だけではなく、実は住んでいる人が大事で、人が人を呼ぶのだ、というご指摘もありました。そのためには、移住者をサポートする地域の人材が大切であるとか、孤立させないようにして言いたいことを言える環境をしっかりと準備することが大事であるとか、生活基盤や事業基盤に対する優遇補助制度など、自立の支援が人の定着につながり、そうして定着した人がまた新たな人を呼ぶということも非常に重要なポイントでした。

4点目は、地域がダイレクトに人を呼ぶというだけではなくて、企業や団体との連携によって人を呼ぶというアイデアでありました。例えば、企業版のダーチャの紹介がありました。ダーチャとは、旧ソ連で生まれた郊外型の菜園付きセカンドハウスのよ

うなものです。こうしたダーチャをつくることで、メンタルヘルスケアとして企業の人たちがやってくる、というお話がありました。また、JICA や JOCA と連携して、地域外の学生を呼び込む、グローバルな人材育成のグローバルユースキャンプというお話や、逆参勤交代、つまり東京や江戸に行くのではなくて、東京や名古屋の企業の社員にこの地域に来てもらい、社員がリフレッシュして戻っていくというような発想もおもしろいのではないかとのご提案をいただきました。

次に、重点プロジェクト7「人生100年時代プロジェクト」についてです。人生100年時代という、どうしても、ミドル以上の人がどう地域と関わるか、と考えがちなのですが、ここでは、地域教育の促進、人材の育成、定着化という柱が立っており、子供たちとどう関わるか、若者たちにどう投資するか、という非常に未来志向な話が展開しました。

例えば、各自治体や企業が得意とする分野で、学びや体験の機会を提供しあって、地域内の人材育成や定着につなげるプロジェクトが紹介されました。また、都市部の大学生との交流によって地域の魅力を発見し、自身の未来の夢を描けるような教育環境づくりをとともに目指すということもお話がありました。また飯田市では、市長自ら先頭に立って、卒業すると外に出てしまう高校生までの間に、地域を理解してもらい愛着を持ってもらう、という地域人教育を展開していて、その教育を受けた子は、むしろ大学に行かないというような話も出てきました。

ここで、地域と言うのは、個別の場所を指すのではなく、例えばある地域を学んだとしても、それが他の地域での学びにもつながる、あるいはより広い地域での学びにもつながっていく、ということで、自分の住んでいるまちを理解するという視点が、

ひいては三遠南信地域への愛着につながっていくのではないかとご指摘でした。またさらに、高校と大学の連携も、今後はしっかりと進めてもらいたいとのことで、私ども公立の大学であれば受けて立たざるを得ない宿題も最後にいただきました。

以上をもちまして、「住・人」分科会の報告とさせていただきます。分科会にご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

第26回三遠南信サミット in 東三河では、「三遠南信流域都市圏の創生～日本の県境連携先進モデル～」をテーマとし、全体会から分科会を通じ議論を行いました。このサミットのテーマは新ビジョンのテーマでもあります。新ビジョンでは、三遠南信地域の住民がこの地域の持続的発展と自立のために、この地域を創生するという考えのもと、2027年のリニア中央新幹線の開業や、それと併せた三遠南信自動車道の概ねの完成が期待される中、「大都市圏・世界と結ばれる広域連携都市圏の形成」「中部圏での中核的な都市圏の形成」「流域循環圏の形成」の3つの地域像を目指してまいります。

本日は、サミットに先立ち、SENAの役員会であるSENA委員会に有識者を加えた拡大委員会において、以下の5つの基本方針についてご了承をいただきました。

- 「道」…… 地域内外の人・物・情報の交流を一層進めることで、中部圏の中核的都市圏となる地域基盤の形成を目指します。
- 「技」…… 地域内の産学官が連携し、既存産業の活力を増進させつつ、産業構造の転換を先取りすることで産業創造力を強化し、革新を取り込む産業創造圏の形成を目指します。
- 「風土」… 地域資源の新たな価値を見出し、保存・継承と活用・発信を行うことで、流域文化創造圏の形成を目指します。
- 「住」…… 地域全体の生活環境を向上させるとともにこの地域に適した居住スタイルを確立し、安全安心な広域生活圏の形成を目指します。
- 「人」…… 次世代を担う人材の育成や確保、多様な文化が共生する社会の形成を通じて、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成を目指します。

さらに、ビジョン達成のため選択と集中により掲げられた7つの重点プロジェクトについてご了承いただき、サミットの全体会、分科会を通じ更なる議論を深め、この新ビジョンの下、それぞれの主体において事業を進めていくことといたしました。今後は、パブリックコメントを実施するなど、地域住民への浸透を図ってまいります。

ビジョンの計画期間である2030年までの12年間、三遠南信地域は大きな転換期を迎えます。SENAの構成団体の皆様はもとより、本日ご参加の関係団体、関係者の皆様とともに、連携活動による新たな価値の創出に向けて全力で取り組んでまいります。

これらの成果をここに集うすべての主体が共有し、第26回三遠南信サミット2018 in 東三河のサミット宣言といたします。

SENA構成自治体においては、地域に共通する課題の解決に向けて積極的に連携事業に取り組み、広域連合設置を見据えた地域連携のプラットフォームづくりに邁進してまいります。

平成30年10月29日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット2018 in 東三河

■次回開催地代表挨拶

飯田市長 牧野光朗



第26回三遠南信サミット2018in 東三河が、佐原市長はじめ、豊橋市の皆さん、そして東三河地域の皆さんの大変なご尽力で、盛大に開催できましたこと、改めて敬意と感謝を申し上げます。

三遠南信地域はいよいよ、バージョン2.0という新たなステップに入ります。浜松市の鈴木市長を筆頭に、私ども副会長もともにバージョン2.0の目標に向けて力強く歩みを進めていきたいと考えています。

来年は、私ども南信州地域での三遠南信サミットの開催ということになります。広域連携のモデルを三遠南信地域からつくっていくということですが、南信州地域におきましては、広域連合を主体とした様々な地域連携プロジェクトが動いています。中でも、産業振興と人材育成の拠点として、リニア中央新幹線の長野県駅のすぐ近くに、旧飯田工業高校を利用した施設整備を進めています。萩本専務理事にも所属していただいている南信州・飯田産業センターも、来年1月にそちらへ全面移転し、グランドオープンとなります。今後、産業振興、人材育成にかかる地域連携の拠点として育て、この流れをぜひ三遠南信地域にも広げていきたいと思っています。

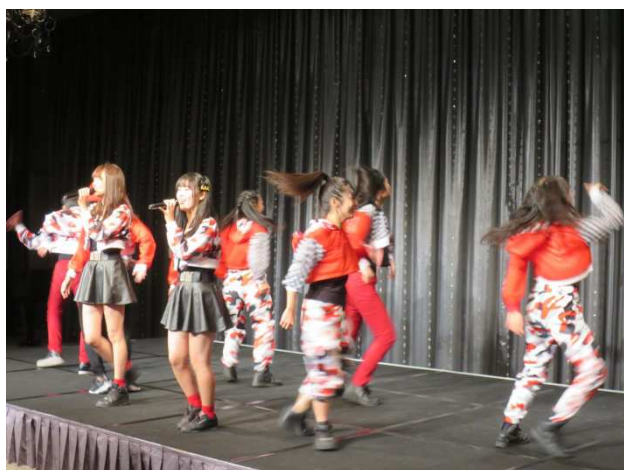
また、三遠南信自動車道の天龍峡大橋も、平成31年度中の完成を見込んでいる状況ですが、この天龍峡大橋は、自動車が走る桁

の下に自動車専用道にも関わらず遊歩道が通っている全国でも非常に珍しい橋になります。名勝天龍峡の新たな顔が見え、三遠南信地域の連携拠点の1つとしていければと思っています。

この三遠南信地域の連携は、新ビジョンで掲げているように、必ずや県境連携モデルとして全国から注目されるものだと思います。そのためには、サミット宣言で述べたように、1つ1つの事業を積み重ね、その連携がどのようなものであるかということ全国に示していくことが重要であると考えます。

今回の三遠南信サミット in 南信州におきましては、そうした連携の積み重ねを皆様方とともに確かめられるサミットを目指していきたいと考えております。有意義なサミットとなるよう皆様方にもよろしくお願い申し上げます。





■ 開会あいさつ

カネトをうたう合唱団 清水良文氏

今回のテーマは、「三遠南信地域おこし協力隊 0B・0G フォーラム—地域おこし協力隊のその後から学ぶ—」ということで、三遠南信地域の3圏域からそれぞれ1名ずつ、計3名の地域おこし協力隊の0B・0Gと現役隊員をお招きした。



住民セッションという場を設け、長らくこの集まりを続けてきた。こういう場が住民の交流の場となっており、この住民セッションは住民団体が中心となって企画を練り、またざっくばらんに話ができる集まりでもある。本日は、趣旨と地域おこし協力隊制度説明後、3名に発表していただく。その後、質疑応答で活発に意見を述べていただければと思う。

■ 開催および地域おこし協力隊制度について

愛知大学総合郷土研究所 平川雄一氏

(1) 開催趣旨

地域おこし協力隊は、2009年度から総務省が始めた制度で、2018年度でちょうど10年目を迎えた。これまでに三遠南信地域の各市町村でも地域おこし協力隊制度が導入され、一定の成果と実績が残されてきた。同時にまた、様々な課題も出てきており、同制度の実態や任期を終えた元隊員たちの動向は広く知られているわけではない。そこで今回の住民セッションでは、本テーマを取り上げ、現場で活躍している現役隊員や採用された地域で起業や就農などをして定住している元隊員の3名に、協力隊活動で得た経験や体験などの報告をお願いした。地域おこし協力隊の制度というものは一体どういうものなのか、それから



協力隊退任後についても語っていただき、その実態に参加されたみなさんに知っていただくのが狙いである。

(2) 地域おこし協力隊制度と

三遠南信地域おこし協力隊について

1) 地域おこし協力隊制度

地域おこし協力隊制度は、都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱される。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場製品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などを行うことになるが、これを「地域協力活動」と定義し、この地域協力活動を行いながらその地域への定住・定着を図る取組である。2017年度時点で隊員数は4,830人（特別交付税ベース）が活動している。

2) 三遠南信地域おこし協力隊の動向

本年度10月1日時点で、東三河地域は12名、遠州地域は10名、南信州地域は105名で合計127名となっている。歴代採用者を調べると性別は男性が58%、女性が42%、年齢は、20～40代が中心だが、50～60代の方もみられる。出身地や前住地は、首都圏からの移住者が多い。Uターン者もみられる。隊員着任前の職業は、多くの方が会社員で、IT関係、教育関係、個人事業主、行政職員もいた。任期は平均すると2～2年半程度となっている。業務内容は、市町村によって様々で、農林業、特産品開発・PR、6次産業化、観光振興、移住定住支援、スポーツ系、アウトドア、教育、婚活支援などである。協力隊退任後の定住者は農林業へ就農、カフェやシェアハウスを経営するために起業などしている。

■ 地域おこし協力隊事例報告

自身の経験と「茶種子」を活かした事業化 元設楽町地域おこし協力隊 杉浦 篤 氏

はじめに

私は愛知県知多市の出身で、県外の大学を出て、大学院等で県内に戻ってきた。愛知県の岡崎市にあります基礎生物学研究所というところで植物の基礎研究を行っていた。



6 年前に化学物質過敏症という病気を急に発症してしまった。この化学物質過敏症は、個人差はかなり大きく、まだまだ医学的にも未解明な部分が多い病気である。町の中にいると、どんどん悪化していき、重症時には体が痛くて起きあがることもできない、でも痛いから寝ることもできないというようなほとんど寝たきりの状態が 5 年ほど前にはあった。設楽町地域おこし協力隊を今年 3 月まで 3 年間行い、その後 4 月から個人事業として山の搾油所という名前で事業をスタートした。協力隊活動、またそこから現在の事業に至るまでを報告したいと思う。「山の搾油所」では、みなさんが普通に飲まれるお茶の種子から搾った油をスキンケアオイルとして販売するというをしている。こういった事業を私の地域おこし協力隊であるとかそれ以前の職歴などを活かした形で実現させた。

山間地域での療養と体調の回復

治療法もないという中で、いわゆる空気のきれいなところへ移る、転地療養することで改善したという例があると聞いた。いままでの仕事や生活は全部一旦諦め、豊田市の山間部で療養することにした。

その山の中で 1 年半ほど、仕事もできず療養に集中していた。自然の中だったら段々動けるようになる、町に戻ることはできないけれども、空気のきれいなところだ

ったらまた社会復帰できるんじゃないかなと考えるようになった。そうしたところ、設楽町で自然や原生林の魅力を発信したり、それらを何か新しく活用ができないか考える、地域おこし協力隊の募集中であることを聞いた。そこで、社会復帰の第一歩くらいの思いで、協力隊になりたいと申請を出しまして採用されたというのが 2015 年の 4 月である。そこから地域おこし協力隊として 3 年間勤めた。そうしている間にどんどん体調がよくなっていった。これは町には戻らずに、そこでなんとか仕事を作り定住したいと任期中に考えるようになり、2018 年 4 月から協力隊の時から住まわせてもらっている地区にそのまま定住して起業した。

地域おこし協力隊活動と事業化への模索

協力隊をやっていた時の活動内容は、観光振興とか教育に近いような活動なのかなと思う。農業体験のようなことも企画していた。やりがいや意義はあるのですが、このままやり続けていても、収益を上げてその事業を継続するのは難しいと感じ、私自身が定住するための事業としてこれは無理ではないかと 1 年目から感じた。ただその意義はやはり大きなものなので、協力隊活動 3 年間を通じて続けていましたし、協力隊任期後の現在も出前事業、イベント企画補助、ツアーガイド、自然保護など、いろいろやらせてもらった。そういったことで 1 年目から、今の環境で自分の体調もよくなってきたので、なんとか住み続けたいけれど仕事になるものはないだろうかという目でみていたところ、衝撃的なものに出会った。

茶種子との出会い

お茶の花や実を、実は私自身協力隊になって 1 年目に初めて見た。植物を扱っていた身として恥ずかしいが、お茶はツバキ科の植物で、ツバキの花に似たお茶の花を見て、ツバキ油みたいなものがお茶からも採

れるんじゃないかなと漠然と思ったというのが一番最初のきっかけである。そんな思い付きからいろいろ調べ、これは事業にできるんじゃないかと思い、協力隊活動2年目から、それまでの活動と並行しながら事業化を検討し、起業の準備を始めていった。

私が住んでいた設楽町田峯は、無農薬でお茶栽培が行われているところであった。いろいろな理由から、お茶畑を続けていくのが難しく、放棄茶畑が増加している状況がみられた。お茶の種は誰も何も使っていない資源で、ただただ畑に落ちているものでした。これらの茶種子を使って田峯地区に搾油所を設け、地域おこし協力隊として事業を立ち上げることにした。

茶種子の分析と起業への準備

まずお茶油が本当にすばらしいものであるかを研究所や分析会社の協力で分析してもらった。その結果、お肌を調えるのにすごくいい油だということがわかった。

この事業を進めるには地域の方々の協力が不可欠で、偶然にもご近所さんが田峯のお茶組合の組合長で、事業の相談をしたところ、やってみろとすぐに言ってくれたし、地区の中に物置になっている建物があり、ここを油を搾る作業場として使わせてもらったりして、地域の応援がとても大きかった。

また、協力隊活動ということで、いろいろな専門家に会いに行き、事業計画を立てたり、詰めたりしていたし、私自身が科学系にいたということで化粧品の取り扱いの免許も取れた。この許可はとても難しく、個人ではなかなかできないことであったが、そういった強みも生かした。

資金面では、協力隊の活動費で専門家に相談できたし、協力隊が起業するという時に国の補助も受けられるし、設楽町で起業の補助金や貸付・給付金制度がいくつかあったので、そういったものも有効に活用さ

せてもらい、無理なく事業をスタートできた。

地域や関係各所とのつながり

協力隊だったことで、行政や信金、県など、いろいろなところとつながりができおり、それを活かしながらサポートを受けたり、コラボをさせてもらった。県の事業での起業支援などの事業に加わらせてもらったり、ツアーなども開催した。

また隣町の東栄町が naori という手づくりコスメの事業を行っている。原材料のコラボとか地元産のものを使いたいとっていただき、リップクリームやネイルオイルの原料に使われている。

自分が住んでいる設楽町田峯では伝統芸能が非常に盛んで、お盆には太鼓をたたいたり、住民が地歌舞伎を演じる地区である。こういったことに最初のときから混ぜていただいて地域で受け入れてもらっている。楽しめて、すごくいい経験をさせてもらっている。その恩返しが少しでもできたらなと思っている。

まとめ

いまはお茶の油だけの紹介であったが、ほかにもいろいろな植物の油があり、日本の山里でまだ活用されていない資源を商品化していく計画である。その油の材料をきちんと地域で集めてそれを買取るという形で、元々の畑の所有者の方や地域に経済還元し、お茶畑に手を入れることで獣害対策や里山の環境保全につながっていけるような事業にしていく。

■地域おこし協力隊としてのキャンプ場の立て直しと地元とのつながり

現浜松山里いきいき応援隊 川道光司 氏

はじめに

私は、出身は千葉縣市原市で、前職は自然学校で環境教育や自然体験、アウトドアのガイドをやりながら富士宮市に住んでいた。自然学校に勤務している際に、ガイドや環境教育のほか、大工仕事や農業、狩猟もやり、そういう技術が自分に身についたことで、自分の暮らしを始めようと、浜松山里いきいき応援隊に採用され、2016年4月から浜松市天竜区龍山町に来了。まだ任期中で2019年3月まで残っている。



龍山について

龍山町は、町まで車で30分かかるところだが、天竜区でも比較的浜松の市街地まで近い位置である。人口は619人、平均年齢は67.7歳で、典型的な過疎地域である。平成17年まで龍山村で、静岡県で最後まで村を貫き通した地域である。天竜川が中央を流れていて急峻な斜面がそれを取り囲んでいる。斜面にへばりつくようにして人が住んでいる感じである。平らなところがないので、田園風景はもちろんない。学校も数年前にすべてなくなってしまった。ぱっとみて目立つような観光資源はない。だけど私自身は本当にそれがいいなあと考えてここに住むことを決めた。どこにでもありそうな村だと私自身は思っている。

浜松山里いきいき応援隊の採用とキャンプ場の再開

実は、私は地域おこし協力隊になってキャンプ場を再生させるために龍山町にきたわけではない。純粋に自分でキャンプ場を運営することが夢であった。それがたまた

まキャンプ場が空いたということでやってきた。目的を持ってきたら、浜松版の地域おこし協力隊、浜松山里いきいき応援隊に採用されたというわけである。就任後すぐに龍山秘密村村長となり、キャンプ場を4月に開村することが決まって準備が忙しかった。

ここは以前、龍山青少年旅行村であった。40年前にできた野外教育施設で、林間学校やボーイスカウトを受け入れるキャンプ場であった。ずっと村の補助金で運営されていたが、平成17年に浜松市に合併されてからは補助金が減らされ、管理人が予算的に運営できないということで2014年いっぱい辞められて、閉村してしまった。私が2016年来ましたので約1年間休業中であった。

キャンプ場の運営と企画づくり

さきほどどこにでもありそうな村といったが、「どこにでもありそうな村のどこにでもありそうなキャンプ場」で、これがとても重要なところだと思っている。これといって特別なことをやっているわけではないが、まだ実質2年目で、グランドオープンしたのは2017年であるので、ようやく1年半終えたくらいである。

この施設は、自前でテントを張ったり、コテージに泊まるなど、最低限の荷物を持ってきてバーベキューし、泊まることができる宿泊業務がある。カフェも用意し、もうひとりの女性スタッフが地元の食材を使ってサンドイッチを作ったりして販売している。キャンプ場では、夜はバーをやっていて、常連客の夫婦と会話をして楽しんでいる。

これ以外にイベントやプログラムを実施している。例えばアウトドア婚活、音楽系のイベント、50メートルの流しソーメン、結婚パーティーです。貸切では地元のおばちゃんたちに食材を提供してもらったり、

音楽好きの村外の夫婦を招いて、一日中演奏するなどのイベントをしている。

最初の3年はとにかく親子をターゲットにし、有料プログラムで山の中で園児と自由に遊ぶだけの森のようちえんを開いてみると、親子がよく遊びに来た。ここに参加してくれた子どもが小学生になると、もっと長く滞在するために宿泊の申し込みで埋まるようになった。アウトドアとしては、マウンテンバイクや洞窟探検、山登りやクライミングなどのツアーをやった。すべてのイベントやプログラムには地域性をできるだけ盛り込むようにしているので、食、狩猟、木こりの文化、一緒にニワトリを屠畜し食べる体験を企画し、子どもや大人たちにもいい影響を与えられるような田舎ならではの環境教育や暮らしの講座を実施している。運営体制は、地元のNPO法人と龍山協働センターで、NPOの人たちがバックアップし、それを協働センターの職員がまとめて書類を作って、補助金を獲得してくるというような連携体制ができており、物事の進み方がとても早い。

私がこのキャンプ場を始めるにあたって、地域おこし協力隊になるつもりはなかったといったが、どうにかして食っていこうという覚悟でやって来た。3年もあればいいだろうと思い、おかげさまで地域おこし協力隊の報酬をいただいていることもあって、2年目にその目標が大幅に達成できた。いまは2人体制で、1年間フルで一定の給料を出しても余るくらいの収益を上げることができている。ここがすべてかなと思う。

成果と今後の課題

私の目標は3年目までに地元で根付くということであったので、それ以降はアウトドアを楽しむ大人の方や外国人の方も来ることを想定していたが、営業期間にたくさんの日帰り・宿泊客の方が来て、実施するプログラムが毎回満員になるほどとなった。

龍山町には若い人がほとんどいない。この地域を本当に助けるためには、人が根付いて、延いては定住者が増え、さらに賑わいを取り戻すことができれば地域の方たちは喜んでくれると思っている。収益性ばかりを求めてしまうと、地域性や社会性の意義が薄れてしまう。地域に還元しながら、小さい子どもたちに意義あることをしながら収益も確保して、そこで自立して生きていくことが大切だと思う。これからいろいろと事業を拡大していこうと思っているが、その時は当然人材が必要になってきているので、そこをどう確保するのが課題である。

まとめ—私の目標—

龍山秘密村という活動の拠点ができたので、今後は収益性と社会性のバランスを考えながら地域に還元できる私のやりたい事業を進めていこうと思っている。

私は地域に入るためにはそれなりの覚悟が必要だと思いっているし、それを地域の方にしっかりと示さないといけないと思っている。目標や目的などを打ち立ててしまうとかなりリスクを負うことになるが、私の実体験では、そういったリスクに対して、地域や行政の方たちが支援をしてくださると思っていたので、私は目的を持って地域に入ってきた。地域に来て自分の目標が見つかったらしっかりと意思を示さなければそれなりの支援を受ける資格がないのではないかと思っている。それをしっかりと出して目標を示すことができれば地域にとっても大きな力になると思っている。

「どこにでもある村、どこにでもあるキャンプ場、どこにでもいるおじさん」ということで、これからも特別な場所にしていきたいと思っている。

■ 獣の有効活用したけもかわ project の 立ち上げと村づくりを目指して 元泰阜村地域おこし協力隊 井野春香 氏

はじめに

私は熊本県出身で、元々小さい頃から動物が好きで、農業高校の畜産科学科へ進んだ。たまたまこの高校には野生動物部門があって、そこでシカを育てたことがきっかけでシカが大好きになった。シカに興味を持ったことで、そこからシカに関わることをやろうと思い、森林を勉強することを考えた。そのときにたまたま島根大学のシカと森林に研究が最初に目にとまり、ここへ進学した。大学に入ってから出雲大社あたりのシカによる被害の研究を少しした。また有害駆除されたシカたちのサンプルを採取や解体などを経験したことで猟師に興味を持ち、いまにつながっている。



泰阜村へ

大学卒業して、泰阜村にある山村留学や自然体験を行う NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターに就職した。ここでは3年間勤めいろいろ経験を積んで退職した。退職後、シカに関わる活動をもっとしたいと思っていたときに、地域おこし協力隊の制度があることを教えてもらい、泰阜村地域おこし協力隊として活動することになった。私の場合は、村からはこういう任務をしてほしいという村の意向があったので、その合間の時間で、シカのことをやるということになった。

地域おこし協力隊の活動内容

泰阜村での協力隊の処遇は、雇用関係は嘱託職員で、役場で社会保険等の加入、嘱託職員であったので副業はできなかった。村からは最初は要望が1つ割り振られ、そ

の後の相談次第で私は変更ができた。基本的には村内全域で、同じ時期にいる協力隊が村内で偏らないように住居は分散された。住んでいる地区以外の地区でも祭りなどの行事には積極的に参加していた。

協力隊の活動内容は、「命題解決型」と「自己実現型」があり、これをやりたいと思い、協力隊になった。しかし村からの仕事もあった。両方備えつつ、ただシカのことはどうしてもやりたいと思っていたので、4月に着任してから部署の中で早々にプレゼンをし、けもかわ project をやりたいことを訴えた。こういうことをしていくうちに、仕事の内容の割合が最初は2〜3割くらいだったけもかわプロジェクトが、1年後には8〜9割になり、けもかわ project と体験事業を進めることができるようになった。

けもかわ project とは

「けもの（獣）の皮」と「けもの（獣）かわいい（可愛い）」と「けもの（獣）のかわ（皮）いい」の3つの意味をこめてつけた。このプロジェクトのミッションは、「頂く命をムダにしない」ということが一番で、なおかつ「捕獲される獣の有効活用を通じた村づくり・ヒトづくり」ができればいいなと思って立ち上げた。

この当時立ち上げようと思う以前、グリーンウッドに勤めていたころに、南信州地域でシカに関して何かやろうと思った。このときに最初に調べたのがシカの肉屋の数であった。思ったより数があって、競合を避けるためにやめた。そこで誰もやっていない皮を使ったものを考えた。当初やり始めたときは皮に関して知らないことだらけで、協力隊の活動はまずは皮づくりから始めた。その次に製品を試作しながら何ができるかなと模索を始めた。そういった皮を体験事業に落とし込んでいこうかと思い、狩猟体験やクラフト体験も始めることにした。

次に、けもかわ project の協力隊時代の目に見える成果は、3年間のうち、400枚を皮として利用することができた。長野県の「地域発 元気づくり支援金事業」など、補助金を活用した。お金をたくさん使ったと感じているが、そのおかげでけもかわ project を進めることができた。

独立後の事業化と取り組み

協力隊任期満了後は、それをそのまま引き継ぎ、個人事業主としてけもかわ project を立ち上げた。皮をつくって販売することと皮製品の販売、獺の体験などを中心に活動している。個人事業主としての1年目は、単体で個人事業をやるのは難しく、先輩協力隊 OB の手伝いやジビエを扱うお店でアルバイトをしながら活動をしていた。こうしたなかで、皮に関わっていくと、ジビエに関してもいろいろとわかってきて、解体・加工施設が必要だと感じてきた。この当時まだ泰阜村にジビエの加工施設はなかったので、獺友会の方たちに協力してもらって、村に相談した。そして国と県、村の補助を受けて、2017年にようやく泰阜村ジビエ加工組合「もみじや」ができた。

村から管理委託を受けて、獺友会の中で私が担当者として施設の管理運営を任された。現在、「もみじや」の管理委託の委託料がメインの収入で、けもかわ project をやっている。

施設の管理運営のほか、狩猟などの体験事業を行っており、主に有害鳥獣の駆除期間に実施している。それに付随してクラフト体験で角の加工や地元の小学校での講座、夏の親子レクリエーションなどをやっている。また、地元の高校の美術の授業で、角のクラフト体験や皮づくり体験なども依頼があった。

やはりなかなか収支につなげることが難しく、個人事業の範囲内では、あまりたくさんの皮を活用できないので、クラウドフ

ワンディングを活用した。みなさんに応援していただけて無事に事業ができた。

今後の課題

今の課題は作業する人手が足りないことである。来年度からはやはり、その課題を何とかしないといけないと思ってやっている。一人で回していくのが厳しい状況であったので、昨年度の実績が200頭前後の目標が150頭前後にしかならなかった。今年も厳しい状況で、100頭前後にしかなくてない。こういったところを改善しないと、地域の中で継続的にやっていくのは厳しい状況だと思っている。また、それらを活用した料理は、泰阜村の場合は、鹿肉の人氣が少なくて猪肉のほうが人氣がある。先日、長野県知事が来られたときに鹿肉をぜひ食べるようにと言っていたが、泰阜村では消費量が少なく、現在は東京などの飲食店に卸しているのがメインとなっている。

泰阜村で暮らすことは、今のところ目標として掲げているので、ここでもかわ project を通して皮の活用がずっと継続的にやっていけること、そしてジビエ肉の加工などが継続的にやっていけるよう仕組みづくりを考えている。

■コメント

NP0 法人地域づくりサポートネット

代表理事 山内秀彦 氏

お三方のお話を聞きながら、非常に頑張っておられるなあと感じた。基本的に自分の専門的なスキルを持っていたことがこの場で



発表された方であった。そして地域おこし協力隊が地域と関わりやつながりを持ちながら地域に支援や応援を受けて活動期間内でうまくやっていたということが印象的であった。生業やビジネス、くらしとしてやっていくため、1つの事業だけでなく、いくつ事業がある、そのなかで柱となる事

業とそれに関連する事業もあることは非常に素晴らしいと感じた。順調になればなるほど、こういう地域ですから人材の確保が最大課題になるのではないかと思った。

■NPO 法人てほへ副理事長 大脇 聡 氏

3名の方は、現時点で成功に向けた道を進んでいると思う。私はIターン者だが、地元民として思うことは、人口が減ったり、少子化や高齢化が進んで、祭りや地域の必要な連携が維持できないことが現状である。三遠南信地域の中山間地域でも同じ課題となっており、そういうところにみなさんは自分の仕事として事業をやっていると思われるが、それと地域の暮らしが両立していないとなかなか事業は進められないと思った。



■大原屋コミュニケーションズ

代表 尾澤 章 氏

みなさん、目的があって現実的で立ち向かってきたんだなということが伝わってきた。現在、事業化が進んでいると思うが、独人化してしまっているというか、お三方でなければならない仕事が増えていってしまったときに、きっと時間の無さにぶつかってくるのでは思う。さきほどの話にあった会合やミーティング、行事に呼ばれる機会が増えることによって育ててきた事業が鈍化してしまうことが悩みになってくるのではないかと思った。



■質疑応答

●現在の収支と将来どれくらいしたら生活できるのか見通しはどうか。

杉浦：今年度の売上としては協力隊の時の給料よりも多くなっている。

川道：今は副業が本業になった。キャンプ場の土地が浜松市の持ち物でそれを借りる上で、NPO 法人の名前が必要でそこに所属しており、管理運営組合で収益事業を賄っている。

井野：基本的にジビエ加工施設の管理委託料が今の最低限の利益で、それに加えてけもかわ project の売上がある。

●協力隊費で購入した物は、退任後どうしているのか。

杉浦：固定費として費用がかかる搾油機などは協力隊費では買わなかった。

川道：協力隊費という概念は全くなく、1円も使っていない。

井野：売上は村の会計に入れ、備品等は引き継ぐ者がいなかったため話し合いでそのまま使うことになった。

■閉会あいさつ

NPO 法人地域づくりサポートネット

代表理事 山内秀彦氏

三遠南信住民ネットワーク協議会は、行政や経済界にも私たちの活動に協力を得られるようにアピールをしている。地域おこし協力隊のOB、OG、現役隊員のみなさんとうまくつながりを持てればと思っている。本日はどうもありがとうございました。

第26回 三遠南信サミット2018 in 東三河 事業報告書

平成30年10月29日（月）

三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）
